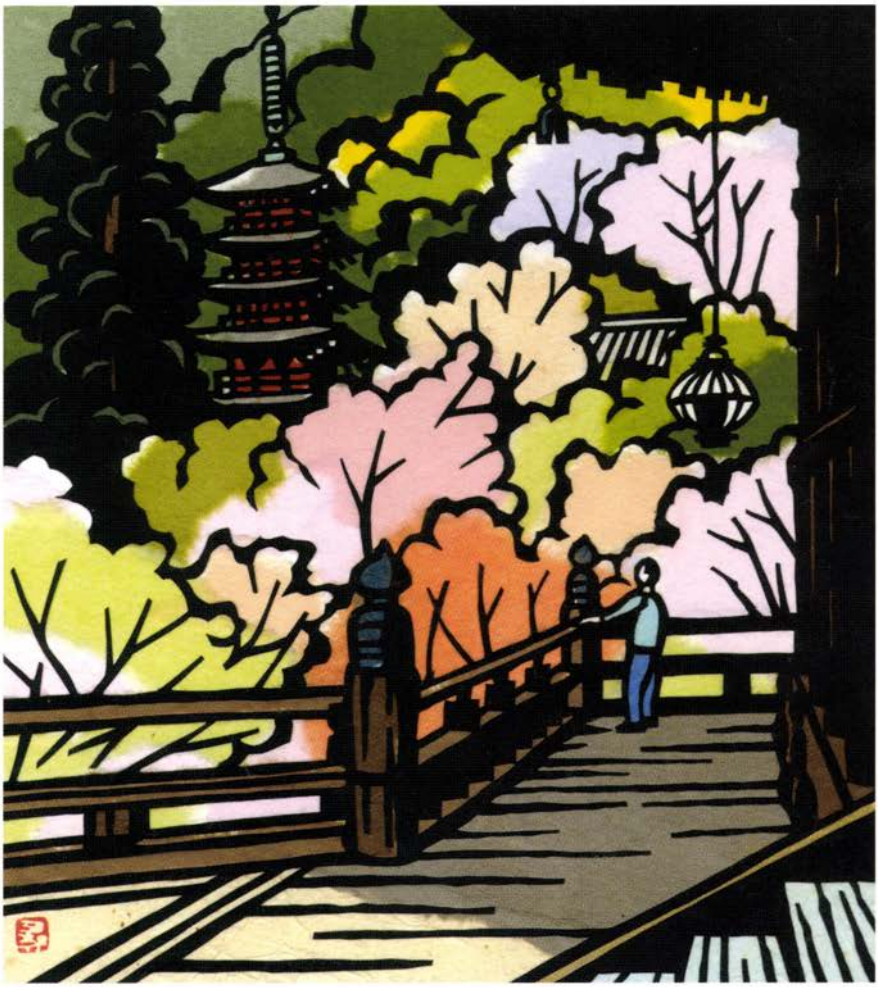
川柳塔

昭和四十一年十一月九日　第三種郵便物認可
平成二十四年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇一八号



日川協加盟

No. 1018

三月号

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー

コーキ封筒株式会社

本　　社　富田林市若松町東３丁目７番８号　〒584−0023
TEL 0721−25−7210　FAX 0721−25−9484
東京営業所　東京都中央区日本橋本石町４丁目５番８号　〒103−0021
（日本橋川村ビル４F）
TEL 03−5255−5158　FAX 03−5255−5159
http://www.koki-envelope.com

自費出版　川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美研アート

〒530-0022　大阪市北区浪花町９番４号
TEL（06）6372－1178
FAX（06）6372－1196
E-mail：bikenart@wonder.ocn.ne.jp

三條東洋樹展

小島蘭幸

1月31日、神戸文学館の玄関のポスター「川柳作家・三條東洋樹展　1月14日～3月4日」を見ながら私は東洋樹先生に初めてお会いした時のことを鮮やかに思い出していました。それは昭和43年7月、大阪の光明寺で開催された、路郎先生三周忌本社句会でした。私が二十歳の時です。先生は席題「景色」の選をされたのです。

詩にならぬ世相舞子の松が枯れ　東洋樹

とても穏やかな表情で披講をされ、しかも私の作品を二句抜いていただいたこともあって親近感を抱いたことを覚えています。本社句会から数日後、東洋樹先生から激励のお便りをいただいて大感激!!懐かしい思い出です。東洋樹展は

ひとすじの春は障子の破れから　東洋樹

「カミソリ東洋樹」の原点となったこの作品の色紙を真ん中に、写真、短冊、色紙が飾られていて、中でも二つの掛軸は特に美しいものでした。ガラスケースの中には自筆原稿、時計、ポケットチーフ、手帳、「ひとすじの春」をはじめとした自著、句誌「時の川柳」等々、どれも手に取って見たいものばかりでした。短い時間でしたが、東洋樹作品をたくさん拝見することが出来て心が豊かになりました。そして書いて残す大切さをしみじみと感じることが出来ました。

かみそりと言われた人の水枕　東洋樹

「カミソリ東洋樹」の異名は、川柳作品もさることながら、歯に衣を着せぬ評言にあったのではないかと思います。小松原爽介編「三條東洋樹の川柳と評言」を再読してつくづくと思ったことです。この本の中で類似句についても書いておられます。カミソリの厳しさと水枕のやさしさで…。

言い勝てば父の白髪が眼に残り　東洋樹

昭和32年に「時の川柳社」を創設、その指導理念として①平易簡明②十七音字③批判精神を作句の三条件として提言された東洋樹先生。

第23回時の川柳交歓川柳大会が5月13日、兵庫県民会館で開催されます。

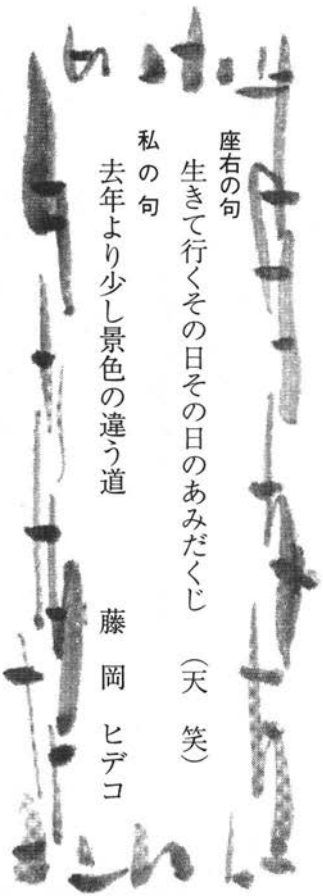
座右の句

生きて行くその日その日のあみだくじ　（天　笑）

私の句

去年より少し景色の違う道

藤岡ヒデコ



川柳塔　三月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「長谷寺」

■巻頭言　三條東洋樹展……小島蘭幸選…（1）
「桜へ」の旅……前田　尋…（2）
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…（4）
川柳塔の川柳讃歌(87)……木津川　計…（45）
自選集……（46）
温故知新……（49）
水煙抄……川上大輪選…（50）
新川柳鑑賞①……麻生路郎…（70）
中島生々庵句抄……（71）
誹風柳多留一一篇研究 79……（72）
愛染帖……新家完司選…（74）
檸檬抄「目指す」……福士慕情・池　森子共選…（78）
英語 de Senryu ③……吉村侑久代…（81）

「桜へ」の旅

前田　尋

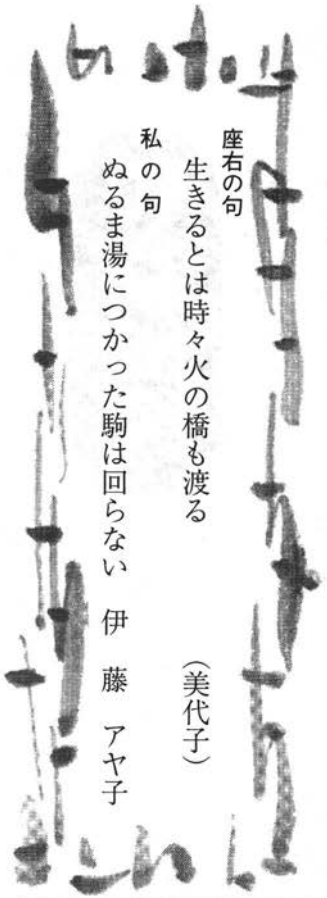
（きり絵画家）

一九九〇年頃から「桜」へと題してのきり絵作品を作ってきました。きっかけは、その頃、京都・井出の里の地蔵禅院のしだれ桜の素晴らしいことを、高杉千歩さんに教えられて描きに行ったことでした。祇園・丸山公園の桜と兄弟という樹齢二八〇年の巨木は、ちょうど満開で石垣の上、鐘撞き堂の隣に華やかな姿態でふわりと、咲いていました。

「桜へ」とは、咲いてくれた、描かせてくれた、春への命への感謝の思いを題したものなのです。実は、この前に私には「降りしきる」という雪を描いたシリーズがあります。これは一九八六年頃、滋賀の余呉の湖へ写生に行った春三月、初日は残雪が少しある程だったのが、深更降り出した雪は、一夜にして真っ白の世界へ染め上げました。

翌日、朝日が昇っても止まぬ雪を、湖畔に傘を差しながら描いたものが、作品となり、十数点余のシリーズとなりました。天

「個　性」……古手川　光選…(82)
一路集
「カ　ー　ブ」……喜田准一選…(82)
「しっかり」……有沢せつ子選…(83)
初歩教室「カラー」……鈴木公弘…(84)
秀句鑑賞┌同人吟……牧野芳光…(86)
　　└水煙抄……籠島恵子…(88)
せんりゅう飛行船⑮……新家完司…(89)
津軽発おもしろ景色⑧……髙瀬霜石…(90)
本所深川を歩く(二)……松永浩一…(91)
武田帆雀さんを偲ぶ……両川洋々…(92)
■エッセー　川柳と共に……清川玲子…(93)
二月本社句会……(94)
各地柳壇（佳句地十選／北野哲男）……(98)
三月各地句会案内……(112)
柳界展望……(114)
■編集後記（ひとこと／鴨谷瑠美子）……朱夏・能子…(116)



座右の句
生きるとは時々火の橋も渡る　（美代子）

私の句
ぬるま湯につかった駒は回らない　伊藤アヤ子

から降りてくる灰色のふわふわとしたものを見上げていると、上昇して消えてゆく我が身が、静止した時間の中で永遠になるような気がしました。桜にも同じ思いにさせるものがあるように私には見えます。

幼い頃、郷里丹波の家の近くの大きな川に繋がる小川の土堤には、十数本の老木の桜並木がありました。近くには父の働くテレピン油の工場があって、桜のトンネルを抜けて訪れたことも再々でした。

毎年訪ねる桜の旅、西吉野村では、山の斜面に植えられた何十本もの若い桜は、生け花用で、ころころと咲き誇り、吊り橋から見るその風景は、桃源郷のおもむきを見せ、いつまでも見飽きないものでした。

長谷寺の奥の院では、山道を一時間程も歩いて、本当にあるのかと疑問を抱きながら辿り着いた先に、満開の花に出会えれば、疲れももの数ではありません。誰もいない山中で一人、巨木と対話しながら、描かせて貰えることに、生きていて良かったと心底思えるのです。

ねがはくは花のしたにて春死なむ
そのきさらぎの望月のころ

と詠んだ西行法師に習いたい思いです。

藤井寺市　鈴木いさお

どうせならとことん愚直貫かん
芸術を超えたかラファエロのエロス
暇乞い決めホスピスの友見舞う
眠る母慈母観音に見えてくる
スイッチを入れたまんまで小休止
どこで無くしたか極楽行きの切符

松江市　松本文子

祈り続ける祈ることならまだ出来る
お酒にも飽きた長生きしすぎたか
夕焼雲は哲学の一つなり
森は疲れて梟はもう鳴かぬ
陽が長くなった分だけ忙しい
その後の話聞きたいけれどもういいの

大阪市　谷口義

だいたいまあまあそこそこ元気です
条件をつけるとこの世にいられない
私の流儀でお墓参りする

小島蘭幸選

準備体操してからのらりくらりです
曇っている日はモノクロになる桜
転けそうになった処に蕗の薹

倉吉市　牧野芳光

円満を妻の小さな掌が囲う
梅干しの歴史唐辛子の歴史
新年になり丁寧に歯を磨く
ありがたいことに欲望まだ尽きぬ
爺さんになったか顔が利きだした
金にならぬことで手帳を埋めている

堺市　桒原道夫

初老かなウエストボールばかりくる
遠いこと遠くのままに歯を磨く
電柱のない街であっけらかんとした恋
鶴舞いおりし雪原白深む
車窓から千匹の蝶飛ばさんか
震災後も坂本九の青空よ

米子市　竹村紀の治

厨房に男ひとりの具を刻む
強がりも淹れて珈琲ひとり飲む
お願いは延命長寿だけにする
サッカーと駅伝当てに三箇日
二日酔いそれも元気な証です
コーヒーはふたりが美味い口惜しいが

和歌山市　木本朱夏

蟄居して十三日の金曜日
逆らわぬようにカーブに身をまかす
しぐれきて人の恋しき銀のペン
逆転の明日を握っている冬芽
乗り換えた駅から雪になる予感
身の内の荒野に春はなお遠く

弘前市　髙瀬霜石

春眠や遠くで誰か呼んでいる
違う靴履けば違って見える街
しあわせのおすそ分けして貰う蕎麦
折り返し点で蟻だと気づく蟻
読むまでは億劫読めば二重丸
ジャブにジャブパンチにパンチこれも愛

橿原市　居谷真理子

ああこれは吐息で飛んできたメール
神様の許しなさいという返事
あったまりました　あなたの声聞いて
女王の姿勢で独り食べている
それならば真っ赤に枯れてやりましょう
煮込まれた人だ温かさが違う

愛知県　早川遡行

判決はメタボリックシンドローム
辛抱ができなくなってからの医者
東京の夜景に酔った隅田川
六本木ヒルズの夜景マグカップ
真夜中に間違えましたスミマセン
大阪から日本を変える革命児

和歌山市　牛尾緑良

ネジ巻けばまた道化師に蘇る
しがみつく事がまだある大晦日
会話ならビールの泡としています
瓦礫にも春野仏も笑み給う
道草をしてもせいぜい喫茶店
争ってみてもやがては比翼塚

松山市　髙橋宏臣

私だけ喋る二月の喫茶店
くたびれた靴がピッタリはまり過ぎ
残り火に咳き込む寒い老いの夜
寄り添って雨の匂いに包まれる
冬の景単純思考で生きている
遠花火あんな夢ならまた見たい

政権が淀む一億評論家
ゆっくりとつららの雫春のおと
思い出したように聖書の塵払う
思案するたびに母似の爪を噛む
肩書も脱いで下さいにじり口
ひこばえが安楽死する雪つもる

黒石市　佐藤古拙

我が家にも希望の星がひとりいる
着飾って神経内科へと通う
海の男のロマンは果てしなく青い
賞味期限切れた少年期のロマン
生きてきた証裏表紙を飾る
祝電の半数ほどは恋がたき

鳥取市　両川無限

今時のお年寄りはと言われそう
年金支給御上に貰う訳じゃない
70億激しくなろうサバイバル
今日はもう仕舞いなさいと陽が沈む
自然と共生逆らわず侮らず
ピョンヤンの号泣演技とも思う

松山市　古手川光

雪月花その折々にある祈り
籠城という手があると膝の乱
ギリシャ発の寒波わが家の財布にも
ときめきという点滴で老いを討つ
仕事始めの陽気な若い清掃車
花一匁よせいの友は温かい

河内長野市　山岡冨美子

嫁姑おせち料理で弾んでる
振り向かず晴れた明日の絵を描く
嫁ぐ朝娘の挨拶を照れながら
三世代絆がっちり床柱
ローソクが揺れた願いは叶いそう
鍵穴から覗くていどの視野である

神戸市　山口光久

歩行困難背伸びしすぎていたらしい
負けた日は厚底ブーツ履いてみる
どんぐりが大樹になったものがたり
たましいが行方不明になる日暮れ
人間のラストこんなに脆いのか
今日がラストと何時も思って生きている

鳥取市　倉益一瑤

年始め多作多読という決意
アナログを愛し人間取り戻す
咲けば花散ればゴミだと知らされる
背伸びした分だけ私不安定
憧れが強くて見失う怖さ
まだ未熟不惜身命とはいかず

出雲市　竹治ちかし

福寿草ぽっと開いたいい予感
災害の痛み風化をさせまいぞ
チャレンジの心大事にして豊か
エネルギー溜めて春には咲くつもり
負けん気がちょっぴりあって元気です
辛くても笑顔美人を忘れない

香芝市　大内朝子

風除けに少し太目の孫と居る
ダイエット先延ばししてカニの鍋
泣いて笑って笑って泣いてひとりぼち
正直が取柄わたしの丸い背な
通いなれたコンビニにいる安堵
つまさきの温かさまで抱きしめる

吹田市　大谷篤子

古くさい慣習守る蕎麦の花
どやどやと来て寂しさを置いて去ぬ
多情多恨傘寿の部屋にある歴史
ひたむきに生きた背中のタイヤ痕
さよならの浜に響いたハーモニカ
風評被害痩せた農夫が咳をする

島根県　伊藤寿美

召しあがれとイカナゴはくの字になった
リニューアルの大阪駅が遠くなる
三杯目も許せ出雲の蜆汁

堺市　志田千代

おとぼけが出来るのでまだ大丈夫
ウォーキングするためプール通いする
恐ろしや兆から京の世になった

岸和田市　岩佐ダン吉

反論を浴びて私が磨かれる
進化から僕が取り残されている
人間の形になっておりますか
命かけ言いたいことがありますか
人波の中でひとりの旗上げる
最終章やっぱり有難うと書く

松山市　宮尾みのり

青空はまだ我のもの四面楚歌
謙譲の美で負け組になり下がる
自販機のバナナ小腹を落着かせ
やじろべえはかなし右揺れ左揺れ
偕老同穴昔むかしの物語
コンビニで郵政省の用が済み

西予市　黒田茂代

絵手紙の水仙が笑む春ですよ
やがて来る春掴んでる冬木の芽
蕗のとう旬を忘れぬ友がいて
風向きが変わり気になる星回り
マシュマロの弾力あのひとのこころ
終バスに通勤乗客が一人

茨木市　藤井正雄

継ぎはぎの帆で五十年夫婦舟
ボケ防止大義名分よく遊ぶ
門限が守れなくなる恋二章
立ちうどんからだ斜めに割り込まれ
友達に戻るあっさりした別れ
ワンルーム経済支援祖母が来る

芦屋市　黒田能子

元気でいますか十年後のわたし
ピンチです飾ってなんかいられない
辻ごとの風に行く道教えられ
省くだけ省けば軽くなる暮し
決心を促す風を読んでいる
ハイカラなおばあさんたち増えている

和歌山市　武本碧

埋み火がほのかに残る身八口
カラフルに日々の暮らしを織る日記
体裁をつくろう影がうとましい
反省が転がるデザートのように
余生なおドナーカードを抱くいのち
捨て上手かなりスリムになるこころ

河内長野市　村上直樹

豆粕と芋で昭和のド根性
犬掻きで世の荒波もマイペース
誤解溶けストンお腹が空いてきた
輪廻転生母なる川の暖かさ
被災地の野に咲き誇れ福寿草
しばらくは彼岸手前で立ち泳ぎ

吹田市　山本希久子

歳月にすまぬすまぬが積んである
酔わせたのはほんの些細な出来ごころ
目力をこめてごめんね有難う
クラクションに叱られている自転車だ
直線裁ちの着物からだに添うてくる
夫婦茶碗の明日を思う寒の月

八尾市　宮﨑シマ子

通帳が政治の悪さ知っている
いい事を見つけに道を折返す
階段の上は嫁さん住むお部屋
ふるさとで待っていたのは墓ひとつ
次の大事はきっと私のおとむらい
山に餌あれば山に居座るけものたち

尼崎市　春城年代

柿紅葉終業式の鐘が鳴る
カタログで頼んだ春着やっと着く
閻魔大王あいまに扉ノックする
また飲みましょうと婿殿の年賀状
見果てぬ夢にときどき肩をたたかれる
お重に詰めるほどでもない独居

和歌山市　古久保　和　子

晩学に辞書繰る指が乾いてる
ポケットのゴミは点検して捨てる
絵手紙のカボチャの種を蒔くことに
生粋の野良で世間を心得る
正体不明が冷凍室で凍ってる
冬眠のあいだに草の芽が伸びる

藤井寺市　増　井　ヨシ枝

氏神へ犬も一緒に初詣で
衣紋掛け晴れ着吊るしたまま二月
車中化粧うっとり見てて乗り越した
猫だって誉めるとウインクしてくれる
裏表見せて落葉も人も散る
澤さんの和服姿も日本一

鳥取県　細　田　裕　花

雪かきに息切れがする汗も出る
お正月疲れは見せぬ母の意気
奮闘のお節にのびる箸の数
記念日にハートマークをする暦
写メ送る故郷の空は濁り無し
モットーは楽しく生きるルビー婚

府中市　藤　岡　ヒデコ

入学と卒業を待つ春ごよみ
年金がテンヤワンヤの孫七人
藪椿友も其の後は変りなく
冷え込みの予報にひとり住む姉を
団欒のチャンネル権は手離した
春が来る足音聞いた水仙よ

竹原市　岩　本　笑　子

運命と思う双生児を嫁がせて
拍手を夫と息子と私と
森羅万象また正月が巡り来る
川面キラキラ初春の朝である
背筋伸ばして水仙を見習う
疑心暗鬼山ほど薬飲んでいる

美作市　大　石　あすなろ

木枯らしを引き連れ冬の使者が着く
毒舌に磨きをかけて来た夫
言い違いまた聞き違う老いの耳
鍵穴を縺れ話が出て行った
目も耳も塞いで今は充電中
たあいない噂が走る冬日和

西宮市　亀　岡　哲　子

はくしょんが出てすっきりと年明ける
宅配で正月が来る大晦日
生姜すり葛湯とろりと節電す
コンサートもランチも一人ワンコイン
重いなあまたも買わずに出る本屋
就活の黒いスーツで野に放つ

熊本県　髙野宵草

財産は無いが家族で助け合う
油断した僕を嗤って時刻進む
七度目の竜が半分呆けて来た
助手席が騒いで困る街の景
羞しく優越感を着る晴れ着

熊本県　岩切康子

閉め忘れ県道八キロ引き返す
頼られて木枯しの中突っ走る
遊歩数増やし体調整える
初会議髪染め女意識する
霜解けにオットットットこけました

札幌市　三浦強一

趣味の会還暦古希は若いもん
転ぶなを呪文に歩く骨密度
補聴器は話佳境で電池切れ
欠点も長所もないが生きている
「春の海」聴けば雅になる心

札幌市　小沢淳

五線譜の音符を越えて再会す
毒舌は他人事なら心地いい
減塩に馴れて仏に近くなる
中古品へたに磨けば壊れだし
裁判が終ったなどと二十年

砂川市　大橋政良

樹氷キラキラゆっくり寒が去ってゆく
刃物研ぎます季節が動く春彼岸
好き嫌い俺の人生模様です
一枚の剥げたウロコと旅に出る
孤独死の話を聞いた隙間風

黒石市　相馬一花

バイアグラ知らぬ男の力瘤
初恋の欠けらをぐっと抱き締める
アリバイを主張している蜆貝
めり張りの話術に長けている熟女
裏技で妖怪なんか締め上げる

平川市　小寺花峯

病室の会話暖房となる暖かさ
勝ち組も負け組もない蟻の列
失敗の連続で陽はまた昇る
欠伸する日があって幸せとする
ジュゲムジュゲム涙を拾う青い海

弘前市　福士慕情

雪マーク続く津軽の冬ごもり
しばらくは耐えるしかない雪蛍
自動車の轍が朝の通り道
除雪した後へ除雪車やってくる
冬将軍膝の弱点突いてくる

床の間の旭日拝み年の明け
みかんが大き年々小さい供え餅
散歩ねだらぬ三毛を家族の一員に
プレートの所為　海彦海を憎まない
生業に漁師いきいき再起する

弘前市　今　愁女

孫の手紙こころを癒す短詩調
冬晴れ間日向の居間に感謝する
ノンアルコール期待の泡も物足りぬ
あれやこれ毒を食らって生かされる
つらい日日昔を笑い語る母

弘前市　岡本花匠

貸した金あるから必死に生きてやる
外食で妻のエンジン休ませる
サプリメント浦島太郎の夢を見て
二人乗るバスにも暖がとってある
なでしこを植えて丈夫な孫願う

弘前市　須郷井蛙

橋渡り終えるまで灯を絶やさない
白寿へのレールを敷いた第一歩
叩かれて一気に噛る青レモン
太陽と友だちになる風となる
精一杯尽した悔いのない出家

青森県　松山芳生

今年こそきっといい運舞い下りる
うっかりが多い政治家の品格
普天間に吐き捨てられたガムの数
女子会は人気で男子は群れない
無防備に行き成り直球飛んできた

さいたま市　星野育子

断捨離の壮快感は分るまい
酩酊の脳に閃く帰巣性
相模湾今日も穏やか手を合わす
プロポーズ隔靴掻痒めくメール
退屈へ引きずりこんだ長電話

横浜市　菊地政勝

大阪が都心に向ける猫じゃらし
雪だるま知らず育ったオボッチャマ
高級車優越感が不覚とる
試食品八割は買うとオトコタチ
不況風デパ地下はお嫌いですか

横浜市　小野句多留

自問自答波風立たず一人居は
七十億乗せて地球よ止まるでない
エイエイオー気合だけでも入れて元旦
来世を走る相手は亀と決め
亡き夫のメール届かず年が明け

川崎市　三浦きぬ

金婚の節目も同じ米を研ぐ
水を飲み空気を吸える有り難さ
寅年の友はほとんど未亡人
爺ちゃんに似た鈍行のひとり旅
シャッター音行く先々の車輛基地

富山市　島　ひかる

千年の風冬ざれの古墳跡
復興にエール送った松も枯れ
初旅のプラン炬燵の世界地図
大釜で野炊きの煙味噌匂う
惚けた真似笑い飛ばして座を丸め

静岡県　薗田獏沓

歓迎はされぬお節をまた作り
原発が無くても日本生き延びる
長生きはしない地震が怖いから
バーゲンを待って今年の流行物
靴を見て人を見るとか見ないとか

可児市　板山まみ子

賑やかな正月らしいゴミの量
箸使い器用に孫の左利き
目的に合わせ私が選ばれる
試すまで大事にされるモルモット
阿弥陀様きょうは女性でいてほしい

犬山市　関本かつ子

ハイタッチ元気パワーを貰い受け
慎重になった再起の足さばき
四季咲きにそう無理するな疲れるぞ
孤独にも耐える力を持ち合わせ
オクターブあげて誘いの電話置く

犬山市　吉田幸子

裁縫が好きでなくなる糸通し
お喋りをせねば口角下がりだす
水戸黄門最終ですよ仏さま
強いなぁ真央ちゃん泣いていいんだよ
一年を括る絆の墨太し

犬山市　金子美千代

遠くから見れば何でもないことだ
雑用の多さ泣いてはいられない
涙もろくて守れない密か事
よよと泣くのは畳の上と決まってた
遠く近く沖の景色が見えてくる

京都市　高島啓子

トップよりブービー賞にある誇り
若しもの夢どんと膨らむ勝手でしょ
ボクの鼻短かければと象が言う
老人力生れ変った道の駅
子育ても父母も夫も走馬灯

京都市　桝本宏子

頑張りますなんと誓いの軽いこと
父さんは犠打が多くて目立たない
豪快な父が似合わぬ鶴を折る
馬鹿になれ格言念を押し過ぎる
偏屈と変ってしまう正義感

京都市　坪井孝一

スーパーで自由に買物する旦那
強面なのになぜか孫にはもてる人
三度でも白味噌雑煮飽きぬ人
凧揚げる子に幸あれとお正月
目も耳も口も開いて見るテレビ

京都市　西村益子

腹時計だけは正確定年後
なごやかな家庭誰かがあくせくと
思い伝え指折り数え待つポスト
菓子箱に添えてあったは人の欲
トラブルなく生きる助けの遠眼鏡

京都市　藤井文代

そっと拭く涙は子等に見せられぬ
嬉しい日犬も笑ってくれている
ノクターンを聴こうしんしん冷える夜は
雪しんしん足跡すぐに消えてゆく
好物並べあと何回の夕御飯

長岡京市　山田葉子

熟年を元気印で面白く
この春をどう生きるかと問う桜
節電と元気に体温アップ術（全身全力呼吸法）
七十五歳最終章が動き出す
しっかりと目指す涅槃の夢を持つ

亀岡市　井上森生

亀の首平和な池で長く伸び
足の指手の指グーチョキパーをする
知ってるか浅知恵試す奴と居る
縦横にかぶりを振って黙っとく
成り行きで大風呂敷に座ってる

大阪市　古今堂蕉子

だまされて笑う楽しみだってある
皆と仲よくやれる努力は惜しむまい
遊ばれていてても遊ぶ努力する
譲られた席で正直ホッとする
明日の匂いする人坐るお隣へ

大阪市　吉村一風

喜寿の春少しは色香匂わせて
縁とや五七五で笑い合う
太陽がみどりの色を出す魔法
老いぬればチャップリンと寅さんで
再読の本積んでいる年始め

大阪市　川端一歩

大阪市　岩崎公誠

らせん階段天国までは無理らしい
ロボットも口軽いのと重いのと
初心者のマウス大事なとこ外す
ユーザーの目線で決めたヒット作
轡りは喧しいけど知恵はない

大阪市　小谷集一

幸せの構図は妻と祝う屠蘇
ロスタイム妻のタクトで弾みだす
リップサービス美しき嘘を吐く
ベテランと言われ光陰矢の如し
正と邪の真ん中辺で陣を張る

大阪市　津村志華子

御祈祷がすぎたと思う長寿箸
年金の財布膨らむことも無し
来た道は坂転んだり怯んだり
乱切りは妻の気分か大根煮
欠点をいっぱい抱いて生きている

大阪市　神夏磯典子

三寒四温亡夫にも春が来る
川幅の広さ私を抱いてくれ
労りへ素直になった痛い足
色気ない手押車を道連れに
二十錠食後のデザートのよう薬

大阪市　板東倫子

節電で久々に見る丸い月
底冷えの厨七草粥香る
錯覚の風評被害まだ消えず
ぎこちなく男同士のエコ炬燵
老夫婦千本釈迦堂の大根炊き

大阪市　近藤正好

水琴窟四季を奏でる技がある
九条が未来社会を指し示す
とりあえず予防接種は気休めに
原発に頼らぬ知恵はたんとある
心地よい温もりのある色が好き

大阪市　升成

間を置けば風が言葉の刺をとる
筋通す視線が凛と澄んでいる
乾杯のグラスカチンとまず序曲
着飾った言葉はいらぬ雪の富士
壇上で以下同文にまとめられ

大阪市　井丸昌紀

風評の割に意外とぬくい人
背中掻く痒い所が逃げてゆく
街並みが日暮れ汚れも消えてゆく
悪ぶっていてもやさしさ零れてる
偶像を壊してやっと見えるもの

大阪市　大川桃花

おでんに辛子あなたに私欠かせない
妻病んで買った惣菜口に合い
釣堀の鮒にもあろう馴染客
税金で暮して知らぬ不況風
地球から締め出されそう愛煙家

大阪市　伏見雅明

善人は嘘を吐くとき目が泳ぐ
力抜くすべを覚えて楽になり
権力の座下り旧悪暴かれる
心配でついて離れぬ影法師
少子化の無策を嗤う鰊の子

大阪市　原田すみ子

幸せで甘み辛みに鈍くなり
裏表見えて身動きままならず
口角を上げてやさしさ取り戻す
椅子取りゲーム座った椅子は離さない
漠とした不安老化というものか

大阪市　坂裕之

いい人でなくていいんだそれなりで
過ぎ去れば何てことない人の口
欲あって鳥居の前で躊躇する
爪先で立ってどうにか先が見え
悠久の時空彷徨う塵ひとつ

大阪市　榎本日の出

無い袖も老いの見栄です振ってます
幸せを掴んだつもり風の中
急に会いどちらも名前出てこない
私の特効薬は歩くこと
マニフェスト大風呂敷は開きあきる

大阪市　平嶋美智子

節電はずっと前からしています
精一杯咲いてる小菊ありがとう
被災地を抱いておあげよ天の川
雑草に埋もれる小川水きれい
クラス会の誘いに雪のたより載せ

大阪市　榎本舞夢

はつらつと孫達が来るお正月
節料理見事カラッポ二日目に
好天気百歳の母初詣で
大吉を引いても一度手を合わせ
二ン月の誕生日等忘れられ

大阪市　奥村五月

山ほどの見合で当てた残り福
やれやれと一句うかんだ仕舞風呂
神様は不信心にも福あたえ
ぼんやりと景色ながめて独り旅
盆栽の父に甚平がよく似合う

大阪市　佐藤忠昭

妻が留守手抜き手早くカップ麺
備蓄したマスクそろそろ出番です
何故だろうマスクをすると美人です
パンの耳旨味凝縮捨てられず
勿体ない勿体ないと太ってる

大阪市　江島谷勝弘

とりあえず生を頼んで燗にする
自由だがときどき妻が制御する
歳が歳湿った話ふえてきた
貴方には涙がないと妻がいう
消費税打出の小槌あるまいに

大阪市　中村叡子

ワックスのかけぬ蜜柑は味がいい
優しさのこもる厳しいお節介
ふと家の軋みに亡夫帰りしか
ピリピリと顎尖りゆく孫受験
苦労した大正生れ老い深し

大阪市　田浦實

菊花展蜜蜂来てるほっとする
M9でも日本列島生きている
蟹食べる音だけ聞え静かなり
北陸線列車の音も里なまり
風評は放射能より恐ろしい

大阪市　小泉ひさ乃

八十路にもちょっぴりふくらむ夢がある
六十年いろいろあったもと他人
世の中を陽気に生きて敵がない
年金が四月の義理に悲鳴あげ
現世にドラマもどきのサスペンス

大阪市　笠嶋恵美

小袖展だれが着たのか気が残り
会うてまで姉妹けんかのあほらしさ
第九聴く指揮者も歓喜涙ふく
銀行で道をきいたら地図くれた
ふりかかる諸行無常も生きてこそ

大阪市　熊代菜月

師の顔を思い出させる句に出合う
元気出そ負けるもんかの合言葉
世の中は泣いて笑って鬼ごっこ
失言の自分を責める流れ星
物忘れみんなお年のせいにする

大阪市　池上清治

天外のとぼけ聞く銭惜しくない
とぼけても顔に本音が出てしまい
最高のとぼけ記憶にありません
優しさに眼が潤む年になり
辛口のひと言優しさが滲み

大阪市　澤田定子

脳内は忘れてないが口に出ず
大阪都格差を見せるプラタモリ
注連縄が少なくなった門構え
金正恩若い外交期待する
関西発朝のドラマが見逃せず

大阪市　寺井弘子

良い年の絆の賀状待つポスト
ひと間だけ大掃除して客を待つ
新しい手帳に抱負書き込んで
無病息災七草粥が五体染む
四角より丸いポストにある安堵

大阪市　松尾柳右子

帰省した娘が友と逢い忙がしい
正月の青天続く良い年に
遠方の友のお喋り懐かしむ
親友の病い気になる日暮れ時
買い物の何かひとつは忘れてる

大阪市　津守なぎさ

自転車にブレーキテストさせる母
雪模様被災地偲びねつかれず
人力車行き交う京の初詣で
ランドセル施設に届く春がきた
カラフルな薬あふれている元気

堺市　村上玄也

なでしこが我が家の女性威張らせる
歳末の喧噪外に居るわたし
肩書に元と書かれている名刺
早よ寝たら早よ目が覚める齢となり
居眠りの常習犯になりました

堺市　柿花和夫

年賀状俺もお前も空元気
朝市の続きのような道の駅
おしゃべりの寡黙に油断してしまう
大海を軽軽越えてきた不況
遊び代稼ぐ陽気なフリーター

堺市　奥時雄

願いごと決めず神前まで進み
お節料理食べつくすのは難かしい
招かれて料理の好み言い出せず
手のひらで踊っていると気付かない
アイドルは踊りの合間みて歌う

堺市　加島由一

玉手箱手に団塊は始発駅
飲めないと分かり二次会誘われる
よく生きた女で百の顔を持つ
島がまたひとつ消えそな日本地図
親不孝妻不孝して生きて来た

清貧を忘れ乏しくなる心
親の歳超えて小石と語りあう
熱燗がほしい日もある胸の霧
古里の山があるから頑張れる
灯台の夕陽に波の音を聞く

堺市　遠山唯敎

ゆっくりと何遍も読む同人誌
笹舟も風の機嫌を読んでいる
年寄りの我慢は音もなく破れ
物作り天職とした父の指
親として未熟だったと子に詫びる

堺市　山本半銭

着脹れをスマートに剥ぐ春の風
プライドも淋しさに負け朱に交じる
さりげなく贈りたかったチョコ一つ
物指しを使い分けてる広い胸
我が家でも重い日続くかたつむり

堺市　西村りつえ

幸いに子孫に美田のこせない
猛犬に注意と書いて猫を飼う
温厚に見えた兎は怖かった
締りないけど笑ってる竜が好き
デジタルも少し齧ってアナログ派

堺市　大隅克博

エプロンから手品のように飴が出る
凍てついた心に熱燗がしみる
あの談志の魔法にもう掛かれない
紙とペン余生楽しむ友とする
経営者現場知らぬと言っておく

堺市　内藤憲彦

聞き役に回ると透けてくる本音
まっすぐに生きた証の轍たち
真ごころという宝なら持ち歩く
有り難う毎日言える幸がある
歳月が心の傷の妙薬だ

堺市　大久保のん子

寝転びも出来ぬ半畳ほどの墓
老いて知る幸せはとは絆とは
遅いぞと蜘蛛が巣を張る午前二時
雑草と言われたくない野の花よ
思い出のセーターほどき夢を編む

堺市　澤井敏治

暇同士なのにせわしく刻むネギ
強くなり過ぎて愛しさ褪せてくる
後ろ行く妻が前行く定年後
三つ指で迎えた夫こき使う
ヘルパーにこっそり頼む酒のあて

堺市　荻野像山

堺市　源田八千代

元旦に赤ちゃん連れの年始客
付け外しも人頼みなり注連飾
人混みを避けて住吉太鼓橋
一人暮しの従妹と和む冬の午後
居間風呂場に暖房入れてから起し

池田市　栗田久子

やさしさを映す二月の窓ガラス
福を呼ぶドアはしばらく開けておく
川風が少しぬるんで安らぐ日
菜の花が咲いたたよりが湖東から
浜に出て耳でとらえた音景色

和泉市　横山捷也

墨で書く賀状今年も恙なく
イヤリングきらり女が泣いている
大吉を閉じて開いて読みかえす
言い負ける事も上手に生きるコツ
老いてなおスタートラインをさがしてる

泉佐野市　山本蛙城

朝と晩釈迦のおコトバ利他真似る
自画像は阿弥陀被りのハンチング
昇り龍今年の景気期待させ
子等器用ブレークダンスで地球刺す
日本発レシピにたまごかけごはん

茨木市　島田誠一

闇参道心恵方へ初詣
水底に沈む寒鯉僕の冬
河豚鍋を囲んでしばし世をぼやく
敵だった国へお詫びの安ツアー
暴れぬよう持病と妻に機嫌とる

大阪狭山市　矢野梓

お正月迎えるたびに友が減り
ささやかな夢を重ねて傘寿喜寿
喜寿の春握り拳の力抜く
後回しした事全部忘れ去り
口先でうろうろしてる記憶力

交野市　森本弘風

予定表書き入れ夫婦の暦完成す
シルバーセンター働く弟十歳若い
年賀状未だ来ぬ友三十日過ぎ
薬より若返りには別嬪さん
割り勘にいつも微笑で僕が居る

河内長野市　坂上淳司

金高騰箔入りの酒濾して飲む
締め込んだ帯が悔しいフルコース
午前様チェーンロックが妻の意地
社内一働き手だがまだバイト
てきぱきと社員指示しているパート

ぐずぐずと衣装選びで遅刻して
常連と勘違いされ奥座敷
旅の宿蟹三昧で舌つづみ
お開きに腰を上げない酔っぱらい
流し眼のママに声かけ袖にされ

河内長野市　黒岩靖博

楽しみは軽くひねった一行詩
分別がついて理想がかくれんぼ
貧乏性やっぱり出るか下心
不始末は呆けたふりしてやり過す
価値観の違いが事を荒立てる

河内長野市　山室光弘

陽君だけ張り切っているお正月（3歳）
じいさんはあれないこれない探し物
単身赴任の婿は疲れて横になり
長女の婿はじいさんの話相手
どうぞ予算上手に使って国のため（新年度）

河内長野市　植村喜代

捨て猫を庇う園児に炎立つ
就職を節目に娘羽搏いた
正月は箱根マラソンワイン付き
松竹座歌舞伎ファンも若くなり
休み明け元気で集うデイサービス

河内長野市　水谷正子

正月は何回してもいいものだ
出勤のつもりせっせとデイサービス
この賀状いつまで手書きできるかな
成人式私の頃はなかったな
漬物が引立て役の祝い膳

岸和田市　堤楢代

箱根駅伝襷の絆脈々と
民主党天下を取れば声が無い
三が日食べ放題で超メタボ
カトレアが日差しを浴びて背伸する
泥鰌殿もぐり込むのが能じゃない

岸和田市　森元ふみよ

甘い点ときどき貰いやめられぬ
焼酎をワインに変えた旅帰り
日本を老人力で変えてやる
髷切ってころっと愛想よくしゃべる
まっすぐにおいで僕より他見ずに

四條畷市　吉岡修

終活に冥土の土産買っておく
慶弔費の追加予算を組み直す
ブーメラン戻って来ない反抗期
何事も起こらず傘を折りたたむ
被災の年明けて祈りの鶴を折る

吹田市　太田昭

吹田市　木下敏子

難しく考えないで手を合す
正直に言えば心配するだるま
目標はペダルを踏んで八十路坂
水仙のようにばあちゃん背を伸ばす
捨てようと思った服の返り咲き

吹田市　野下之男

どじょうでもそう簡単に掬われん
万歳と悲憤で締めるダム騒ぎ
悲しみを少し減らして千の風
銀盤に夢を描いてる蝶の舞
寒山寺流石の鐘も疲れます

吹田市　瀬戸まさよ

エッセーも自分史になる傘寿です
家族より理解の深い君がいる
家計簿も日記も記録だけですの
大さむ小さむ昔の冬がいとおしい
ある日突然誰もいなくなる

吹田市　須磨活恵

三月の雫希望の芽が膨れ
捨て切れぬおしゃれ心恋ごころ
一句詠む度に私の灰汁が出る
寒椿命の強さ赤々と
ほしいもの奪って取れるものじゃない

高石市　浅野房子

初詣で今年も無事に行けました
正月の山盛りテレビ疲れます
プライドはいつかどこかへ置き忘れ
玉虫色曖昧模糊だけど好きだ
自分のこと自分でせよと言いきかす

高槻市　片山かずお

主権を妻に渡して今日もつつがなし
笑顔と元気連れてカルチャー巡りする
往年の身軽さ消えてよく転ける
きっとA型律義に光る信号機
制服の中でも光る子は光る

高槻市　初代正彦

神様に会える気がする霧の山
おおげさに種も仕掛けもない仕草
人だかり不況を知らぬ店もある
このチャンス神がくれたとやってみる
石段のこんぴらさんが懐かしい

高槻市　杉本義昭

凛として香る机上の寒椿
か細いがあなた保険にして生きる
妥協するたびに仮面が厚くなる
カフェテラス決まって座る席がある
飾ってたワインを飲んだのは誰だ

高槻市　富田保子

ヨチヨチを無傷で返し二日寝る
荷を送る父の目許が寂しそう
堂々と墨絵の筆にある大志
笑い声傘寿の母を囲む宿
無縁墓地つらい歴史が眠ってる

高槻市　富田美義

一念を貫き咲いた胸の薔薇
俺はまだ男を捨てぬ歯を磨く
瓢々と続く白線のこり道
あくせくと生きて臍の緒つけたまま
潔く散りたいけれど咲いて無い

高槻市　井上照子

青い龍床の間に居て魔を払う
婿殿のめでたい言葉で膳祝う
老人会芸無し猿が部屋の隅
大切な鍵出て来たと大はしゃぎ
お薬を飲んだはずだと数えみる

高槻市　島田千鶴子

優しげな言葉できつい灸をすえ
氏神さまマンション群に囲まれる
一年を無事に過ごせて誕生日
年明けは歯医者目医者のはしごから
読むほどに理解できない解説書

高槻市　佐甲昭二

鍋つつき行きつ戻りつする噂
お礼など言うから内緒すぐにばれ
リストラの訳たっぷりと聴かされる
洗い流すと決めていたのにふっ切れず
安らいだ暮しに仮面要りません

高槻市　峯村勲弘

サスペンスあわやその時コマーシャル
朝霜のように消え行くマニフェスト
ダルビッシュやっぱり君も空洞化
岸和田弁カーネーションで全国区
なんでやねんピンチの後にまたピンチ

高槻市　安田忠子

年越そば作る途中で年明ける
書初めに願いを込めて昇り龍
大人びた子の賀状見て笑み貰う
ツケマツゲ人形のようなギャル二人
知事よりも市長の方が偉く見え

豊中市　水野黒兎

坂道のてっぺんにある若い風
片鱗は粘土をこねる手に芽生え
にわか雨しばらく時を止めるカフェ
距離を置きかえって事実よく見える
ありがとうは一言で効く潤滑油

断捨離のつもりが場所を変えただけ
目移りのせぬようメモとデパ地下へ
うなずき役を話の最前列におく
時間切れ準備無駄でもほっとする
ご来光に向かいうとうとしてしまう

豊中市　江見見清

東北のりんご皮剥くていねいに
物の見方少し変えるとほっとする
冬の陽を背に頂いて大あくび
主婦の意地かけたお節が残ってる
雪舞ってこころが凜とする神社

豊中市　松尾美智代

好奇心だけは一番ゆずれない
通販へすぐ電話するすぐれもの
女にはその時見せる泪あり
格好つけ平均台を踏み外し
再会を約して送る夕茜

豊中市　松村里江

筆箱へ偶には筆も入れてやれ
白地図を塗っては試す呆け加減
上ばかり見ながら泳ぐ出世魚
駅弁は駅で食べると旨くない
空論をせせら笑っている机

豊中市　藤井則彦

東京で大阪弁をかくさない
風の音あの子が居ればとまた思う
寒い風句に遠去っていては駄目
近ごろは南天の実に鳥も来ず
いつまでも辛さにおぼれていてはあかん

豊中市　安藤寿美子

昭和史を捲ると老母の青春譜
愛されてマリオネットになっている
偶像崇拝透き通るまで洗う
逢うて訣れて単線の無人駅
青い空仲直りならすぐ出来る

富田林市　中井アキ

不器用な男結びが可愛らし
身の程を思うと負い目絡みつく
闇に目が馴れてあしたの彩が見え
ひとつの虚構守るためなり十のうそ
いい音色悪魔の笛がここちよい

富田林市　片岡智恵子

あの世への改札口が見えてきた
「方丈の庵」に学ぶ暮らし向き
身についたもったいないが捨てさせぬ
今日明日は死なぬと思い捨てられぬ
天国へスイートメモリーだけ連れて

富田林市　中崎深雪

寝屋川市　籠島恵子

お友達と言ってくださるお友達
自分史の中で消えない水の音
ご破算にしては年末切りぬける
この辺と決めているのに揺れている
七草や三日遅れの胃の調子

寝屋川市　冨山ルイ子

2チャンネル生放送を三が日
のんびりと過ごすと決めた三が日
くらし向き今幸せな同居中
今日もまた笑顔で青空を仰ぐ
晴耕雨読地の恵みみる畠

寝屋川市　森茜

小鳥から貰った赤い実が結ぶ
氷雨降る駅でつららになりそうだ
北風を通してあげる北の窓
とんがっている辺りから冬将軍
ぼんやりと見てると風邪をひきそうだ

寝屋川市　森田麗

初句会気合印のカレンダー
胸元のコサージュ揺れて初句会
孫の頬膨らんでるかポチ袋
にぎり飯五十ヶ並ぶボランティア
遠い日の里の彼岸に母御座す

寝屋川市　平松かすみ

私もローマの休日夢にみる
ほしいなあ自由に使う二十四時
マイコンにお任せしてるサークル日
二次会で見付けた花にあった刺
たっぷりの母乳飲んでた娘は五十

羽曳野市　徳山みつこ

ごみ出しの日はお向かいとおめでとう
二万六千八百余日生きてきた
「カーネーション」に勢いもらう台所
自信なくした私はとてもしおらしい
折るな枯らすな新しい葦たちを

羽曳野市　福田悦子

新年の余韻を残す鏡もち
初恋の人から届く年賀状
東北と神戸地震で手をつなぎ
節分の鬼にもあった血と涙
暫くの夢に溺れた宝くじ

羽曳野市　安芸田泰子

追い越した分だけ増えた敵の数
切札をしっかり抱いている余裕
妥協するたびに心が老いてゆく
下心見抜けなかった有頂天
始めから乗気ではない生返事

羽曳野市　吉村久仁雄

魂を半分売って生き延びる
印籠の出ないテレビを父は観ず
釈迦の掌が温いと知った六十路越え
お参りのかたちを神にまず見られ
怒っても褒めても父の薄い影

羽曳野市　永田章司

変り身の早さで出世友が無い
新年会三人寄れば開いてる
エリートも驕りが出たら墓穴掘る
年明けて駅伝漬けの三が日
初日の出人それぞれの思い入れ

羽曳野市　宇都宮ちづる

枯木に芽春の温もり感じた日
カーテンを替えたらやる気沸沸と
美容室鏡の中で生き返える
まだ喧嘩できる気骨のある夫婦
免疫力上がると聞いて寄席通い

羽曳野市　三好専平

枯蓮のような己と思いおり
虎落笛焼けのこりたる菩薩笑む
国会の除染にだれも手をつけず
瓦礫より心の傷が気にかかり
神様が棲んでいそうな落葉踏む

東大阪市　佐々木満作

被災地を慮って祝う節
お手製の年賀はやはりあたたかい
マスク越し目配せだけで指示をする
万歩計冬将軍に負けはせぬ
地図にない道を踏み分け行く勇気

東大阪市　北村賢子

叶わぬと諦めなけりゃサクラサク
努力して妻と笑顔で差し向かう
渋ちんじゃない節電ですの胸を張る
あらためて普通の日日に感謝する
イクメンも育じいさんも増え平和

東大阪市　米田水昇

昇龍にあやかり歩行上を向く
テレビ見る昼も夜も横になり
話し好き話せばすぐに仲良しに
母と子で宿題の声高らかに
私押す後の正面だあああれ

枚方市　海老池洋

無理強いへ曲ってみせる釘の意地
苦しくとも笑顔忘れぬ寒椿
開幕への期待熱いで熱くなれ
元気づけ残し一本松の枯れ
磨かねば私の旬に錆がつく

枚方市　伊達郁夫

六法の漢字が恐い顔をする
太陽の欠片でしょうかプチトマト
ゆったりと流れる川に無駄がない
愛という浮き輪で今日も立泳ぎ
川に棹さして人生裏返す

枚方市　寺川弘一

自分史の序文は妻に依頼する
ひとり芝居の観客は妻一人
ありがとういつかはっきり言わねばならぬ
本当の別れにさようならとは言わぬ
七不思議無ければこの世つまらない

枚方市　丹後屋肇

11日意識しているカレンダー
ロダン像幼児不思議な目で覗く
さんざめく山茶花の前背を伸ばす
ヘルパーの介護に胸をときめかす
恋ごころ包んでアンチエイジング

枚方市　小林わこ

ベルが鳴る朝の絆に起こされる
縺れてもいつかはきっとという絆
針ほどの穴の絆が燃え残る
謎をとく鍵をやっぱり持つあなた
助け船出せない私もどかしい

枚方市　二宮紫鳳

一切をリセットしたい年が明け
志一つ掲げて初日の出
つつがなく絆深めた三が日
墨の香に姿勢正して春を呼ぶ
春近し笑顔も開く梅一輪

枚方市　二宮山久

今日生きるための新聞読みあさり
年金の暮しへ痛い風邪を引き
ラジオ体操今年も続ける六時半
正月へ働きすぎた妻の風邪
血糖値安定したぞ酒やめる

藤井寺市　髙田美代子

残りもの嫌いな猫を飼っている
甘酒に酔うたか梅が咲き出した
騙されていよう優しい目と声に
五年後の事は約束できませぬ
人間だから我慢していることもあり

藤井寺市　鴨谷瑠美子

寒いからこころを燃やすことにする
京言葉まねてはんなり逃げておく
お話が合わなくて胃が痛くなり
ブランコをゆらし絆を深くする
たったひとりの人から欲しい花だより

藤井寺市　太田扶美代

持てるだけ持ってみたけど女偏
平凡という贅沢ならばしています
いい夢が朝の枕の下にある
友達の助言カーディガンに包む
正月の空は四の五の言わせない

藤井寺市　若松雅枝

この星に何時まで無事に暮らせるか
復興が長引き春がまだ来ない
腕互角意志の強さで勝負する
昇龍と言われて肩の荷が重い
寝たきりにならぬ注意をして生きる

藤井寺市　伊藤アヤ子

喜寿まで生きた自分をほめてやる
ほめられて照れるあんたの顔のぞく
初夢の記憶辿ればのぼり竜
新しい暦一面予定入れ
年賀状今年もたんと頂いて

藤井寺市　津田シルク

まあいいかまあいいでしょで年が明け
神様が来ても解らぬ寝正月
フルコース食べたつもりの回り寿司
黄泉の国へ持ってく土産何もない
二階から話してるよな子の背丈

藤井寺市　俣野登志子

次々と老醜みつけしょぼくれる
エンジンがやっと掛かった暮れ三日
イルミネーションはなしが弾む御堂筋
越年の疲れそのままずっと風邪
見つかったきのうで切れた回数券

藤井寺市　吉田喜代子

鬼の霍乱医院全休露知らず
コーヒーの味が分って来た五日
喜寿の年自信持つなと亡夫の声
三洋を横文字にして沈む舟
電車の中携帯遊びする大人

箕面市　出口セツ子

那智大社不況の影か初詣
子が居ない旅は何だか弾まない
金よりも愛と絆が欲しい老い
愛不信結婚しない子が二人
正月の気分はせぬが雑煮食べ

箕面市　広島巴子

初詣電動獅子と御神酒飲む
竜神に平穏無事を先ず願う
冷蔵庫がらんと子等がUターン
ご近所と挨拶交す絆幸
芽吹きへの準備期間と冬籠り

守口市　井上桂作

旅に出て生れた国のよさを知り
一年を感謝の気持持ちつづけ
負けるなよ日本復活合言葉
新市長君が歩めば辰のごと
三人目民主政権頼りなさ

八尾市　寺川はじむ

古希の初春日向を選って散歩する
阿波踊り単純過ぎる面白さ
朝ドラに古き浪速が甦る
舌の上言葉が踊り出る自信
お早うのひと言だけど卓和む

八尾市　髙杉千歩

古稀傘寿祝う賀状を別に積む
梅の香に冥府で逢いたい顔浮ぶ
認知症予備群にいて冬日和
難聴の友増えはがき忙がしい
三泊の留守に日記が埋められぬ

八尾市　村上ミツ子

門松探して年神さま迷子
幸せの海であっぷあっぷしてる
売られたけんか笑ってうまく躱す
一度義理欠くと随分楽になる
マイナスの中からプラス見つけだす

大阪府　桑田ゆきの

仲良くてライバル心を燃やしいる
難題に辻褄合わす咳一つ
茶席には序列しっかり畏まる
ほのぼのと個性を活ける華道展
スーパーで七草パック世の移り

大阪府　野田栄呼

ちゃん呼びで少女時代の喜寿集う
巫女衣装着け大わらわ朝を行く
気に入りの服も寄せつけない体形
平凡に絆一同春迎え
台所ひとりじめしてするおはぎ

大阪府　米澤俶子

初売りは争奪戦の福袋
今様の名前ひしめく絵馬の数
スーパーヒーロー熱き思いの都構想
原発のゼロまで心休まらぬ
日めくりがはや新年を走り出す

大阪府　籾山隆盛

迷い解く鐘百八つ聴いている
神さまの都合にしとく凶のくじ
師の句集開けばいのち薫り立つ
枯れるもの枯れきってこそ美しい
曲り角なみだの涸れる風に逢う

リハビリの汗は涙と共に拭き
さあさあと気合の声が先走る
脳と脚つながってない朝の試歩
退院日勝手に決めて今日を消す
どうでもいいことが気になる今日の空

神戸市　山口美穂

飾らない言葉で友が釘を刺す
木守り柿老母一人の過疎の里
ふぐつつく仲間が味方とは言えぬ
へそくりを三度数える妻の留守
厳冬へ訃報が続く連絡網

神戸市　伊勢田毅

一人住めるうれしき年がまた明ける
リハビリの成果か坂を上りきる
脇見せず今の幸せ感謝する
天が呼ぶ日まで笑って生きてゆこ
転んだらダメと互いに別れ際

神戸市　木村貴代子

ふり袖に殊更雪が舞う二十歳
すぐ顔に出るから大きめのマスク
少年のロマン宇宙の果てを視る
綺麗だねお世辞が冴える初鏡
抜け道を教えてくれぬ僕の地図

神戸市　山崎武彦

妻の手に乗って八十路は平和なり
老いの道二人三脚稚児になる
たまに着た黒ネクタイが泣く握手
うとうとがごつんと一句浮かぶ春
寺近く畔で一服聞くお経

相生市　中塚礎石

もう心変わりはしない青い空
アルバムを開いて過去とトークする
怒っても泣いても一日なら笑え
飼い主が弾むと犬も歩が軽い
ミニスカも今日は晴れ着にシャッポ脱ぐ

明石市　糀谷和郎

両手に花高いお酒になりそうね
償いの底に流れるありがとう
筆まめが無口な私ひき立てる
ラジオ聴き朝から笑う平和な日
スランプに迷いが解けた師の便り

芦屋市　竹山千賀子

薬飲んで平均寿命まで生きる
自転車の籠は眠たいものらしい
定年をふる里の土待っている
不況風いつものティッシュもらえない
夜の部の切符一日落ちつかず

尼崎市　山田耕治

散り果てて今は無音の寺の庭
一年の重さ手擦れの日記帳
三が日探偵コナン横に置く
冗舌が見たくないものまで見せる
エコライフ住めば都よ安らげる

尼崎市　長浜美籠

この頃は手盆で済ます客ばかり
不景気で子と痛み分けお年玉
赤子の掌ひらいて手相自慢する
譲られた席少し私に狭すぎる
また今度断ったはず通じない

尼崎市　藤岡りこ

逆立ちで地球を宙へ差し上げる
握手したひとの温り消せぬまま
残り火を小出しにしよう百までは
ご馳走はテレビで食べることにしよ
大切な花芽を抱いて寒の入り

尼崎市　加川靖鬼

年越しの準備去年の日記出す
初夢は富士も茄子もなく明ける
二拍手も掠れて神に届かない
忘れるなお節の膳に薬添え
日めくりにそうかそうかとみつをの詩

尼崎市　軸丸勝巳

素うどんを啜る鼻水出る寒さ
健康に絶縁状のインシュリン
もやもやは彼の個性か欠点か
負けている起死回生の旗を振る
食事会孫のお迎えいそいそと

尼崎市　林昭三

胡蝶蘭居心地いいか温室で
大晦日田舎の餅の美味しさよ
年明けてすべて新し日用品
お正月我が子はやさしお年玉
小雨降る箱根駅伝応援歌

伊丹市　山崎君子

年玉でチャラにされてるバースデイ
ヤル気あるまだまだ生きて趣味増やす
真っ平なってしまった津波あと
新品の服にカレーのシミひとつ
地獄への最短距離を避ける地図

加西市　金川宣子

胃袋は無いがどっこい生きてます
値上げした煙草を懲りず吸っている
ご近所の神社で済ます初詣で
荒れている心を癒すにごり酒
胸底に昔の恋の音がする

川西市　西内朋月

川西市　米原雪子

利き腕が言うことをきかぬもどかしさ
皆寄れば主役は生後八ヶ月
しっかりと役目果したお留守番
後少し米寿が待ってくれている
五姉妹で生きた昭和を語り合う

三田市　久保田千代

足早に過去と未来がタッチする
遠来の娘と飲む夫の三が日
三が日主人の音符はねている
正夢になれと叫んで目が覚める
一仕事終えて炬燵で剥くみかん

三田市　北野哲男

サイコロを転がすように古稀の趣味
雁風呂の話を聞かす蟹の宿
里帰りからだ緩めて娘にかえる
勢揃い父が手打ちの晦日そば
親子してポツンとひとつ奴凧

三田市　堀　正和

吊し柿裸にされて寒かろう
定番のお歳暮ですねありがとう
酒二合幸せ色に染まります
時計までゆっくりになる雪の朝
元気です昔遊びのボランティア

三田市　上垣キヨミ

日の丸を忘れツリーに盛りあがる
中吉の籤に短気を諭される
年女まだ人生の始発駅
手を出さず嬉し淋しの嫁の節
孫達の笑顔百本のバラよりも

三田市　石原歳子

正月の気分も終りゴミ出し日
元日の新聞読んだことがない
故郷へ無性に帰りたくなった
茶柱に今日を大事にして過ごす
お汁粉に鏡割りして皆揃う

三田市　田中章子

折れること知ってまあるくなるこころ
据え膳が一のごちそう女旅
マンションの正月せめて餅花を
再生紙使い優しさとりもどす
製紙会社ってそんなにもうかるの

三田市　福田好文

酒一本下げて縁談やってくる
張り手でも叩き込みでも勝ちはかち
どん底を知った男の力瘤
ロボットに餅をつかせる大晦日
お向かいの屋根から昇る初日の出

西宮市　西口いわゑ

お天道様札束撒いてくれないか
御祝儀に拍手も添えて送ります
娘の婚儀笑顔の奥は見せられぬ
意味のないこともしながら生きている
えんぴつとロマンの森を出られない

西宮市　緒方美津子

皇后様のおじぎの角度あたたかい
まあいいか軋まぬように老いの知恵
男はロマン追う女服を買う
脳回路いったりきたり名が出ない
おとぼけは許せぬセシウムの値

西宮市　山本義子

好き嫌いノー値段と計るお洋服
好き嫌いノー晴れている日はスニーカー
好き嫌いノー雨の日文庫読みおえる
好き嫌いノーキリスト様もみ仏も
好き嫌いノー春夏秋冬生きてます

西宮市　秋元てる

春の陽よ乾いたパジャマ手アイロン
明日はこの続きと笑顔畑仕事
神様がお困りなさる絵馬ばかり
平和だナCM化粧品ばかりなり
お迎えに洩れなし慌てる事はない

西宮市　足立茂

プライドが邪魔して恋が行き詰まる
犬だって尻尾ふる人決めている
平均点僕が休めば高くなり
空ビンの数を楽しむ飲み放題
飲みには行くが選挙はいかん新成人

西宮市　片山忠

子の手前金はあるぞと言っておく
少しでも高いと他所で買うセンス
人情が凝縮された時代物
次々と不正あばいてガスを抜く
聞き慣れた演歌のように錆びてゆく

西宮市　藤本直

平均点目線の位置が低すぎる
週末はドレスアップの顔で行く
残念と二回つぶやきあきらめる
酒うましやっぱり俺は人科人
ゆっくりとモノクロの刻流れる日

西脇市　七反田順子

どの子にも拍手をおくる演奏会
ほっとして花束もらう子の笑顔
新刊書ペラペラめくりそれっきり
お笑いの種を入れてる箱ひとつ
エコライフポカポカの湯タンポで

姫路市　古川奮水

ピサの塔斜めに建って平和です
過去閉じて明日へ希望年明ける
北風が吹いて寒天よく笑う
遠慮などされると無駄になる煮染
摂生の素心が足りずまた肥る

奈良市　米田恭昌

瑞雲の中勇ましく昇り龍
首席よりいつも次席にいる安堵
マネーゲームそんな昔もありました
ライバルが虫ずの走ることを言う
趣味ひとつ竜頭蛇尾に終わらんか

奈良市　岩本浩二

支えつつ支えられつつ八十路坂
邪鬼を踏み睨み利かせる四天王
惜しまれて逝く歳とうに過ぎている
原子力知らぬ昭和の良き時代
暮らしぶり何処がどうなる都構想

奈良市　阿部紀子

年一度ご無事でしたかお雛様
胸はって改革めざす新市長
男とは老いも若きも不可解な
父と子とようやく解り合える歳
寂聴尼の巧みな講話笑いすぎ

奈良市　加門萌子

神様は殊更深い冬を呼ぶ
菅笠もどじょうも所詮官の人
言われそう生きて行くには自助努力
地デジになった正月テレビおもろない
芸の無い人が暴れているばかり

奈良市　辻内げんえい

竜の年日本経済舞い上がれ
出す出さぬ迷った賀状向こうから
アルバムに彩り添える旅日記
じっくりと見れば真実透けてくる
喪中ハガキ本人でなくホッとする

生駒市　飛永ふりこ

断捨離でひょいと恵みの諭吉さま
整理していらいらまでも運び出す
胃のさびも七草がゆに浄められ
再婚の姪のえくぼに幸やどり
少しだけ隙間あけたら通い合う

橿原市　安土理恵

例えれば刺身のツマなのね　わたし
歯切れわるい話延々聞かされる
わかりませんか三度目のあくび
プチプチをつぶす答をくれるまで
赤い実をつまんだ果ての終身刑

大和郡山市　坊農柳弘

透き通った笑顔姫椿のお洒落
陽春の笑顔眩しいニューフェイス
てにをはの中で芽生えている穿ち
愛は未だ言葉にならぬ春霞
春一番母が自慢の木の芽和え

奈良県　渡辺富子

フクシマへこだまになってくる祈り
仮設の窓再起を期して灯をともす
戦い終えた男を待っているおでん
あれそれのクイズになっている会話
にっこりと手ごわい老いを迎え撃つ

和歌山市　福本英子

エンピツで書いて何度もする浮気
締切りが来ると俄に走るペン
美しい文字が惑わす五七五
見え見えの嘘を聞いてる長電話
大切な悪友ばかり減ってゆく

和歌山市　松原寿子

いい目覚め鼓動波うつ春の夢
結び目に深い絆が棲んでいる
ぬくもりがまだある里は雪しきり
ささやかな祈りを込めて日々通過
締め切りへしっかり捻子を巻き直す

和歌山市　田中みね

川柳塔届かず淋しお正月
初電話娘から孫から娘婿
十人十色のお顔に出会う年賀状
ケータイは掛けて聞くだけでも便利
あなたの傍でひやひやもんの軽い口

和歌山市　玉置当代

喪に服す正月何か物足りず
客のない正月のーんびり過ごす
水仙のキリリと空気澄んで初春
元旦に孫から電話もらう幸
栄転へ家族も猫も連れて行く

和歌山市　喜田准一

生臭い話は避ける齢となり
文章に力感じるコラム欄
世渡りのアップダウンがきつ過ぎる
漫才がグサリ胸刺し笑えない
こだわらぬ枝葉大人の味を出す

和歌山市　柏原夕胡

不幸話を聞くと安心する他人
限りなくグレーで人を信じない
愛されて甘やかされて翔んでいる
ちゃんと聞いているけどちゃんと忘れてる
お食事が整いましたお嫁さま

和歌山市　堀　冨美子

生かされて明日のビジョンを練り直す
線量計ここにも見えぬ放射能
恙無く今年も揃う屠蘇の膳
墓参り逝く日の延期夫に告げ
残照が私の仮面脱がさない

和歌山市　上田紀子

痛む歯がまだある幸を噛み締める
次の世は花の御殿の姫暮らし
ワンクッション置いた言葉にある温味
満足をしてない僕のテリトリー
プライドを捨てれば丸い絵が描ける

和歌山市　坂部紀久子

巨大漁船海に帰れず年を越す
息子より嫁が頼りの年の暮
ペンを持つ暮し孤独では死なぬ
老いて行く自分を認めている鏡
オリンピックと閏年が手を繋ぐ

和歌山市　松尾和香

人生の風がさらった僕の恋
閏年あやかりたいとさばを読む
龍年の昇りの風に乗ってみる
年金で普通の暮しえべっさん
納屋に吊る玉ねぎの芽も緑立ち

海南市　堂上泰女

戦中を生きた夫の深い染み
公約の違反私でも出来る
友達が出来たかばあちゃんは疎遠
先輩がひらいてくれる老いの道
第九の歌で温め合う師走

田辺市　岡本昇

政治家は飾る言葉の辞書を持つ
肩組んでおしくらまんじゅ吊し柿
初雪や五百羅漢のいいお顔
自然とや恵みと脅威表裏
湯タンポにはまり至福の朝寝坊

鳥取市　森山盛桜

蓑虫の暮らし堅実だと思う
明日はどの旗に靡くか考える
サプリ飲む女優親近感が湧く
宅配に一人時間差かけて出る
高台に住んで津波を論ずるな

鳥取市　夏目一粋

死ぬことも金がかかるのケセラセラ
ああおかし目と目があってから弾む
いつからか神や仏に背を押され
多忙がつづくと焦りが出てしまう
にんげんもいつか危惧種になりそうだ

鳥取市　土橋睦子

春風に乗って目出たい噂聞く
餅好きの二十の孫もダイエット
もう夢はおわぬ木綿の針仕事
くじ運の弱い男の手を掴む
三世代中をとり持つおでん鍋

鳥取市　土橋はるお

昔から黙まり助平て言っていた
丸太橋いつも繕うお爺さん
森が集まって美味しい水の話合い
雪煙たててスクールバスが行く
されど運命あきらめ切れぬ事もある

鳥取市　岸本宏章

真っ先にお箸をつける白い飯
新機種が出るたびメカに弱くなる
ドングリの森を返せと熊が出る
東北の漁港案じるうろこ雲
解散を迫るテープが摩り切れる

鳥取市　岸本孝子

たくさんの辰が舞い込む年賀状
三が日餅とおせちで肩休め
品数は減ったがクリアしたおせち
年越の宴歌合戦が華を添え
節分を区切りにこころ春にする

鳥取市　中村金祥

新しい画布に絆の字が踊る
昇龍に乗ってお陽様胸に抱く
嫁までがＡＫＢと同じ顔
孫からのキスぜいたくな気にさせる
ストレスのガスが抜けてく青い空

鳥取市　深澤千恵子

手書きには勝てぬ機械で打った文字
色メガネかけて景色を暗く見る
寒いほど若さを保つ雪だるま
大画面きれいに写るだけじゃない
仲直り笑顔ひとつでできるはず

鳥取市　高浜勇

しきたりにとらわれていて踏みはずす
コンビニの空気が吸えぬアナログ人
斎場でいつも真摯にふり返る
黙したらいい子でおれる玉手箱
騙されておけば怪我などしないのに

鳥取市　池原天馬

八十すぎ悠々自適まだできず
一日が一年よりも長い日に
いつも胸マグマを抱いて日を暮す
一人逝く朝の放送過疎ひびく
雪さけてと願う伯父逝く大雪に

着ぶくれて春を待つ身は夢薄い
バリバリとせんべい食べて歳忘れ
老人が群となってる田舎町
気兼ねなくどこに行っても老いの町
青春の夢からっぽで過ぎ戦中派

鳥取市　宮脇道子

時世かな猫も十八歳になった
生きるのに飽きた飽きたと人を恋う
歳月の未だ半分も遊んでない
巨匠墜つ晩酌の夫の大声
柳友の窓にずうーと灯が見えぬ

鳥取市　吉田孔美子

鬼門という抜け道用意籠城す
正装し校門を無事通過する
門灯のある家の隣がわが家です
プライバシー門札をつけない宅だ
広い門罠をしかけた訳じゃない

鳥取市　池澤大鯰

コナラ枯れ熊も出稼ぎ考える
重箱の隅ゆずれずに小競りあい
金欠のやりくりだけを任される
初恋は木端微塵が美しい
春よこい捨てねばならぬ冬肥り

鳥取市　福西茶子

旅すがら夢に晩学強いられる
人生観変えてもみたい草鞋旅
心眼も飛躍しそうね旅烏
被災地へ思い届かぬ旅枕
あかつきと旅情練り上げ歌を詠む

鳥取市　平尾菜美

年賀状絆のほこり筆ばらい
夢の夢個性豊かな非売品
豊作を目指す作業に嘘はない
物産は個性豊に売り出され
散り紅葉掃いて捨てたくない廊下

鳥取市　鈴木一弘

貧乏に負けない気力だけはある
きのう今日地球素直に回ってる
人間も素直に生きりゃそれでいい
馬鹿でいい気が利く馬鹿は上等だ
明日よ来い幸せつれて早く来い

鳥取市　竹口清信

人と人償ないあっている絆
生きざまの自問自答へ寺の門
ばあちゃんのやさしい声で聴く民話
元気元気がうっかりはまる落とし穴
人の輪に首はぐるりと良く回る

鳥取市　奥谷彩子

鳥取市　永原昌鼓

スイーツへ横目送って通り過ぎ
おいしいと言わぬがたんと食べる夫
おいしいね自分で褒めてまた太る
次々と夢諦めて老い進み
自転車のペダルだんだん重くなる

鳥取市　吉田弘子

老いて今娘でよかったと思う
高齢と名の付く病気抱えこむ
磨いても光らぬ脳にいよいよか
なぜだろう字が乱れてる同じペン
鳥たちは飽食か鈴なりの柿

鳥取市　春木圭一郎

本心を隠すと事が乱れ出す
あっさりと言えば心も洗われる
あきらめず粘れば結果出ることも
失敗はあせる心についてくる
最善を尽くし祈って時を待つ

鳥取市　前田楓花

ダメダメと言われ続ける子の悲劇
背が曲がり母の身長百センチ
愚痴一つ言ってみたいな月の夜
人の子だ少し弱音も吐いてみる
ゴミ箱に大切なゴミある不安

鳥取市　有沢せつ子

こつこつと続けばきっと薄日さす
根菜のスープ持ち味生きている
見舞わないことも優しさ友思う
考えがまとまらなくて眼鏡拭く
色褪せたハガキ一枚手放せぬ

鳥取市　加藤茶人

いつまでも子供は子供もう三十路
女子力はアップ片手に大ジョッキ
妻の目に俺は減点　子は加点
好きなだけあなたの夢にいさせてよ
泣き落とし四十八手のひとつかも

鳥取市　西川和子

年頭の誓いアルコールが流す
そのたびに変わる誓いに実が無い
時どきは誓い崩れるほど揺れる
歳月にいつか剥がれている誓い
ご近所の絆を強くする誓い

倉吉市　猪川由美子

ハートから愛が家出しカサカサだ
増税風師走の寒さ身に染みる
汚染され地元の米で餅搗けぬ
愛に貪欲懲りず三度目結婚だ
大風呂敷広げ過ぎたな党自滅

倉吉市　山本玲子

重ね着し体操らしきことをする
強情はその場かぎりでじゅうぶん
お出掛けはいいことらしい一張羅
元気が取りえ医療保険を無駄にした
三面鏡ひとり芝居の大あくび

倉吉市　山中康子

お人柄目指すあなたを追いかける
食事付だいぶ気の張る初句会
子を産んだえらさは永久に忘れまい
せり合ってみても三十歳の差か
はなやかに咲き乱れたい戦中派

倉吉市　野口節子

ずぶ濡れの心に注ぐロゼワイン
豪快に飲んで明日の夢づくり
寒に咲く花にハートをゆすぶられ
支え合う老いに夕陽が美しい
被災地を照らす大きな星になれ

米子市　成田公一

病院は風邪を引く場所直す場所
家事しない姫になるのが妻の夢
この寒に耐え得た方が生き残る
長いこと待たせ踏切行く一輌
大晦日蕎麦屋にうどん食べに来る

米子市　高田振作

いくつかと聞かれて五歳サバを読む
無理無理無理三猿なんてとても無理
外面のよいご夫婦で通ります
ジャンボくじ当たるな夢がまだ見たい
女学生乗った自転車春の風

米子市　後藤美恵子

まず献杯戦争のないお正月
イクメンの元祖は竜の落とし子だ
キャラクターに負けず舞ってる凧の龍
今様の飛脚で届く寒の鰤
「がんばれ」より「くじけないで」が身に沁みる

米子市　吉田陽子

賀状読む一度会いたい顔ばかり
亡母さんの無理を今なら聞けるのに
効きめない薬を六日飲まされる
いじわるに敏感すぎる一人っ子
生きている限り安心など出来ぬ

米子市　中原章子

生きていてよかった思う国であれ
新しい茶せんに代えてお茶点てる
使ってるうちに茶せんが馴染み出す
生かされる家族の杖に支えられ
ポストより近い家から年賀状

鳥取県　斉尾くにこ

亡き父の激昂がとぶ雪起こし
夕焼けを飲んでみました散歩道
共感のハートの針が振り切れる
世の中の邪推へこころ筋トレ中
人生の甘い酸っぱいお品書き

鳥取県　竹信照彦

梵鐘を撞いて破って竜が出る
ポップコーンのような霰じゃダメですか
鳥取砂丘月の砂漠とよく似てる
残したくて残した物じゃない遺跡
門松を一里塚だとわかる歳

鳥取県　深田倶久

新年の決意足ぶみ雪が降る
年賀状書かず迎える八十七
雪除けの道でたたずむ小正月
級長の兄の帽子は僕が継ぐ
年頭の所感も一度読み返す

鳥取県　西谷悦子

笑ってる朝日に我も答えよう
朝日が上り今日のいのちを確める
ピンボケの返事ときどきする加齢
生きた道根雪のままの部分ある
喜びや悲しみ空の色変わり

鳥取県　山本正光

酒たばこ止めても財布痩せたまま
僕の部屋たばこ臭いと嫌われる
元旦の日は中天かさあ飲もう
明日逢うための言葉を書いてみる
真っ白な山茶花に雪以下余白

鳥取県　佐伯やえ

神の予言信じてつむぐ春の糸
失意の日み仏の予言掌に受ける
大役をぶじに果して大山(やま)仰ぐ
一人旅自分を見つめなおしてくる
川柳塔だいじだいじな勉強部屋

鳥取県　岩崎和子

前頭葉やさしく句作助けてる
わたくしを頼りにしてる連れがある
日々生きる二人のハートぶつけ合い
入浴後ピシャピシャ頬に活入れる
合間見て読みかけページ繰っている

鳥取県　山下節子

去る時は明るい話ばかり置く
死をもって償うなんて愚かしい
やがてくる認知症です講義聞く
ピカソの絵モデル正体見えません
バージンロード　リハーサルせず父の腕

鳥取県　松川行男

賛美歌を口遊みつつケーキ切る
清酒神棚洋酒ちびりとテレビ席
旅なのにみやげ買うなと賢夫人
ここでしか買えないと言うバスガイド
見渡せば老々介護のペアのバス

松江市　石橋芳山

葬式の話でぽつりぽつり雨
苦労する大腿骨の軋む音
夜が来てゆっくり開く悪の門
ほーほーと耳鳴り風が吹いている
愛なんてどこまで続くゴビ砂漠

松江市　三島淞丘

酒と詩遊び心はまだ捨てぬ
八雲立つ出雲の里に春遠く
青空が覗けば笑う鬼瓦
生き方に迷う友あり電話口
逆風を走るゴールはまだ遠い

松江市　川本畔

おばあちゃん恐いと言って逃げる目だ
ひたひたと満ちるものあり元旦や
草芽吹き鳥も揺らすか藪椿
六畳の障子をしかと開け放つ
遠景の神在る辺り手を合わす

松江市　錦織禮子

臘梅の薫りかすかに年始客
仏壇もにぎやかになる三が日
キューピー展とうとう行けずごめんなさい
往年の名画あらたな新鮮味
ひたむきな新人自転車でセールス

松江市　小川注湖

龍に夢八十路エンジンかけて飛ぶ
蛇口より若水もらう文明だ
まだ残る飯粒拾え母の声
足湯にはにっこり笑顔いい女
太陽の当たるところはみな元気

松江市　松本知恵子

新玉の清しさとばす孫が来る
抜けるような空だ今年の希望わく
古いでしょうか盗み取る師のこころ
大根を抜くおまじない持ってます
温故知新やっぱり歴史くり返す

出雲市　伊藤玲子

初暦蹟かぬよう歩かねば
松明けて乾く間もない喪服干す
悲しみを蓋するように白い雪
雪の庭山茶花の紅猫の恋唄（うた）
雪の中梅も凛凛しく蕾抱く

出雲市　富田蘭水

真っ白な雪の心に勝てぬ悔い
古事記よむ出雲神話が離さない
ウォーキングしっかと大地幸せに
七回の辰歳さらに元気出る
今年こそ時計に負けぬプラン練る

出雲市　小白金房子

鏡餅供え牛舎も新春の風
搗きたての小餅丸める家族の灯
どっと来て賑わうひ孫のおとし玉
話上手徳利一本追加する
雛様の微笑貰う新春の窓

出雲市　石倉芙佐子

新しい橋を渡って行ったきり
春だから溜息一つ多くなる
桜吹雪に酔うてしまった私です
おしゃれして朧月夜の君と逢う
紋白蝶ひらひら貴方の行く方に

出雲市　多久和敬子

ゆっくりと歩み自分の花咲かそ
久々に孫六人が勢揃い
二人居て日捲りがまた溜ってる
外は雪孫に電話をかけて居る
年輪が黒く光って義母白寿

出雲市　岸桂子

名水で心ゆたかに米を研ぐ
針山に亡母の月日が残ってる
立ち話やっぱりこれが性に合う
白い旗を上げて賢く老いてゆく
言い過ぎた悔いひたすらに葱きざむ

美作市　山本玉恵

生き過ぎて構図が狂うひとり膳
辻褄が合わなくなって老い二人
毒舌も薬になった日向ぼこ
幸せに逢いたくなって回り道
消し忘れの過去が背骨にしがみつく

竹原市　石原淑子

内閣改造我家は変れない二人
私は私逆立ちしてもいぬふぐり
八歳の初恋を聴くときめいて
あらためて生きるを観たの揺らいだの
福連れた二頭の龍をいただいた

府中市　馬場利子

辰年へ大好きな春弾みたい
自然との戦い田畑が待っている
豊かさに慣れ昭和が霞みゆらぐ
自分史の余白介護歴で埋まる
空一面ちらほら雪に夢乗せる

府中市　岩本雅代

臘梅に癒されながらかゆ支度
七草粥食べて心の帯をしめ
手の温い仲間がくれたお年玉
被災地の成人式に胸熱く
とんどの火景気うらなう火の高さ

宇部市　平田実男

年賀状書く楽しみと苦しみと
峰打ちをされて心に深い傷
始末書を書いた昔を懐かしむ
税収の倍の予算を組む不思議
欠点はないが魅力が今ひとつ

東かがわ市　川崎ひかり

丹精の花の世界にしばし酔う
入門書枕に夫の高イビキ
世界地図あちこち焦げた匂いする
夢の色年ねん無色透明に
客帰りやっと休める母の独楽

東かがわ市　清川玲子

木枯しの日には決まって鍋にする
大掃除助っ人の息子頼り切り
復興へ流す汗なら悔いはない
日本中が支え合ってる頼もしさ
七十路も大きな夢を持ち平和

大洲市　中居善信

年金で飯食うている山家住み
親しいが境界線は引いてある
ロボットが炉心の掃除しているよ
芋食って育った世代だからタフ
雑貨屋が消えて久しい凧が無い

高知市　小川てるみ

何げない日々の暮しにある絆
この歳で母なる海にまだなれぬ
過去形になると涙は枯れている
ジャンプして見よう何かが変るはず
ここまでを生きて感謝の年女

高知県　小澤幸泉

静かなる知恵さずかりて文殊様へ
二十数年訪ね遅れた善楽寺
ひたむきに未完一章残し置く
言い合って暖め合って老いてゆく
これからの余生体力知力練る

唐津市　樋口輝夫

茜雲ふっと逢いたい顔が浮く
夢に見る牽牛織女が逢う話
総選挙やるぞと脅す自民党
チルドレン議員の腰が落ち着かず
釈迦牟尼の流す涙をじっと見る

交替が前政権を否定する
方言に財布もゆるむ道の駅
合掌し杖から洗う遍路宿
戻れない昔もみ消すお数珠です
忌中終り誰と酌もうか語ろうか

唐津市　井上勝視

二度三度土砂降りに逢い周章てない
無意識の握手がとても暖かい
いい嫁だ息子を信じ切っている
薄い味噌汁に慣らされ生かされる
格好いいピリオド探しつつ生きる

唐津市　坂本蜂朗

ご自慢は富士登頂の証明書
努力さえすれば三番だって良い
サイコロを振れば人生あと戻り
議事堂に穀象虫が湧き過ぎる
火葬場の煙がやけにどす黒い

唐津市　山口高明

平凡な大風呂敷に夢包む
万歩計好きな私の回り道
支える道一歩引いて生きている
惜しまれて辞める覚悟一言だ
将来の夢を包んだ大風呂敷

（先月分）美作市　福原悦子

川柳

（つづき）

悔し涙振り切り明日に逢いに行く
あくせくは止そう十分生きたから
良妻を演じきるのは疲れます
時々はアクセル踏んで雲隠れ

八幡市　今井万紗子

大鉈を振るってみたい世相です
決断を下しきりりと前を向く
握り飯母の塩味きいている
12月何が何でも幕下ろす

（先月分）岩出市　藤原ほのか

平成24年
北海道知事賞授賞　北海道川柳大会
兼　札幌市長杯川柳大会

日　時　平成24年7月22日（日）
午前10時受付開始
会　場　ホテルノースシティ
2階「金柔の間」
宿題1部　各題2句詠（事前投句）
「絵」　新井笑葉選
「光」　池さとし選
「旗」　岡崎守選
投句料　1,000円（切手不可・発表誌呈）
投句用紙　原則として大会指定用紙を使用してください。
投句締切　平成24年5月20日（当日消印有効）
投句先　〒060-0003　札幌市中央区北3条西13丁目3　ダイアパレス北3条501
中村文彦方　北海道川柳大会事務局
TEL.011（281）5776

川柳塔の 川柳讃歌 ㊼

木津川　計

熟年離婚分からんわけでないと妻

村山玄也

結婚は易しいが、離婚は難しい。慰謝料や養育費や財産分与の話がついたにしても、怒りや失意や憎しみが消えないのである。

それでも熟年離婚（結婚期間二十年以上）は1975年から2004年までのおよそ三十年の間に、全離婚の5%から三倍の15%に急増している。離婚願望も含めればもっと多かろう。「おい、いい夫婦だったなあ…」と死ぬ寸前、徳川夢声は妻に語りかけ、七十七歳で逝った。玄也さんもどうか…。

古本のような主人が店の奥

山田耕治

結婚当初の男は誰も新刊書だった。しだいに色褪せ、古本になっていくのが人生というからつらい。ネット販売に押され、姿を消す愛すべき古本屋に入ると、古本とまごうオヤジが座っていて、客引きに表のバケットにバラバラの古本を積み上げている。「そこにあなたの本があったわよ」とある女性が。「いくらで?」と問うと、「百円だったから可哀相で買ってあげた」。ついに僕も百円ライターの身をかこつようになろうとは。

空っぽになった巣箱にいるふたり

片岡千恵子

愛の巣を営み、子づくりに励んで送り出した後の空っぽの巣に、取り残されたようにいまは老いた親鳥が寄り添うている。漢詩に言う「我が盛年の歓びを求むること一毫（こう）も復（ま）た意う（おもう）なし」、若い時代の歓楽をもう一度求めようとは、もはやすこしも思わぬ、と腑抜けになるか、前々号「古稀には古稀の燃えるものありルージュ引く」田中みねさんのヤル気満々になるか、さて千恵子さん、へどうするどうする。

あの世へは安くいけるというチラシ

徳山みつこ

梶山季之はマカオで遊び、香港で死んだ。四五歳だった。日本で葬った費用を夫人が記している。「葬儀関係費用は五四七万二千円。内訳〈東京〉三一二万四千円、新聞広告一二五万六千円、国際電話十一万四千円、〈香港〉棺他四十万四千円、挨拶謝礼四十二万八千円、助手交通費十四万六千円―私達母娘の費用は一切含まない」。一九七五年であった。今なら一千万円を超えていた。みつこさん、私達は安上がりでいきましょう。

日本酒のノンアルコール見当らぬ

関本かつ子

かつ子さん、日本酒のノンアルコールは出来んそうです。専門家に聞きました。米と麹をしぼって水とアルコールを取り出します。それが酒です。そこからアルコールを消せば只の水になるのやそうです。麹の香りのする飲み物はできても、酒とは言えんそうです。仮に造ることができるにしても「採算がとれん」と言います。諦めましょう。

ものさしを変えてやすらぎ手に入れる

井丸昌紀

「脱亜入欧」路線を突っ走ったこの国である。西欧に追いつくためには、勤労は美徳であることを国民に叩き込むしかなかった。「村の鍛冶屋」の末裔たちはかくして溢れ、たかだか一世紀で経済大国は構築されたのだ。「ときめき」と「たかぶり」ばかりに彩られ、私たちは人間らしい「やすらぎ」の大切さを教えられることがなかった。昌紀さん、ものさしを変えてよかったのです。

（『上方芸能』誌発行人）

自選集

小島蘭幸

父の銀よりもやさしい銀になる
古い街だな野良猫が動かない
夕陽背に父がだんだん大きくなる
新しい名刺恩師と会うために
父と飲んだ記憶桜が咲いている

小西雄々

しんしんと雪降る夜は熱燗で
夢ひとつ入れてふくらむ頭陀袋
プライドを保つ微笑か黄水仙
旅へ出た紋白蝶へ春の雪
古傷へ納得できぬことばかり

斉藤劦

福寿草みな寄り添うて咲く絆
両の掌で包もうよ寒波の蕾
膝抱いて聞いてる真冬日の花火
ふるさとが恋しくなった虎落笛
願ったら天は青空下さった

塩満敏

妻の庭今年はどんな花が咲く
春ですよミミズモグラも起きなさい
水ぬるみ池のメダカも泳ぎだす
国産の大関二人誕生す
四月には孫娘が嫁ぎます

新家完司

山陰の冬は灰色枯れ葉色
極寒の空から敵が舞い降りる
染められて枯れ葉色からネズミ色
あなたの春は三年先という御告げ
泥濘を抜け新雪を踏みしめる

恒松叮紅

畑にも春待つ土の音がする
冬空を眺め卒寿の小さな欲
昔話になると元気が出る卒寿
上半身だけが達者という卒寿
卒寿まだ手先の知恵は持っている

初雪が舞うラッキーな朱の鳥居
チェックイン待ってた雪が猛烈に
恙無く八十路の新春を柳箸
連名の賀状は尾鰭撒きちらす
貪欲に生きる証の耳学問

津守柳伸

ああいのち野に咲く花もおしめしべ
神さまも大吉という商売気
整然と生きて自然に無駄がない
野仏も今年は柿を食べ飽きて
喪中ハガキ出して正月用がなし

遠山可住

元日の風が懐かしがる昭和
他人さまが節目節目の気を遣う
花束がみんなの顔に微笑んで
言い負けてからはしずかな椅子になる
新しい店のチラシが道に舞う

都倉求芽

悪人が平均寿命越えてゆく
復興へ増税の波押し寄せる
生きている人間だけが通る道
節電をして暗がりのひとりごと
零戦に乗った夢からまだ覚めぬ

土橋螢

何かまだ遺っておきたい恵方拝
豪雪の屋根にスコップ落下びと
笑いながら終のはなしの疎おぼえ
消灯のベッド一句を息ませて
平凡なメダカの群に春めぐる

中原諷人

いい事は続かぬ悪いことはなお
鼻先に笑い袋を提げた奴
電子辞書買い換えてから力みがち
周波数同じコーヒー紅茶党
心地よい音する方は罠だろう

西出楓楽

嫁の振るバトンに見せる底力
図書館ですが進歩の知恵を借り
春風と歩けば胸に山河あり
ははの歳生きて今識る偉大さを
神話ひとつをプロムナードした歴史

林瑞枝

暖房の街でぬくぬく風邪を引き
弟に電話の声を案じられ
雑用にも優先順位つけている
平均寿命生きて堂々余生なり
神さまは見えないものを見せてくれ

前たもつ

老いの贅沢温泉に入り浸る
束の間のぜいたく冬のひなたぼこ
豊かさの重み辞書ではわからない
私の絵から失せていく勝負色
敵か味方か私を走らせる風よ

政岡未延子

我が子でも時代が違うＤＮＡ
家訓ならホームページを見てほしい
守るものあまりに多い三代目
それにしても無題という日多すぎる
ギネスなら何か挑戦できそうだ

三宅保州

救われた一言母の声だろう
向き合えばこころが開く音がする
ちっぽけな女同士を解く鍋
莫山の筆あとがある原平野
折り返し生きて一からまた学ぶ

宮西弥生

あれで良かったのかもあの日の分かれ道
いつもそうだが　まあ気短な選択肢
静まってくれぬわたしの小舟たち
彼岸此岸の中を揺らいでいるような
あなたならどうなさいます地蔵さま

八木千代（やじろべえ）

西陣は古都の歩みと生きてゆく
結婚は別の愛を捨ててくる
時折りは逢わねば軌道外すかも
駅裏は春まだ浅く人まばら
匙投げた医者も必死の手を握る

八十田洞庵

恋知ったハート冬眠などしない
漂白剤使うと罪が消えますか
平成の鬼は不況にもろ弱い
共に泣く人間臭いロボットだ
良妻賢母の仮面を妻よ欲しがるな

両川洋々

父は雄お見合でした母は雌
永遠に永遠に母美しき
愛食べてどないやねんと言うなかれ
極楽はカラスの背からよく見える
出刃を研ぐ妻の笑顔にある絆

板尾岳人

哀しみにかかわりもなく日は昇る
雪コンコ気力なくした胸に降る
じっくりと思案影まで腕を組む
登校見送るゴミの日の楽しみ
霜の庭のぞく新芽に春はそこ

奥田みつ子

折衝へ顔が立ったと妥協する
優柔不断遅い決心自己嫌悪
一瞬の隙に足下掬われる
のほほんとしても反らさぬ心の眼
調子よく進む話の裏を読む

河井庸佑

いい天気なのに郵便物が届かない
川の字の真ん中だけが伸びてくる
魂は非常袋に入れておく
透明になりたくなって酒を飲む
どのように食べても美味しければいい

川上大輪

老人の砦畳にある温み
春の季を見逃しならぬ種袋
長短を結んで丸い輪を作る
壁越しの話は聞かぬ楽隠居
胸掛も貰い温ぬく六地蔵

木村あきら

第127回 大阪川柳の会

日時 4月2日(月) 午後5時開場　午後6時締切
会場 ホテルコムズ大阪　地下1階　アーバンホール
宿題と選者 △坂　前川　淳・久保田元紀・山口　光久
△波紋　礒野いさむ
各題2句。席題なし。
会費 千円　欠席投句3月29日まで　本田　智彦　宛
〒532−0025 大阪市淀川区新北野1−3−4−706

温故知新

『清水白柳遺句集』より

棟梁がわざわざ見せる脛の傷
腕で食う職人にして猫背なり
呼鈴へ大工が留守を言いに出る
職人の名刺汚れたままでよし
夜警して霧の重さを身に感じ
金槌の柄に年輪を見せる艶
壺金(かね)尺に長け清貧に甘んじる
職人が揃うと焚火消しに立ち
ふるさとを語る大工は腰を据え
一と握り職人の勘おそろしき
新刊に赤鉛筆のほしいとこ
地下足袋をはいた大工は屋根へ行き
靴ベラのいらぬ靴はく工務店
重役に職人気質気に入られ
恋人も出来ない職にあまんじる
鉋屑の長さを大工きそい合い
職人に明治の戸棚眼にのこり
一寸した血はなめて置く大工の手

川上大輪選

本がまた催眠術をかけに来る
念入りに自分も騙す厚化粧
どの花も主役一輪挿しが好き
よもぎ餅しばらく故郷手のひらに
花の香に染まりきるまで人を待つ
天にまだ純愛がある天の川

高槻市　田中由美子

金のいる時だけ神と拝まれる
椅子取りゲーム走る前から椅子がない
ただの風邪つまらなそうに医者が言う
髪の毛も心も寝グセついたまま
旅帰り関西弁が心地よい
カタカナ語略語も舌にひっかかる

奈良市　大久保真澄

持ち時間とても足りない好奇心
身の丈で暮らせば風もやわらかい
飾るほど心の中が透けて見え

和歌山市　福井菜摘

世の中の裏を見てきた目を洗う
影法師ぼくの姿でいる安堵
身の丈に合った余生の歩が軽い

紀の川市　楠原富子

キッチンの椅子が知ってる妻の位置
命綱たしかめあって生きている
淋しいねいいえ続編歩みます
脳からの指令届かぬキーボード
あと少し梅のつぼみが独り言
笑い袋かついで探す自由席

大阪市　高杉力

明日会える君を送って遠回り
立ち喰いのうどんにもある美味い店
演奏会少し遅れて拍手する
歌手なのか曲名なのかも分からない
三十路過ぎ皿もカップも引き出物
自治会の役員さんにはすぐなれた

尼崎市　田原一兆

美しい嘘だとわかる話しぶり
初夢にリーベと夜景あと忘れ
頑なに道は拡げぬ石畳
道草に仲間がふえる赤のれん
万策はまだ尽きてない足場組む
真新しい手帳に春の予定入れ

富田林市　山野寿之

黄昏にまだ断捨離が出来ぬまま
素っ裸あの日のことは伏せてある
重心を少しずらして楽に生き
女々しくて過去形ばかり追いかける
止めなさい人の財布を覗く癖
心ない言葉がひとつ突き刺さる

紀の川市　宇野幹子

ケンケンパーしながら雨季をやりすごす
さよならの風が裳裾にからみつく
ロスタイムニートの爪が伸びてゆく
回り道いくつ拾った宝物
善悪の重みで揺らぐやじろべえ
懐かしい訛拾ったふきだまり

塩竈市　木田比呂朗

物欲がまだ断捨離を躊躇させ
健診後ジョッキも猪口も弾み出す
残高と絆比べる預金帳
年金に気楽にやれと笑われる
着メロのマーチに今日も背を押され
夢を描く画布が未だに白いまま

大阪市　松田聰

良い意見出るのは会議済んでから
最敬礼しながら赤い舌を出す
美しい日本語奪うテレビ界
淋しさに負けないように天仰ぐ
口だけの同情心は続かない
ガラポンの為に買い足す要らぬもの

和歌山県　森下よりこ

後期高齢まだまだ何か生まれそう
後期高齢怖いものなどなくなった
大家族の頃もあったとお正月
めじろひよどり一人の庭に来てくれる
正直な背中はっきり歳が出る
ストレスも味方につけて老いてゆく

豊橋市　藤田千休

肩書きが消えて萎れる名刺入れ
同席の上司に酒も畏まる
コンビニが母の味だと子は覚え
さざんかの宿に予約のフルムーン
楢山の登山計画やりすごす
突っ張って皺も寄らない欲の皮

降る雪に古びた庭も薄化粧
爽やかな目覚め細胞若返る
父の忌に遺影を囲む国訛
ロスタイム想定外のドラマ見る
民衆のネット独裁追い詰める

岐阜市　平野　あずま

イチョウ並木金色の風吹き抜ける
足元の断層短気起こすなよ
心の垢持ち越して聞く除夜の鐘
念には念入れて去年の髭を剃る
一月一日希望あふれる初日記

京都市　清水　英旺

ノーギャラで今日も頑張る母の腕
反抗期息子の部屋は覗かない
へそくりと恋の話は内緒です
妙心寺龍が飛び出す除夜の鐘
初日の出徹夜したのに雨が降り

松山市　神野　きっこ

何でこう邪魔臭いのか自尊心
自慢する時は心が薄くなる
コラムだけ読んで時代に縋り付き
真実は言わぬ権力者の奢り
螺子一つ力だけでは嵌まらない

今治市　渡邊　伊津志

初詣辰年ふたり供に連れ
初売りのチラシが束になって来る
書初めの素直な文字を褒めてやる
さまざまの初を連ねている睦月
早過ぎも遅すぎもないただ習う

大洲市　花岡　順子

なるようになると思えぬ我が想い
重荷捨てノラになれたらいいのにな
だまってたら知らないうちに悪者に
生き様が顔に出るから笑顔です
ネコの目が正直になれと言っている

山鹿市　米加田　恭代

クールだと言われて迷う自尊心
美しいままで終われる片想い
ほどほどの悩みがあって惚けられず
川柳の海に漂うわが余生
湯上りのたまには褒める妻の肌

池田市　上山　堅坊

かたわらに生きているぞと鼾かき
女三人呑めば肴は孫亭主
ポインセチア買ってみようか嬉しい日
縄暖簾本音ポロリと暖かい
すみません産地気にして買う野菜

泉大津市　助川　和美

河内長野市　松岡篤

切り過ぎて庭木にお詫び申し上げ
名誉職あっちこっちで名前だけ
病院をハシゴしながら友が増え
また外れ天気予報に貸しが増え
ラインから外れているが生き字引

河内長野市　辻村ヒロ

大掃除我が身の垢も落とします
好奇心どんな味かとおせち買う
頬染めてワインで祝う古希の朝
老いの坂妻の食事に守られて
見かけよりきらりと芯の強い人

岸和田市　増田隆昭

生き下手は承知今年もマイペース
美人の湯よりも腰痛治せる湯
また来たい旅館のママのお持てなし
茶柱が今日のやる気に火をつける
老い一人一番風呂で仕舞い風呂

豊中市　石橋優明

芋虫のあの弾力が心地よい
たわけものめ蝸牛にもほどがある
金色のボタンかわいいくしゃみする
春の暮れ無限に続くすべり台
入り際のとろけた夕日すくいとる

富田林市　関よしみ

乗り替えてアプローチする明日の夢
生き方にでんぐり返しさせて晴
郷里で取れたビタミンぐいと飲む
懐の深さを知って影に寄る
生涯平凡で笑顔だけ残す

東大阪市　西田いくひろ

試着する際にメタボが気に掛かる
叱られた数を肥やしにして励む
うかつには言えぬ弁護士連れた客
駅前の強みで客が出入りする
買った後に転勤つらいマイホーム

箕面市　酒井紀子

なにもかも写真の母に話しかけ
いつまでも握っていたい掌が火照る
くるわない時計の下で息してる
積ん読に出番まだかと睨まれる
福耳をもって青テントに一人

篠山市　石田久子

握手して印象づける初対面
歳ですね気持ちについて来ぬ体
生涯の人と思った初対面
正直ねあなたの顔がゆがんでる
聞きあきた自慢話しも酒の友

昇り龍平太と名乗る子が目覚め
釧路にも丹頂の舞う幸せ度
描いてみよう母に捧げる肖像画
うっとりと観音様の掌にひかれ
寂しげに刑事を語る靴の裏

神戸市　長川哲夫

五七五で言いつくせない胸のうち
指差して確認してもなお不安
ウィンドーに歩く姿をチェックする
光る海きっとあそこに神がいる
携帯に記憶を全部預けてる

神戸市　能勢利子

雪が舞うやっぱり母でいなければ
愚痴ならばたくさん聞いてあげましょう
手を繋ぐことから始めてみようか
抱きしめて下さい強がりな私
悴んだ私を溶かす詩がある

三田市　上田ひとみ

人並みにいろいろあって年の暮れ
難問を明日に持ち越し様子見る
時代なのかめっきり減った熱い人
昇龍に願いを託す初詣
動物は身の処し方を知っている

奈良県　谷川憲

体裁を繕ってまでも赤字出す
酔いつぶれ飲ませた罪と飲んだ罰
今日もまた主役のドラマ演じてる
賑やかが一人になれば淋しがり
値切るのが実に上手な浪速っ子

奈良市　尾畑なを江

病気なのか亡くなったのか来ぬ賀状
消費税上げれば怖い票が待つ
やり直す決断をした途中下車
心配の種を抱えてくる息子
殺しても躾だったと若夫婦

和歌山市　磯部義雄

喪中はがき決心させた老い支度
しっかりと絆を結ぶお年玉
笑うまでとことん介護するつもり
落ち込んで無駄な買物して帰る
二割五分節電してる戦中派

和歌山市　土屋起世子

ドクターの平均的という返事
年玉に大きい袋出している
イケメンとおしゃべり楽し美容院
うつむいて帽子ひとつで他人顔
パソコンの賀状ばかりが元気です

和歌山市　坂部かずみ

岩出市　藤原ほのか

相槌を打って真ん中キープする
どたどたと今年も幕が上がります
大声をあげて今年もエンヤコラ
ピリオドをうった思いが疼きだす
大切にしまい忘れて蹤いてる

紀の川市　北山絹子

酒なくて人生論が語れない
大物が揃うと雑魚が騒がしい
負け犬がいつも吠えてる夜の街
道草を忘れた児等の塾通い
ぎりぎりの暮らしを映すコンパクト

紀の川市　辻内次根

太陽がいちばん温い独り者
誰か来るその緊張で掃除する
診療科増えて薬の飲み忘れ
生きている喪中はがきを読んでいる
まあいいか男一人の台所

橋本市　石田隆彦

似た場面同じ事言う老夫婦
これ以上病むな地球の診断書
履歴書にわが人生の進化論
やっかいな荷物だ肩にある責務
心配は悪い方へと駆け巡る

鳥取市　松原ひとみ

シンプルな願いを選び初詣で
地デジ化に追いてけ堀りの子が帰省
山陰の気紛れ天気泣かされる
お世辞には弱いお肌の曲り角
確固たる自信が背筋伸ばしている

鳥取市　近藤秋星

後何度君へ書けるか年賀状
ボロボロの身体で新春を迎えます
正月が過ぎたら僕は冬眠だ
何もかも忘れ今年は寝正月
人体も部品交換出来たなら

倉吉市　前田喜美子

花の香を鼻近づけて確かめる
当選で見せた涙が嘘をつく
今日も無事明日を信じて米を研ぐ
銀世界しばし忘れる畑の草
欠席の隣は寒い透き間風

米子市　野川宣子

無理なこと山ほど背負う絵馬の辰
一年を託され辰が武者ぶるい
言い勝って旦那と距離がまたひらく
ペアサッシ暗いニュースは遮断する
双六で往ったり来たり一人旅

米子市　生田寒之

預かった犬の謝礼を犬と食う
正札を下げてもやはり値切られる
昔々安全神話あったげな
景品が目当ての孫と寿司を食う
○一二受話器取らぬと決めている

岡山市　藤成操江

夢よりも無病を祈るお賽銭
有り余る時間を抱いたまま暮れる
輪の中で戸惑っている目の高さ
相槌を安易に打ってから真冬
廃屋になるかも知れぬ生家の灯

岡山市　工藤千代子

灰皿に溜まる欠伸と爪楊枝
隣りからお向かいからも届く波
ダイヤルを回すあなたの居ない部屋
正月が来てもほっとかれる金魚
日溜りにすったもんだを捨ててくる

竹原市　國實力

笑い日も泣く日もあってこそ続く
せっかちの癖に長生きしています
大丈夫こころに癌はまだ出来ぬ
ヘエーあんな顔もあったか妻昼寝
バスツアー先ずは傘寿が唄い出す

宇部市　高山清子

敬老日済んで一年ほっとかれ
意識して綺麗ごと書く日記帳
人押して人に押される初詣で
笑顔にも色々あって騙される
愚痴じゃないが愚痴に聞こえる言い回し

弘前市　稲見則彦

「まあいいか」いつも乗り切るこの調子
嫁姑こじれたその場逃げる蟻
いつだって僕は自由にネオン街
去年より出番が多い土鍋です
淡白なアナタも一緒一夜干す

弘前市　髙橋洋子

がらくたを捨てた納戸の広いこと
真鱈の目捌く私と睨めっこ
口数で夫に元気度計られる
袋薬理由も無いのに振って飲む
長寿の秘訣たまたま生きただけと母

昭島市　野口忠

ぼんぼんがカジノにおいでおいでされ
大臣は口が滑ったではすまぬ
百一歳早見表からはじかれる
ポイントを撒いてお客を釣り上げる
アメ横で外国ミヤゲ間に合わす

入れたはず大事な時にないカード
檀上の長いスピーチ聞き手なく
ＯＢ会病気自慢に花が咲く
大病し誠の友が見分けつく

愛知県　樺　嶺志

古希過ぎてパーマができる髪がある
ふたり傘四十五度に雨刺さる
胃カメラが止まったところ古戦場
ハンカチと帽子まで置く自由席

江南市　脇田雅美

冬開く寒さが好きな花もある
カラフルなタオル使えば若返る
セクシーでカラフル衣装まぶしいな
魚つりでその夜の料理ゆめをみる

大阪市　浅井公平

へそくりに時効がなくて貯めたまま
此の寒波流行りのファッションお気の毒
本紙よりチラシ多すぎものたりぬ
連れ添っていつの間にやら七十年

大阪市　吉田知之

美味しいと言うより先にウンの声
老春の胸のときめき不整脈
財布のひも百均店でゆるんでも
小銭よりお札欲しいと神の声

大阪市　平井露芳

なつかしい賀状の中の一行詩
歯の治療ひと区切りだよ太鼓判
モノクロの記念写真の裾模様
傘寿とて写真遺言整理しよう

大阪市　西川冷子

おはなしのたぬきもメール打つという
御用納めの黒猫が伸びをする
句碑に散る漆の落葉の艶やかさ
文集をやればできると煽てられ

大阪市　安田由美子

三部経カセット流す寺もあり
日本を丸洗いして出直そう
不況でもデイサービスは忙しい
当たるまで買い続けますジャンボクジ

大阪市　太田としお

裏話聞きにのれんの酒誘う
クラス会やっぱりあの人離婚かも
ギリギリにくるクセ今もクラス会
犬叱る口調で夫に指示をする

大阪市　木村青生

食通とは扱いにくいお方です
うぬぼれがひとり歩きをして困る
くされ縁男結びに引きずられ
まだ越せぬ溝がわたしをいじめます

大阪市　柴本ばっは

ペットと住み心を癒やす世が悲し
いつまでも元気でいたい竹を踏む
初詣で金儲けより健康で
筆で書く色紙も光る句も映える

大阪市　前川善之

冷える日は老いを味方にこたつ番
日本が誇れる文化ウォシュレット
節電で家の灯は一つだけ
金を出し口は出せない場所に居る

堺市　近藤治子

待ちなさいあんたが出ると角が立つ
どうしても机の前は眠くなる
安売りへ軽い財布を道連れに
こんなことにわくわくしてた若かった

堺市　羽田野洋介

一パーのセレブが握る地球かも
日米欧円高弗安€安
公約と旅の恥は掻き捨てか
長生きが厄介者の時代なり

堺市　増田和幸

初詣であっさり春よ来いにした
その時の都合の歴史学ぶ子等
いつからか静かにしてるハイヒール
笑い皺もう笑っても恐くない

池田市　多田契子

喜怒哀楽四等分とならぬ世で
春霞と言えば聞こえのよい虚ろ
妥協点算盤尽くで力尽く
日本語忘れてしまいそう閑居

泉佐野市　稲葉洋

もやしっ子なんてもやしに失礼な
ネイルアートちょっと老春弾ませる
百円玉ちょっと嬉しい部屋の隅
寒中に一輪咲いたバラの意地

貝塚市　石田ひろ子

こうなっているのだツワブキは黄色
買いおきのポマードつける髪がない
四面楚歌句想泉の如くなり
順調に老いてゆくなりおらが春

交野市　田岡久幸

きりきり舞いの凧にわたしを重ねてる
口べたのひと言重く受け止める
へその緒が未だ切れずにパラサイト
日進月歩人間らしさ減っていく

河内長野市　木見谷孝代

四分六の湯割りで今日の幕を引く
荷崩れの危機乗り越えてルビー婚
妻御機嫌コンロを替えただけなのに
ダイエットを御破算にする三が日

河内長野市　梶原弘光

河内長野市　山本エミ

背の荷物秘密喋ると軽くなり
趣味一つ軽い気持で引く御籤
マネキンの臍の辺りに眼が走る
私の意地やっぱり少しへそ曲り

河内長野市　谷久美子

麺類は欠かせないので買い溜める
大気汚染地図に乗らないシーベルト
仮面脱ぎ本音が出せる一つ屋根
子に譲る荷物は軽く積んで置く

河内長野市　八木加修子

お日さまと共にご帰還うちのタマ
愛敬でまだまだ勝負喜寿近し
不揃いのみかん愛敬道の駅
どんどんと体メタボに財布痩せ

河内長野市　針生和代

ちゃぶ台を囲んで生きてきた昭和
平凡で丸く生きよう雑煮餅
孫達と脳トレしてるカルタ取り
まだ喧嘩出来る幸せ老い二人

岸和田市　中岡香代

ウォーキング途中でビール買って飲み
つまらない情報食べて肥満体
四次元のポッケが欲しい反抗期
今朝の事忘れ昔を話す祖母

豊中市　荒巻夢

同情にプライド急に疼き出す
小寒の日差しが背なを押してくれ
あれもこれも問えば自分に還り来る
善も悪も抱え人間いとおしい

豊中市　源田啓生

孫の手で新聞寄せる寝正月
自画像のゴッホ貧しい顔してる
運全て使い果たして老いが増す
このところ笑い忘れた肩の凝り

寝屋川市　岡本勲

フリーになってセミの抜けがら定年後
神風は吹くと信じた少年期
年金以外期待してないと言う妻
趣味一つ持って余生をのんびりと

寝屋川市　小谷滋彦

言いにくいこと愛犬が仲をもつ
居酒屋のメニューの端におぜんざい
成績簿まるめて覗く未来像
年賀より寒の見舞いが性に合い

羽曳野市　安本美喜

かっこいい大人になれよ乾杯だ
ちんどん屋今年の景気よいですよ
さまざまな龍に我が家も囲まれて
額に入れたし福々しい年賀状

旅先でのんびり年賀してみたい
年賀書く龍の形に一苦労
朝一番賀状待ってるお正月
孫にやるお金は損と思わない

枚方市　河田洋子

笑い袋忘れ泣きたい日々もある
苦労重ね忍耐の母背が丸い
白寿まで長い人生神笑う
淋しさを隠す笑顔に色気満ち

枚方市　坂本ミヨノ

ふるさとの訛を肴に立ち呑み屋
ふる里の蔵元地震で閉じていた
君も寒いか夜明けのカラス
呑んだとき良いと言われるお人好し

松原市　大嶋信次

下の人支える人が上の人
助けあい心と心連結し
恩人に背き自分の首しめる
トキメキを無くしたただの青春期

松原市　市川雄太

テープ切る孫卒園のラストラン
さび抜きの鮨桶孫の誕生日
年金にスライドさせるお年玉
御節よりホテル朝食バイキング

箕面市　寺井柳童

断食でお腹すっきり大掃除
鴨同士エンピツ舐める競馬場
今年こそ今年こそはで年暮れる
孫からのメールはオレの宝物

八尾市　田邊浩三

また同じ日が始まってゆく年が明け
一年の計に整理がご常連
不用品入ってそうな福袋
お年玉夢ふくらませダッシュする

八尾市　山根妙子

年男竜頭蛇尾は御免です
バロンドール夢を子供に澤選手
想定外バンジーロープ切れちゃった
隣から大根届く冬至かな

八尾市　前田紀雄

寒くてもがんばる私から元気
正月の子孫も帰りしずかなり
つるし柿少し粉ふきて甘くなり
震災の恐い思いは忘れない

大阪府　中井記久乃

常連の鴨待って残る熟柿
脱ぎ捨てたブーツへらへらよろめいて
重箱の隅へ貯めてる不発弾
おおきにがよう聞こえへんワンスモア

大阪府　高木道子

一年は無理一日の計を立て
余命さえ分れば預金せずにすむ
待たすより待つのが良いとつい早出
着ぶくれの中にもお洒落忘れない

大阪府　小栢　こずえ

剪定を終えて新年待つ緑
大掃除棚の奥から忘れ福
三陸沖市場のせりに活気づく
妻骨折介護の夫米寿なり

大阪府　若月　祐作

どの家も平和ですわと冬灯り
起き抜けに有り難うございましたとはトイレ
日曜日また連れ出して呉れる娘ら
見る度に数が違うて庭の柚子

大阪府　坂口　公子

玄関の南天つぶら朱を深め
健康の倖せゆっくり句と遊ぶ
老いの身にブレーキきかぬ気の若さ
鉛筆の向きを揃えて春を待つ

大阪府　畑中　節子

読み書きができる幸せ年賀状
不景気で賑わい見せる初詣
割烹着アルバムにない母の顔
休耕田へのへのもへじ悲しそう

大阪府　神野　千恵子

張り合わず蟻より前に位置をとる
貧すれば横から変な儲けぐち
元気ない年齢です元気絞り出す
あかんたれ昔の暮しなぞってる

神戸市　大島　まさる

ここの庭木は皆ドレスアップして
生真面目で融通利かぬ洗濯機
黙ろうと決めたのに妻の呼ぶ声
風呂で酒飲みたくなったこの寒さ

神戸市　木村　忠義

年女何かいい事有りそうな
許さないでずるい私をこれ以上
じたばたとまだ諦めぬ夢を追う
若作りするほど余計目立つしわ

神戸市　白川　淑子

晴れ着きるやんちゃ娘の成人日
人恋し木曽路の秋のひとり旅
一言が固い心の戸をひらく
晴れ着きて大和撫子演じ切り

神戸市　山根　弘子

墓参りの帰郷を兼ねてフルムーン
満月を揺らして浸る露天風呂
ジュータンのような銀杏を踏みしめる
ほろ酔いで素直に聴けるお説教

尼崎市　市坪　武臣

よしあしを躾けず育てあとで泣く
五年経つ友の絵手紙うまくなる
年賀状今年も無事に書き終える
新しい暦めくって初日の出

尼崎市　小池幸子

さぐられていたか笑顔の裏のなぞ
水害の話昔を忘れない
賑やかに曾孫のピアノ春の宵
前向きな努力きっちり報われる

加東市　黒崎美紗子

飽きもせず心がつづる五七五
欲捨てりゃこんなに強くなれるのか
喜寿傘寿過ぎて米寿へ万歩計
友に会い自分の齢を自覚する

加東市　安達厚

うれしい孤独干支は辰なり遊び筆
国旗なし門松飾りパック餅
枕時計朝の目覚めは狂いない
大晦日いつまで生きるソバ食らう

加東市　岩本美緒子

古稀過ぎた二人の薬同種類
肩たたき早く来い来いお年玉
肺癌の疑い晴れてタバコ吸う
目が覚めておはようと言う悦びよ

川西市　山口不動

なにくそと踏んばる足が先ず悲鳴
街中の時計となって朝散歩
念願のパソコン買って挫折感
寿ぎて互いの達者口ばかり

川西市　日野岡和之

地震以後東電重い荷を背負う
累々と瓦礫木枯し吹きぬける
ぎったんばったん少年老いやすし
日は昇るアダムとイヴがいるかぎり

篠山市　酒井真由

好い話し聞きたく耳をたてている
春をまつ新調の靴光る杖
すき焼きの残りでたりた三が日
米寿まで後一歩です大みそか

篠山市　谷田多美子

贅沢な指一本の風呂沸かし
添書きの年賀ごろりと顔を変え
柳友のつわもの増えてまた楽し
電話ベル遠慮ください使用中

篠山市　佐々木勇

七草を刻んで無病息災を
まだ元気元気ですよ爪伸びる
友の輪が支えのんびり続く趣味
この寒さいろりおでんがこいしくて

篠山市　永井かほる

不機嫌の元をたぐれば自己嫌悪
黄信号待ってる余裕にさせる孫
ヤジロベエまだこの先も左右見る
優しくも強くもなって我一人

篠山市　沢山啓子

生き延びて世の移ろいをじっと観る
回転の木馬が加速する地球
寅さんじゃないが反省日々送る
銀行券いのちの次という不思議

篠山市　酒井健二

里山にガキ大将の見え隠れ
城跡の石に聞きたいエピソード
イナバウアー真似て見たいがちと無理か
穏やかな顔と心は別の物

三田市　雑賀一泉

おみくじは夫婦仲良く中吉で
三世代揃う新年笑顔なる
お年玉お礼の声で追加する
一人の夜早めの雨戸しかと閉め

三田市　辻　開子

亡夫にだけ見せる涙がひとつある
想っても何も出来んが祈ってる
いたわりの心ほんのりにおうひと
あれやこれ菩薩になれぬ好奇心

三田市　尾崎一子

放っといてと言われ余計に気にかかり
カレンダー付けた印の意味忘れ
何となく気の合う医者と合わぬ医者
万札は有るが崩すのイヤと妻

宝塚市　丸山孔一

呆けても許される歳思うままに
今日も生きてる明日も生きてみせる
今年の目標はネバーギブアップ
誰彼も素敵になれる笑顔持ち

西宮市　株元玲子

痩身に戻す努力をしています
言われても即言い返す若かった
狸から見れば人間ややこしい
トイレまで行列なのねえべっさん

西宮市　泉水冴子

寒椿我家の庭でほこらげに
こたつ守り猫が相手の寝正月
書初めに健康一と祈り書く
寝正月富士たかなすびなにもなし

三木市　山口久子

闘病もナースの笑みに救われる
病棟の窓からそこに朱雀門
院内の廊下階段リハの道
グルグルと腸は動けど便りなし

奈良市　矢野良一

笑顔した遺影変らず癒し呉れ
口開けて介護の匙を待つ厳父
命名にフリガナ無くて呼べません
会いましょと年賀交換半世紀

奈良市　前田弘恵

髪染めた妻の歩幅が広くなり
三が日もちのメニューが幅きかす
手を合わす時間が長くなる祈願
初詣帰りの会話気の軽さ

岩出市　村中悦男

蓬摘むライバル居ない里の山
マイナスの思考ばかりを掛け合せ
綿入れも私と犬のペアルック
ここからは亀の速さに巻き戻す

海南市　小谷小雪

ペン先で踊る仲間に僕もいた
空想が絡む人生サクラ色
平凡な夫婦で過去は絵にならず
旅先の珍味召しませクール便

田辺市　大峠可動

年明けて地球の平和先ず拝む
一年の早さに歳を違えそう
夕食は何が出るかと老いコタツ
泣きなさい泣くだけ泣けば楽になる

鳥取市　山口千代子

被災地を償う政治生ぬるい
太陽は僕の正体知りつくす
補聴器に助けを借りて絆でき
徳利の尻を撫ぜなぜ酔いつぶれ

鳥取市　坂本とも湖

歳重ね夫は好きな色を着る
カラフルに編まれた紐の鈴の音
第二章個性発揮を目指す龍
教室で夢持ち帰る靴の音

鳥取市　大前安子

正月っていいな誰にもおめでとう
男っていいなオーイで飲んで寝て
喜寿と古稀夫婦で出来る種をまく
あほかいな朝ドラに飛ぶ愛の声

鳥取市　津村律子

このファイルずっしり重い旅日記
この胸に誰がつけたか恋の火を
カラオケでデュエット危険ひそんでる
嫌な顔見せず励ます友がいる

倉吉市　堀　かずこ

悲しみを川に流して明日を待つ
歳月をいっぱい日記に食べさせる
あかね雲妻の退院祝ってる
ざわざわと森が助けを呼んでいる

倉吉市　田中紀美恵

水加減忘れたメシを供えてる
一寸した事も似ている血の流れ
お誘いも二度ことわればまずくなる
人間が嫌になってもメシは喰う

倉吉市　岡崎美知江

正月だタンスにしまった顔を出す
笑う声ア行ハ行の合せ技
大笑いシワになるから控えめに
幸せは人並ならばそれでよし

境港市　中井虎尾

昇り竜あやかりたいが重い腰
いつの間に八十坂を越えていた
成人してお年玉数減りました
川柳を今年もやるで脳体操

米子市　田村周子

たわごととるならそれはそれでいい
あれこれとしたい思いも身は一ツ
何回も途中止めしてまた始め
妄想が鐘で始まる座禅堂

米子市　後藤宏之

しかたなく仮面をつける壇の上
願い事いっぱい詰めた餅をつく
五分読む本を開いて昼寝する
安全神話ないと教えた大津波

米子市　湯浅久司

野仏に誰が生けたかわれもこう
コーヒーの香りに目ざめおそい朝
ろう梅に春のおとずれ告げられる
ウォーキング大根一つもらい受け

米子市　見山温子

子の定年同居はしばしお棚上げ
生きたくて八十路の坂を登る日々
新記録箱根の山は笑顔です
コンビニでケーキおにぎりおでん買う

米子市　小塩智加恵

米二合二日の命炊いておく
聞かなくてよいこと耳が拾い聞く
湯タンポをかかえて寒波迎え撃つ
歯車がどこかできしむ嫁姑

米子市　加藤正二

割愛という手でチャンス持ってかれ
立春の風がやる気を煽りたて
久びさに会った友にも老いの影
ピリオドを打って終わったことにする

米子市　山本ふみ子

古日記読んで元気をとりもどす
智恵袋しぼって日日を暮してる
老人の体に良いとすすめられ
老体にプラスマイナス見極める

鳥取県　橋谷静江

待っている我が家の宝生まれる日
片足でバランスとって立ってみる
母の味舌はしっかり覚えてた
姑の家風盗んだ嫁の頃

鳥取県　飯野菖子

カーテン開け朝日に眠気覚まさせる
事故多発規則次第にきつくなり
難問が解けて心は澄み渡る
ピンボケの話ムードを柔らげる

鳥取県　岡村孝明

感動と感激いっぱい生きようよ
降る雪や時の流れを見つめおり
新しい絆つくりの龍年に
野田政権前途険しいマニフェスト

鳥取県　田口清帆

うまい物食べて気になる血糖値
親不孝許し求める故郷の墓
欲一つ捨てれば老後楽になり
喜怒哀楽皆お金に指図され

鳥取県　大塚美代子

寒い時尻から先に暖める
完璧に行う葬儀リハーサル
リハーサルしなくて逝った姉の葬
正体を隠してみても人は人

鳥取県　下田茂登子

マドンナの仮面をつけて逢いに行く
ジェラシーをギョーザの皮で包み焼く
熟れすぎてはじけたトマト私も
過去形の貴方に今もときめいて

松江市　藤井寿代

暗い過去老後に自慢して歩く
大吉を捨て小吉の恋選ぶ
できるなら命の水に恩返し
鏡にも嘘はつけない反射する

松江市　相見柳歩

義理欠いた心ひきずる雪の朝
朗らかであり続けたい喜寿の花
老々の介護気をもむ友のこと
気をもらう色とりどりの年賀状

松江市　山根邦代

ライバルと競う健吟励んでる
咲かせたい幸せの花一輪を
親切が過ぎて反感買っている
民主化へ歩んで欲しい北の国

出雲市　黒目英男

出発は辰の尻尾に掴まって
元気良く走り回って夢が覚め
真心が嬉し値段はつけられぬ
ストレスの捨て場になってくれる友

出雲市　武島ちよえ

大笑いした日の心持ち帰り
明日への約束だったらしておこう
おはようの一言うれしルンルン
そしてまた三年日記買って来る

雲南市　菅田かつ子

戻る度爺ちゃんに学ぶ出雲弁
女子バレーやっぱり大和撫子よ
お年玉孫には孫の予定表
親子孫固い絆の初詣

安来市　原煩悩児

花の散る音を聞いてるペンダント
団欒に入れず一人水仕事
落椿掃き寄せられてまだ紅い
人まねをやめて啼けなくなるオウム

備前市　森ふみか

戸惑いを知る石鹸の泡流す
癖のある友の顔ならすぐ浮かぶ
同期会今年も幹事できる幸
出ておいで春の息吹よ虫たちよ

岡山市　永見心咲

車椅子ベビーカーよりよく出会う
目の疲れ奥へ奥へと攻めてくる
留守電に感情のないメッセージ
人生の節目節目にギアチェンジ

広島市　岸本清

初詣でママを見習い掌を合わす
休み明けカードの並ぶＡＴＭ
振袖のひらり二十歳を翔ばせてる
冬日射し今日のあなたは優し過ぎ

竹原市　若年幸子

おみくじを引いて納得共に吉
小ぶりでも味は良いよい黒大豆
寒アヤメ今年何輪咲くだろう
歯の治療終えてさきイカ食べてみる

竹原市　六田半徳

ごみの事任せています我が主に
ユニクロが厳冬守る老守る
五本指下駄に馴染める靴下だ
四時起きの弁当作り暇が出た

竹原市　土井輝恵

未来へ続くレール錆びないよう磨く
蛇行した道をときどき振り返る
足並みが揃わぬ春のラインダンス
五線紙にルール違反の四分音符

山口市　中前幸子

２０１２平和であれと龍は言う
美しい嘘にも少しいる勇気
深海魚へ初日の出が届かない
年新た貧乏神とまた出会い

四国中央市　篠原久

高知市　三谷待太郎

年金は銀銅鉄とずり落ちる
断捨離の断も捨も離もダメでした
原子炉は電力じゃなく政治力
危機感も感性も金も足りぬまま

香南市　桑名孝雄

初日の出血圧計の許可が要る
いい句が出来ますようにとお賽銭
五七五たかが日本語ではないか
紅白が見事に捨てた高齢者

福岡県　本田さくら

孫の顔泣いた笑った小半時
東北を憂いこけしの眼に涙
龍がきたこわいかわいい年賀状
数十年会ってはいない年賀状

唐津市　北村松風

仏壇のパパと乾杯子の門出
中学に成ると親よりお友達
ドライバーノンアルコールで杯を上げ
碁敵が退屈だねと雨の中

唐津市　吉冨節子

使い込みボンボン社長桁外れ
階段があって足腰強くなり
郷土史を学び始めたボランティア
相槌をうって話して誰だっけ

唐津市　岩崎實

待っていた出合い団地のお餅つき
たのしもう長生きしてるしあわせを
背後にはいるよあなたを守る人
本人か皆で選ぶかわが遺影

北九州市　小松紀子

有り難や寒さ気遣う息子いる
我が家のアイドル猫犬なごやかだ
もういくつ寝ると正月過去のこと
持ち時間自由に使う古稀の坂

山鹿市　三谷たん吉

天災よりこわいものとは人災ぞ
いいことをしようと思うがチャンスない
生きるのに戦う相手多過ぎる
がむしゃらにただがむしゃらに生きてきた

シドニー　坂上のり子

フクシマを聞かれ答えがスッと出ぬ
いい加減に晴れ間が見たい水たまり
暦なんかなければもっと気楽だろう
食べて寝て大あくび猫になりたい

弘前市　髙森一呑

無情にも仮設の屋根に積る雪
ストーブの薪でイモ焼く氷点下
寒の入り湯湯婆抱いて冬を越す
巷では第九を歌う鎮魂歌

衣食住足りて野武士の影も無い
原発にノーとはっきり言えた民
防衛と原発弱い地に負わせ
大吉をひいてあなたが好きになる

福島県　七ツ森　客山

復興の初日よ昇れ龍のごと
待つこと久し陋習破る風雲児
支持率は代り映えせぬ相似形
頑張れと言いつつ瓦礫お断り

東京都　井上　つよし

お正月テレビの画面消してみる
心まで透き通るかな冬の空
長男の成人式に目を細め
人生も身体もリセットしてみたい

東京都　高岡　弥生

ちょっとだけ皮肉を言ってとぼけ顔
反省も時の流れに巻き込まれ
いっときの無駄長い目でみる余裕
言い過ぎて引くに引かれぬ柵に

東京都　大竹　一良

時々は朝刊がない月曜日
木曜日おいてけぼりの患者さま
本紙より広告重い金曜日
知りたくもないが曜日を知らされる

清瀬市　岸　愛三

和と洋のおしゃれを気取る柚子レモン
おでんの具だれが主役かつゆの中
黒豆が鍋にまだある老い二人
納豆と豆腐の好きな犬がいる

横浜市　巖田　かず枝

八十路の転居盥に乗って帆をあげて
ポケットいっぱいありがとうを持ち歩く
平成に繋ぐ手と手が温かい
家族が囲み張り切るうちの鍋奉行

相模原市　赤木　妙子

まだ薬間違う程はぼけてない
電子辞書位は俺も使えそう
婿よりも方言孫がうまく言う
断捨離で女房と意見また分れ

佐渡市　髙野　不二

寂しさをハンマーで割るこれも哀
忘れたら難儀あしたをメモにする
口開けて日光多く腹に吸う
試されて試して人間目が覚める

富山市　有澤　嘉晃

煩悩を幾つ消せるか除夜の鐘
縁と縁積み重なってこの家族
このぜいたくうしろめたさとありがたさ
ドントコイ言ってみたいがよろけそう

静岡市　渡辺　芳子

（今井万紗子さんと藤原ほのかさんの句は44頁にあります）

新川柳鑑賞 (1)

麻生　路郎

べんべん草かて春じゃもの春じゃもの

（一　瓢）

べんべん草なんて、生えても生えいでも、どうでもよいと思われるような存在ではあるが、春が来れば自然のめぐみに浴して小さな花もつけるのである。人間だって、そうだよと云う風刺がこの句から強く感じられるのである。

朧月光源氏に逢えそうな

（美　喜）

おぼろに霞む春の夜にそぞろ歩きをしている女性の恋ごころを詠んだものであるが「光源氏に逢えそうな」と空想をほしいままにしているところにこの句のよさがある。

機関車の入替え驛の日の永し

（法泉子）

ポカ〳〵と暖い春の日に、駅頭に立って、機関車の入替えを見ていると実にのどかである。切り離された機関車が二丁ほど先へ—そして又戻って来る。それから線路を替えて、ガチャーンと云う大きな音響と共に貨車に繋がれる。そんなことがいつまでも繰り返されている。いつになったら終るのか、はてしがないようで日が永いと云うのである。

柔肌に觸れさせもせず恋と云う

（七面山）

二人はよく歩いた。暗い方へ、細い道へとよく歩いた。黙って歩いた。それで充分楽しかった。男にとって、それだけでは物足らぬ日もあった。しかし、女はそれ以上には容さなかった。斯うした恋のいつまで続くことか。

ぼろくそに言われて切れる手を知らず

（潮　花）

「この月のお手当はどうしたの、いただくものをいただかなくっては生きていけないじゃないの、会社がどうだって、妾の方はチャンチャンといただかないと、お家賃まで催促されたんでは全く妾の面子問題ですよ。妾一人を囲っておくだけの甲斐性がないようでは行く末が案じられるわ。あんたがダメだったら妾いつでも身をひきますよ。一体このままで妾をひぼしにするつもりなの、何んとかおッしゃい。ホントに甲斐性がないのね。」斯んなに云われても返えす言葉が一つ出ないのも惚れた弱みであろう。上五「ぼろくそに」の措字が句を生かしている。

六段の調彼女のだからきけ

（素身郎）

彼女が琴を習っているとは聞いていた。たまたま訪ねたら琴をさらっている。さあどうぞと彼女のおッ母さんがその部屋へ招じられた。曲は六段の調であった。あまり上手ではないが彼女のだから聞けたというのである。

養老院今のおりんは恋をする

（甲　吉）

以前は姥捨山にも比されていた養老院も時代のズレで、今ではうら寂びしいとか、物のあわれとかいう響きがよほど薄れたようである。養老院で老人同士が恋愛したり、結婚したりしている。「楢山節考」のおりん婆さんは恋をするどころか、若いもののギセイになるため、みずからすすんで楢山行きを決行するので作者は時代のズレのいかに大きいかに驚いてこの句を詠んだのであろう。「今のおりんは」の中七の用法は実に巧みでこの句に筋金を通したと云えよう。

（新川柳鑑賞は「川柳雑誌」に昭和28年10月号から昭和34年5月号まで連載。原文のまま）

中島生々庵句抄

（句集『生々楽天』から　昭和五十一年発刊）

昭和十七年

暮らし向き並ぶ余裕もないと云ふ
生還を期せず抽斗ぴんと閉め
お便所も列べ列べの寒い駅
往診という事にしてニュース館
憚らず泣く乳呑児をよしと聞く
乳呑児に生き抜く力教えられ
汗を拭く態で涙もふいておき
愚痴を云う暇に一汗かいて見な
男一匹強情に似て身を売らず
遺言にまで強情を書き残し
看病に妻の忘れぬ身だしなみ

昭和二十一年

眼鏡はずし小出しに小言列べたて
酔ってないおつもり眼鏡拭き直し
割り勘で喰うすき焼きへ気をつかい
お隣は又すき焼と子が騒ぎ
箸箸箸目目すき焼煮え始め
挨拶は一寸マドロス離すだけ
ラッシュアワーねじられたままご挨拶
肉だ酒だ闇で集めた幹事会
闇としてはお高い方でおまへんで
闇をせぬ人は手をあげ手をあげて
正月は易者も目出度う納めたり
送り出す玄関も一度念を押し
道具屋にもう暮らし向き見破られ
松すぎたびんのほつれも色っぽく

誹風柳多留一一篇研究 79

山口由昭・小栗清吾
伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦
清博美

627 **本郷をとつこ迄もと傘しよわせ**

小栗 どっこは、どこの強調促呼。(「江」)

破戒僧追放の句。罪を犯した僧が傘一本を背負うことのみを許されて、本郷から「どこへでも行け」と江戸を追放される場面である。『江戸砂子』(湯嶋　本江　上野)に「別れの橋　本江四丁目の小橋なり。むかし太田道灌領地さかひの所なりといひつたふ。そのころ追放の者など此所より放す也と云」とある。

破戒僧の傘については、

本尊がものをいつたら傘一本　　拾三18
傘しよつて江戸是切リの所まで　安六鶴1

などの類句もあり、また「日国」に「傘一本」は「(破戒僧の追放には傘一本だけ持つことが許されたところから)僧侶が追放されることにいう」とあるように、成句化していたようでもあるから、当時広く知られた習慣であろうと思われるが、文献的な根拠がよくわからない。どなたかご教授下さい。

伊吹 賛。傘一本の用例は多くあるものの、根拠となる文献は捜し得なかった。

山口 賛。山崎美成『海録』には、戦国時代篭城叶わざる時降を乞う、即ち相手に降伏する時、笠を出して降伏した例が述べられている。

『信長記』の箕作落城、関ヶ原合戦の岐阜落城、『太閤記』の岩付落城の時いずれも笠を振上げて助命を乞うたという。とくに『武徳大成記』巻十四には「氏房が留守の将伊達与兵衛等、城を捨て命を全せんと思ひ、城上より傘を出して降参を乞ふ心を示す」と引用し、続けて「按ずるに、僧徒の破戒して寺を退く時も、必ず傘を持て退去する由、之を寺を開くと云、右の開城のことに似たり、思ひ出るまゝに併せ記す」とある。「寺を開く」といったらしい。

清 賛。先人の研究によって既に常識になっている事項でも、その典拠がわからない場合が多い。『雑俳川柳研究集成』がその空白を埋めてくれる筈であり、常識の典拠が明らかになることも多いと思う。

628 **高カ金を出して尾の出る身うけ也**

小栗 高金は、金高の高いこと。また、多額の金。尾が出るは、尾が見える。人目をごまかしていた実態が表に現れる。多くやりくり算段の生活に破綻が生じることをいう。ぼろが出る。(「日」)

多額の金を使って身請けをしたが、結局うまく行かなくて破綻したということだから、道楽息子一般の句としても意味は通じるが、「高金を出し」・「尾の出る」というあまり耳慣れない語句を使っているところから見て、「高尾」を示唆するのがヤマという句なのだ

ろう。

高金にかへぬか色の意気地也　一六五11

山口　高尾の体重と同じ金を積んで身請けしても振られて、挙句の果に失脚の伊達綱宗であろう。

清　賛。

629　**むらさきのうん気座頭のやねに立**

小栗　運気は、空に現れる雲のような気。白・黒・赤・紫等の色を帯ぶ。（「江」）

ここで紫は、検校の着る紫衣の暗示。座頭の家の屋根に紫色の運気が立ち上ったのは、いずれ検校の地位に昇れる前兆だというのであろう。

勾当のぶんやにあたりしうん立　二〇5

清　賛。

630　**定ごうで死ンだも嫉になすりつけ**

小栗　定業は、善悪の報いを受ける時期が定まっている行為をいう。（「日」）

定業の意味は前述の通りだが、ここでは、あらかじめ定まっている死期、いわゆる寿命というような意味だと思う。寿命で死んだのに、それは嫁のせいだと責任をなすりつけるという句意だと思うが、人間関係が今一つはっきりしない。

通常この種の句は、姑が死期に当たって嫁より先に死ぬのを残念がる、嫁の計略で死期を早められた、と疑うというパターンである。

順をよく死ぬのを姑くやしがり　八38

よめかのろいころしますとしうとやミ　天八9 25

かん病をひとりねめ〳〵往生し　八30

主題句も同類とすると、寿命で死ぬのにあくまで嫁のせいにするというすさまじい姑根性ということでいいと思うのだが、「死んだも」と過去形になっているのが少し気になるのである。

自分が死んでしまった後では、嫁になすりつけることは不可能だから、誰か他人が（たとえば舅が）死んだのを、姑が嫁のせいにしていびる、という意味にもとれる。「死ぬのも」とでもあれば姑が死ぬ事で問題ないのだが。ただ、「死んだも」とあっても「もう死んでしまった姑は、死ぬ間際まで嫁のせいだと言い続けた」という意味ととれないこともないようにも思う。

伊吹　賛。その他に考えられるのは、姑が死んだあと小姑が。

山田　賛。主題句のようなひどい姑だったという他人の批評としてもよいでしょう。

山口　息子が早死にしたのを嫁のせいにしている姑ととります。

清　同右。

631　**神楽堂なで切りにするやうに舞**

小栗　おなじみ神楽神子の句。百文もはずむと剣を抜いて舞うのだが、その様子をまるで撫で切りにするようだと表現したもの。

やわらかにぬき身を遣ふ神楽堂　明三宮2

神楽堂切ッ刃を廻ししまひ也　明四桜6

清　賛。

632　**ぶきやうに持ッまな箸がちそう也**

小栗　真魚箸は、魚を料理する時に用いる木や鉄などで作った長い箸。馳走は、饗応すること。接待。（「日」）

来客をもてなすために、主人自らが台所に立って魚を料理する。ちょっと不器用に真魚箸を持ったりしているが、その気持ちが馳走だというのである。

ほうの手を見せるか客へちそうなり　安五満2

清　賛。

愛染帖

新家 完司 選

目印は日の丸うちへ飲みに来い

（評）正月のことだろう。最近は国旗を掲げる家も少なくなったが、このように太っ腹なことを言ってくれる先輩も珍しくなった。

香南市　桑名　孝雄

適当に聞き流してる聞き上手

（評）たしかに、しっかり身を入れて聞くと疲れてしまう。聞き上手と言われる人は、右から左へ聞き流すコツを心得ているのだ。

堺　市　志田　千代

年金が減りそう命縮みそう

（評）唯一の収入源である年金がまた減らされそう。交際費を削り、食費を削り、酒代を削り、そして、命を削らなければならない。

四條畷市　吉岡　修

新しい身体がほしい新年よ

（評）「新年おめでとう！」と挨拶はするが、具体的に何一つめでたいことはない。ポンコツの身体が新品になればめでたいが…。

鳥取市　近藤　秋星

昭和一桁へバナナが安過ぎる

（評）病気見舞いの定番であったバナナと鶏卵。今や物価の優等生とかで、メチャ安！昭和一桁の「価値観」が苦笑している。

宇部市　平田　実男

着ぶくれて生姜湯呑んで炬燵番

（評）セントラルヒーティングも床暖房もない日本の平均的な家屋。昔ながらの知恵を駆使して、無事に越冬しなければならない。

大阪市　板東　倫子

自然薯も効かぬマムシ酒も効かぬ

（評）十年ほど前までは確かに効いていたと思うのだが…、最近はサッパリ。そのような歳になってしまったということだろう。

藤井寺市　鈴木いさお

いちばんの子を東京にさらわれる

（評）成績優秀だった自慢の子。希望通り東京の大学へ行かせたが、そのまま就職して帰って来ない。誇らしいけれど、少し寂しい。

鳥取県　細田　裕花

引き際の美学二次会から逃げる

（評）「お先に失礼」と挨拶すると「冷たいな、もう一軒付き合えよ！」と絡まれる。トイレへ行く振りをして消えるのがベスト。

堺　市　澤井　敏治

新年のトイレにヨン様を吊るす

（評）もちろん、２０１２年のカレンダー。

岡山市　工藤千代子

トイレに吊るされるとはヨン様も不本意であろうが、これでトイレ通いも楽しくなる。

浜松市　岡田　史郎

旧年の面面と会う散歩道
ゴミ出しが仕事始めとなりにけり

奈良市　大久保真澄

値切ったらアカンあちらさんも仕事
一財産捨てた気になる粗大ゴミ

大阪市　津村志華子

前向きになれと静かに川流る
おみくじは凶と出たけどケセラセラ

米子市　高田　振作

スキップで階段降りてネンザする
ガイドさん左手上げて右と言う

海南市　堂上　泰女

距離がなさすぎて娘とごっつんこ
冬眠のヤモリに詫びる大掃除

大阪市　伏見　雅明

底値にはまだ底があることを知り
肩章はないが家では二等兵

尼崎市　春城　年代

三箇日隣近所に音がない
宵えびすカルメラ焼きも定位置に

大阪市　江島谷勝弘

肩が凝る犯人はショルダーバッグ
かなりのことおっしゃいますが通ですか

和歌山市　柏原　夕胡

えらそうに言うからごはん作らない

大阪市　田浦　實
待った甲斐生駒の上に初日の出
京都市　都倉　求芽
おめでたく布団の中で初日の出
西宮市　藤本　直
天国への切符を買いに初詣
清瀬市　岸　愛三
子供から初めて貰うお年玉
河内長野市　木見谷孝代
脳も正月なかなか起きてきはしない
大阪市　坂　裕之
初詣出来る普通のお正月
昼過ぎに家族揃っておめでとう
鳥取市　有沢せつ子
誕生日銀行だけに祝われる
道を訊く人へ四人が口を出す
茨木市　藤井　正雄
毒舌で激励目元笑ってる
長距離の列車定時に着く平和
富田林市　中井　アキ
パスポートとうとう期限切れになる
真実を告げる静かな内視鏡
大阪市　谷口　義
大抵は現金払いしています
私の記憶は使い捨てでした
三田市　北野　哲男
河豚食うか蟹を食うかでまとまらず
鰭酒をのんだほてりも久しぶり

鳥取市　前田　楓花
似てますか父と母とのハーフです
唐津市　仁部　四郎
献立のコピーが土産退院日
河内長野市　針生　和代
好奇心無駄を買ってる福袋
枚方市　寺川　弘一
そのうちに一度行かねばうどん県
池田市　上山　堅坊
素うどんへ七味たっぷり振りかける
大阪府　米澤　俶子
スーパーで出会い買物かと訊かれ
干し柿も私も皺で味を増す
米子市　成田　公一
脳天気と言われ帰って辞書を見る
食べられぬ金魚まるまる肥えてきた
和歌山市　古久保和子
悪口は大根穴へ埋め戻す
目の端へ一円硬貨落ちている
河内長野市　梶原　弘光
退職後空飛ぶ夢を見なくなり
人間が進化してると思えない
橿原市　居谷真理子
忘れない忘れる難しいことだ
まごころを剥き出しにしちゃいけません
鳥取県　斉尾くにこ
謝罪してわずらわしさに蓋をする
帰り道ひとりでしてる反省会

大阪市　奥村　五月
孫が来て無口の夫婦かき回す
出世払い出世しすぎて寄りつかず
芦屋市　黒田　能子
サプリメント効いてきたなと思う膝
いつまでの二人だろうか春の風
富田林市　片岡智恵子
人間に飽きがくるまで生きてみる
シドニー　坂上のり子
気を付けてと幾度見送り見送られ
河内長野市　村上　直樹
良薬と思えば甘し妻の下知
橿原市　安土　理恵
くされ縁いちばん人間くさい縁
豊中市　藤井　則彦
不自然な笑みがこぼれるハイチーズ
岡山市　藤成　操江
置き場所を決めろといつも叱られる
大阪市　古今堂蕉子
三〇番線から出ますあの世行き
堺　市　奥　時雄
昼酒にお咎めなしもまた淋し
堺　市　加島　由一
この歳で酒をやめたら何がある
海南市　三宅　保州
雑魚ばかり残り一気に盛り上がる
和歌山市　福本　英子
千鳥足でも待ってます帰るまで

尼崎市　長浜　美籠
エグザイルのリズムに酔って今日閉じる
鳥取市　福西　茶子
我が器大と見えたり小と見えたり
田辺市　岡本　昇
子育てのエキスパートは里芋だ
高槻市　富田　保子
歯を磨き明日も命があるように
河内長野市　谷　久美子
目覚め良い朝は背筋も伸びている
松江市　相見　柳歩
顔つきが変わり成績伸び始め
藤井寺市　太田扶美代
白髪染め人を騙している気分
三田市　福田　好文
失敗談すると皆が寄って来る
三田市　上田ひとみ
おみくじは縁談をまず見てしまう
神戸市　山口　光久
ギャンブルの願いは神を怒らせる
香芝市　大内　朝子
ふる里の土塀ユトリロふと思う
大和郡山市　坊農　柳弘
以心伝心スローペースの夫婦独楽
篠山市　円増　純子
柘榴までわたしの失意噛うてる
鳥取市　夏目　一粋
逝く先は地獄お金を貯めている
松山市　神野きっこ
人間が丸い地球に角立てる
大阪市　岩崎　公誠
空っぽの頭に五欲へばりつき
西宮市　泉水　冴子
人体の不思議生きてるのも不思議
枚方市　伊達　郁夫
取り巻きが足を引っぱるから転ける
高槻市　島田千鶴子
段差ないとこで転んだ捻挫した
篠山市　酒井　真由
転ばぬように重心ひくく低くする
高槻市　片山かずお
よれよれの札から順に旅に出す
箕面市　広島　巴子
目も耳もおぼろ心眼磨いてる
豊中市　水野　黒兎
路地に市に国に子供は福の神
大阪市　柴本ばっは
胸ゆたか女系家族で丑歳で
八尾市　前田　紀雄
好奇心旺盛百歳を目指す
鳥取県　吉野いさお
百歳を目指して入る断酒会
東かがわ市　川崎ひかり
真実の友は金貸せなど言わぬ
西宮市　片山　忠
浪速っ子すぐに原価を知りたがる
弘前市　今　愁女
戸障子の開け閉めにぶくなりました
寝屋川市　平松かすみ
カレンダー毎年決めている名画
橋本市　石田　隆彦
仁王さんが笑うともっとこわい顔
河内長野市　坂上　淳司
愛敬のあるお顔だと褒められる
藤井寺市　俣野登志子
失言から長い講釈聞く羽目に
神戸市　山崎　武彦
冬の虹ロマンチストの嘘まこと
紀の川市　北山　絹子
ごちゃごちゃになった頭を撫ぜている
唐津市　樋口　輝夫
伝えたいことがいっぱいある背中
鳥取市　倉益　一瑶
押し入れを開けるとどっと落ちる鬱
札幌市　三浦　強一
切れ者もピンボケもいていい仲間
備前市　森　ふみか
右足を痛め頼りの左足
堺　市　内藤　憲彦
雪ダルマ春が来るまで立ってなさい
羽曳野市　徳山みつこ
お立ち寄りをとは遠くの人だけに
弘前市　髙森　一呑
まだ去らぬ貧乏神の居候

池田市　栗田　久子
心地よくいただきました喜寿祝い
大阪府　高木　道子
リバーシブルになって居ります舌の先
岩出市　村中　悦男
遺伝子の確かな豆で鬼は外
豊中市　松尾美智代
馬鹿力出してぎっくり腰になる
堺　市　荻野　像山
飲んだかいな慌てて捜す薬包紙
鳥取県　大塚美代子
流行を追えば家計は火の車
唐津市　坂本　蜂朗
即身成仏のような母白寿
大阪府　畑中　節子
能勢弁の心安らぐ我が故郷
三田市　石原　歳子
故郷が古事記に出てる胸おどる
大阪市　太田としお
割り勘はレジの前ではお断わり
鳥取県　岩崎　和子
銀世界子供は家で何してる
富田林市　山野　寿之
子が巣立ちローンが済んでどんと晴れ
大阪市　大川　桃花
もやもやを流す効果もある涙
東かがわ市　木村あきら
杭が立つ緑が少しづつ消える

日高市　根岸　方子
息子貼る障子のシワもいとおしい
鳥取県　竹信　照彦
酒一杯入るとネバーギブアップ
堺　市　近藤　治子
アラフォーの娘に釣書くる十二月
今治市　渡邊伊津志
自己顕示とどのつまりは自己嫌悪
大阪市　榎本日の出
胃袋が満足するの遅過ぎる
豊橋市　藤田　千休
お色気が売りで同性には不評
河内長野市　辻村　ヒロ
十年目地域の顔になった嫁
米子市　加藤　正二
明日のことわからないからよく寝れる
寝屋川市　森　茜
欠席と決めてふわりと力抜け
倉吉市　中村　毅
慣れてきた職業欄の無に丸を
江南市　脇田　雅美
頑固者信用だけは持っている
鳥取市　吉田　弘子
節電にもう負けている神経痛
明石市　糀谷　和郎
憎しみを連れて年越すシーベルト
岸和田市　増田　隆昭
おせちにも飽きておそばのうまいこと

西宮市　緒方美津子
やさしさを顔で判断せんといて
高槻市　富田　美義
欲という一字が俺を振り回す
鳥取市　永原　昌鼓
目が冴えて耳鳴りばかり聴いている
堺　市　大隅　克博
散らかした部屋を眺めて孫想う
大阪市　榎本　舞夢
孫の名が増えて嬉しい箸袋
枚方市　丹後屋　肇
白い息エネルギッシュなセリの市
米子市　後藤美恵子
老いの夢つめこみ過ぎる設計図
高知県　小澤　幸泉
職を引くシナリオまたも書き直し
西予市　黒田　茂代
白馬の騎士も野獣もまわりから消える
鳥取市　池澤　大鯰
風邪酷し咳で腹筋硬直す
藤井寺市　若松　雅枝
艱難辛苦耐える若さは持っている
塩竈市　木田比呂朗
言い合い後続いています疑似平和
八尾市　村上ミツ子
犬かきで人生の海やっとこさ
三田市　雑賀　一泉
メディアども家族の会話妨げる

共選欄　檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　738句）

「目指す」　福士慕情選

初日の出プラス志向で行けという　札幌市　三浦　強一
それなりに目指せば見えてくる結果　シドニー　坂上のり子
親と子の目指すゴールにある段差　京都市　桝本　宏子
志望校絵馬に大志が光ってる　堺　市　加島　由一
子が目指す国公立の高い壁　和歌山市　磯部　義雄
叶うたび休まず目指す次の夢　鳥取市　深澤千恵子
出航の波高くても沖目指す　海南市　小谷　小雪
人様に言えぬが目指すものはある　高知市　小川てるみ
コツコツコツ大樹めざしている苗木　大阪市　津守　柳伸
目指すものあってコツコツ貯めている　八尾市　村上ミツ子
目標を見つけてからの猛ダッシュ　河内長野市　谷　久美子
古稀過ぎてペラペラ英語急がねば　泉大津市　助川　和美
てっぺんを目指す男の面構え　大和郡山市　坊農　柳弘
天元を目指して男石を置く　姫路市　古川　奮水
もう少し走ろう虹を掴むまで　東かがわ市　清川　玲子

「目指す」　池森子選

瓦礫から大樹たらんと発芽する　弘前市　稲見　則彦
復興を目指して箍をしめなおす　紀の川市　宇野　幹子
復興へ竜はすっくと立ち上る　田辺市　岡本　昇
大阪都言葉に酔っているけれど　豊中市　源田　啓生
ピカピカに錆を研いて万端に　西脇市　七反田順子
てっぺんを目指す男の面構え　大和郡山市　坊農　柳弘
大海を目指して泳ぐメダカの子　松江市　藤井　寿代
目標をまた練り直す喜寿の春　大阪狭山市　矢野　梓
目指すものあって漲る底力　和歌山市　上田　紀子
目指すものあって心はまだ折れぬ　豊中市　江見　見清
目指すとこもう一歩迄来ています　鳥取市　津村　律子
目指すもの探し求めてなお遠い　高知県　小澤　幸泉
要介護まだ追いかける駒がある　富田林市　片岡智恵子
目指すものそっと見守る鬼瓦　松江市　川本　畔
目指すのは百歳までの神の加護　羽曳野市　福田　悦子

下積みを耐え抜く先に目指すモノ
藤井寺市　鈴木いさお

今日出来た事があしたも出来るようにんげんに成ろうと羽化を重ねてる
米子市　中原　章子

なぜ駅はこんなに遠い千鳥足
富田林市　中井　アキ

懐に目指す炎を抱いている
西宮市　足立　茂

言霊を信じ目標大書する
枚方市　海老池　洋

三万句までは4B放さない
高槻市　片山かずお

豊作を目指す作業に嘘はない
松江市　三島　淞丘

頂点を目指す先には敵が待つ
鳥取市　鈴木　一弘

都構想目指し大阪動き出す
和歌山市　喜田　准一

大阪が目指す未来に賭けてみる
大阪市　笠嶋　恵美

切符二枚春を探しに出掛けます
箕面市　寺井　柳童

二人三脚共に目指したユートピア
岡山市　工藤千代子

目指す物ずれた夫婦に隙間風
藤井寺市　太田扶美代

ケア付きのホームに入り恋をする
堺　市　西村りつえ

生活より目指す心の幸福度
池田市　上山　堅坊

双六の上がり桃源郷がある
大阪市　鶴田　遠野

ゆるゆると銀河を目指す母の舟
大阪府　籾山　隆盛

頂を目指す若さとすれちがう
大阪市　津村志華子

目指す山見えて足どり軽くなる
橿原市　居谷真理子

頂点を目指すと角が生えてくる
神戸市　山口　光久

一番を目指し寝袋持って出る
大和高田市　鍛原　千里

一番を目指す寿司屋のクロマグロ
茨木市　藤井　正雄

中高大夢の空気が抜けてくる
弘前市　髙森　一呑

五キロ減遅々とすすまぬのが悩み
唐津市　坂本　蜂朗

極楽を目指す陽気な赤とんぼ
尼崎市　長浜　美籠

頂点を目指す意地欲消える歳
西予市　黒田　茂代

狙ってた的幻となって冬
米子市　小塩智加恵

ひとり遊び出来る女を目指してる
枚方市　海老池　洋

何処を目指すかそして荷物を確かめる
長岡京市　山田　葉子

手が届くまでを楽しむ龍で居る
松江市　松本　文子

あかつきの峯を目指して靴しめる
和歌山市　柏原　夕胡

目指すのはいつも背中を見せる位置
姫路市　古川　奮水

究極は蟻の目線で目指す山
備前市　森　ふみか

目指すのは絆だったと思い知る
青森県　松山　芳生

頂点を目指すと角が生えてくる
大阪市　坂東　倫子

腰痛を押え頂上睨みつけ
大和高田市　鍛原　千里

鳴呼樹氷未来を目指す音がする
八尾市　田邊　浩三

嘘言わぬ土とこっそり生きてゆく
雲南市　菅田かつ子

にんげんに成ろうと羽化を重ねてる
篠山市　遠山　可住

日日目指すことが多くて目が生きる
富田林市　中井　アキ

ダイエット目指すが旨い冬の鍋
三田市　福田　好文

頂点を目指す手前で試される
吹田市　大谷　篤子

極限を目指す目付きが尖ってる
池田市　栗田　久子

目指してるゴールに絆繋いでる
神戸市　山口　光久

目指すもの抱いてるだけで温かい
岩出市　藤原ほのか

川西市　米原　雪子

生涯の一句目指して辞書捲る　札幌市　小沢　淳
復興を目指して弾む槌の音　藤井寺市　若松　雅枝
被災の地新成人の目指す夢　尼崎市　小池　幸子
消費税目指し算盤入り乱れ　唐津市　仁部　四郎
再建を目指す足場が揺るぎだす　和歌山市　玉置　当代
バーゲンへ女の足は迷わない　富田林市　山野　寿之
急がねば目指した夢が遠ざかる　富田林市　片岡智恵子
嘘言わぬ土とこっそり生きてゆく　篠山市　遠山　可住
善人にならないように生きている　大阪市　岩崎　公誠
町工場目指す宇宙にネジ一本　奈良県　中村　勝弘
青虫の目指した先は青い空　和歌山市　古久保和子
雲雀よりちょっぴり低い雲を追う　羽曳野市　徳山みつこ
新しい世界目指している翼　和歌山市　福井　菜摘
大宇宙目指しロマンを持ち帰る　出雲市　竹治ちかし
良寛の心境目指す結跏趺坐　紀の川市　辻内　次根
仏像の慈悲光るまで彫り上げる　弘前市　岡本　花匠
極楽を目指す陽気な赤とんぼ　西予市　黒田　茂代
雪掻いて掻いて津軽へ春を呼ぶ　青森県　松山　芳生
文系の見事な誤字で絵馬かざる　黒石市　佐藤　古拙

秀　句

瓦礫から大樹たらんと発芽する　弘前市　稲見　則彦
師の影を目指して歩む亀である　尼崎市　長浜　美籠
楽園の来世を目指す白い画布　八尾市　髙杉　千歩

雲雀よりちょっぴり低い雲を追う　羽曳野市　徳山みつこ
完璧を目指し輪の中を追われ　京都市　都倉　求芽
目指すもの雲散をする途中下車　横浜市　小野句多留
響き合うまで彫り続ける自画像　富田林市　関　よしみ
目指すものあってエンピツ尖らせる　河内長野市　針生　和代
半世紀目指したものは変形し　神戸市　大島まさる
ゆるゆると銀河を目指す母の舟　大阪市　津村志華子
目指したは富士山着いたのは樹海　松山市　宮尾みのり
数式は違うが目指すのはひとつ　鳥取市　加藤　茶人
善人にならないように生きている　大阪市　岩崎　公誠
頂上を目指し仏心濃ゆくする　大阪府　桑田ゆきの
矢印の指示に徘徊するわたし　豊橋市　藤田　千休
目指す夢真一文字のままがいい　松山市　髙橋　宏臣
七分の一を目指して虹になる　鳥取市　森山　盛桜
双六の上がり桃源郷がある　大阪府　籾山　隆盛
楽園の来世を目指す白い画布　八尾市　髙杉　千歩
目指すこと多々ある天よ待ってくれ　富田林市　中崎　深雪
身の程を知ってしまった夢の位置　橿原市　安土　理恵
目指すものあり引金は引きました　大阪市　谷口　義

秀　句

賽は投げられた粛々目指すのみ　寝屋川市　森　茜
どの指も戦う姿勢崩さない　砂川市　大橋　政良
とこしえの流れに目指すもの朧　松江市　石橋　芳山

英語 de Senryu ③

麻生路郎句集『旅　人』

英訳　吉村　侑久代
（岐阜保健短期大学）

幻の中に時計が鳴つてゐる

in my illusion
the clock
is ringing

失戀が　彼を日曜画家にさせ

his broken heart
makes him
a Sunday painter

～リバーウィローのため息～

和田垣謙三による本邦初の川柳英訳が『吐雲録』に紹介されたのが大正三年で、十年後には成見延亀、上床新助共訳による300頁から成る『英譯川柳名句選』SENRYU short witty odes（日州新聞社　宮崎市）が出版されました。訳者は川柳を民衆芸術と規定し、柄井川柳選による江戸時代の300句を選んで英訳しています。序文の中で「形容詞と名詞と僅かの動詞と多くの感嘆詞との排列にて川柳を試んか如何にして川柳独特の機知とユーモアとに溢れしめ得べき、滑稽、深刻、徹底、人情の機微を穿ち得べき、寸鉄の鋭鋒と活殺自在の妙技とを表はし得べきや」と、英訳の工夫と川柳の形態の独自性を述べています。この『英譯川柳名句選』から一句、吉原を詠んだ川柳を引いてみましょう。

「すっぱりと癒りましたと鼻が落ち」

"Completely recovered," /Says he. /But alas! /His nose is gone.

個性

古手川　光選

筆跡で大方読めるお人柄　(吉)弘子
個性派と言われ万年平社員　栄呼
曲げられた個性が並ぶ盆栽展　像山
強すぎも無くても困るのは個性　ヒデコ
わたくしの個性ときどき頭打つ　朝子
焼酎の産地産地の甕の味　淳
お辞儀する所作にも滲み出る個性　黒兎
個性的ほめ言葉とも嫌味とも　直
シルバーの個性が光る趣味の会　堅坊
あの人だ右肩上がる年賀状　としお
失言の大臣だけが個性的　蜂朗
千羽鶴一羽一羽にある個性　よしみ
ユニークな人で周りが苦笑する　唯教
下積みで磨いた個性黒光り　公誠
私には私の顔があるんです　久美子
海外も大阪弁で通す母　(金)宣子
肩書きの中へ個性をとじこめる　幹子
埋れた個性見出す師に出会う　雅枝
ブランドに包まれ消えている個性　遠野
好き嫌い評価を二分するピカソ　淳司
教室の中で個性が消えていく　(花)順子
どんぐりの背比べにもある個性　美智代
わたしにはわたしの句しか作れない　茂代
酒癖も個性泣く人笑う人　淞丘
せっかくの個性芽をつむ親のエゴ　(山)節子
出る杭を打って個性が育たない　章司
強すぎる個性で招く四面楚歌　義雄
呱呱の声早くも凛と自己主張　敏治
個性派の演技がドラマ盛り立てる　碧
交ざり合う個性が醸すいい仲間　美千代
魅力ある個性にこころ盗まれる　菜摘
人は人あせらず我は我の道　山久
反省をするたび消えてゆく個性　かずお
個性です曲った事は大嫌い　靖博
好かれるも個性嫌われるのも個性　(鈴)いさお
香り過ぎムカッとさせる薔薇もある　みつこ
常識の範囲の個性なら許す　一粋
いいところ一つもないという個性　佳
それぞれの個性いかせる平和な世　(江)勝弘
満開の桜にもある自己主張　(後)美恵子
ポジションを変えると光り出す個性　(稲)則彦
美人ではないが男を引き寄せる　泰女
障がいを個性と思い生きている　かつ子
他人の目気にせず自分色で咲く　人
天　地
どの子にもキラキラ光る物がある　セツ子
軸　**北村賢子**
独裁へみんなピエロになる個性　きっこ

カーブ

喜田　准一選

そのカーブ曲がれば青い鳥になる　大鯰
カーブした過去だが誇りだけ高い　(宮)弥生
次の角曲がれば敵が待っている　輝夫
稜線のカーブに母を見る故郷　ちかし
僕よりもあなたのカーブきつくなる　小雪
このカーブ曲がれば明日が見えてくる　セツ子
人生に紆余曲折の花遍路　唯教
街かどのカーブミラーは知っている　一弘
一病を持ってカーブに立ち向かう　捷也
七坂もカーブも越えた自負の顔　茶子
七曲り過ぎて里まであとわずか　黒兎
カミさんの出方を探るカーブ球　森生
一徹な意見カーブを迫られる　一風
本心をジョークにのせてカーブ打つ　日の出
貴方との出合い頭を避けている　みつこ
ふる里がカーブミラーに遠ざかる　遡行
先頭がカーブを行けば続く蟻　俶子
直線を曲がって歩く酔っ払い　玄也
恋ごころほんのり君へカーブする　(渡)富子
怒ってる妻へは外角のカーブ　(鈴)いさお
もう歳か妻はカーブでせめてくる　(奥)五月
激論もゆるいカーブで息を抜き　直

人生のカーブで見せるひと芝居　(上)紀子
風紋のカーブは砂が泣いている　(七)順子
古稀からのカーブブレーキ踏みつづけ　公誠
大惨事甘く見過ぎたカーブから　(福)英子
スローライフときどき妻の変化球　柳弘
最近は妻のカーブを躱せない　孝一
カーブまだ知らない若い机上論　正雄
カーブミラーに未練の雨が降っている　幹子
曲がり角いつでも妻が給油する　光久
あの角を曲がると僕の秘密基地　正和
光源氏にカーブしていく二十五時　碧
丁重な言葉で返す変化球　せつ子
み仏の丸いカーブに癒される　朝子
来た道だ紆余曲折を楽しもう　哲男
急カーブ切った話がきな臭い　菜摘
　佳
小骨つけカーブしながらくる言葉　(西)悦子
会長も社長もカーブが好きな人　四郎
カーブして国に届かぬ民の声　芳山
曖昧な記憶を辿っているカーブ　扶美代
死神がいっぽん釣りをするカーブ　霜石
　人
沢山のカーブを妻と越して来た　典子
　地
魔のカーブ花束雨に濡れている　慕情
　天

七曲り越えて私の味を出す　**三島淞丘**
　軸
ヘソ曲げたらしい茶碗の割れる音

しっかり

有沢せつ子選

固い結び目に約束事が一つある　よしみ
しっかりと鍋と蓋とで睦まじい　光久
しっかりとレンジが主婦の仕事する　(西)悦子
運を掴む汗をしっかり掻いている　茂代
しっかりとドナーカードへ自分の名　くにこ
宅配にしっかり母の愛を見る　慕情
足元がしっかりとせぬ国憂う　照彦
定年後しっかりヒモに繋がれる　和郎
しっかりと働き居場所無い家庭　賢子
しっかりと議論する程まとまらぬ　裕花
しっかりと打ちたい釘がよく曲がり　悦男
しっかりの筈も畳に蹴つまずく　勝視
しっかりとし過ぎて可愛さに欠ける　扶美代
計画をしっかり立てて悪だくみ　圭一郎
まつ毛までしっかり付けて電車降り　まみ子
しっかりしろ優越感が世話をする　大鯰
結婚費用しっかり溜めてまだ独り　雅枝
しっかりと画像目にした大津波　淳
句読点確かめ読んでいる祝辞　遠野
鯛やきの尾までしっかり詰まる餡　俶子
雑巾がぎゅっと絞れる子が減った　淳司
しっかりとヒザを叩いて忘れてる　公誠

二人三脚妻がしっかり紐結ぶ　あずま
しっかりとお気張りやすと妻の檄　孝一
しっかりと貯めたお金が使えない　好文
崩れずにしっかり酒を飲む血筋　(吉)いさお
生き恥をかいてしっかり生きている　一粋
しっかりと閉めて安心老い住まい　昌鼓
じいちゃんをしっかり使う嫁の声　ヒロ
一つ一つ頷いて聞くお説教　像山
しっかりのままお別れをいえるかな　みつこ
しっかりと生年月日まだ言える　千代子
しっかりした嫁だと愚痴をこぼしてる　蜂朗
義理人情しっかり根づく路地に住む　(渡)富子
食べて寝てしっかり笑うのが日課　茶子
ネジ一本抜けたしっかり者の姑　真澄
しっかりと豆噛んでいる二十本　冴子
　佳
妹に仕切られている形見分け　(志)千代
しっかりとせんとホームへ入れられる　キヨミ
しっかりと語り伝える戦の非　深雪
しっかりと読まれ弔辞が味気ない　古拙
しっかりを呪文のようにひとり生く　朝子
　人
甚六の夫にしっかりさせられる　泰女
　地
しっかりと覚悟を聞いてくる念書　かつ子
　天

親の非を諭すちいさな膝小僧　**高瀬霜石**
　軸
守秘義務へ男結びを口にする

初歩の教室

題 ― カラー

鈴木公弘

この「カラー」を色と判断された場合（出題者もそのつもりでした）、考えてほしかったのは、色は無限にあるという現実です。どんな色（カラー）を使っても出題の意図からは外れない、ということになります。

【工夫がほしかった句】

原 国葬に真紅カラーのキムジョンイル花　由美子

添 国葬へ真っ赤な涙までは出ず

特定の人物を描く川柳は、もともと背景がぼんやりしていますので、難しいものです。極端な誹謗中傷にならぬよう適度に折り合いを付けるしかありませんね。

原 ときめいたカラー番組なつかしい　雅信

添 カラーテレビがごく当然の家具となり

回顧の句より現在を描いてみてください。

原 兄弟もそれぞれ違うカラーあり　和幸

添 兄弟のカラークローンとは違い

原 粕汁や過去すてきれぬ夜カラー　(宮)俊子

添 粕汁や過去捨てきれぬ色を抱き

原 あのギャルもメイクで変わる青りんご　(畑)節子

添 青りんごギャルメイクして落ちていく

原 宮参りセピア色でも凛として　志郎

セピア色とはご自分のこと。ご自分を奮い立たせている句ですね。東日本大震災に遭われた方々、少しでも立ち直っておられましょうか。

原 色付けが出来ないものか放射能　滋彦

お気持ちは理解します。しかしセシウムは青、ストロンチュームは黒などと色分けできても、放射能物質を生産する限り生物絶命への危険は消えません。

原 マイルドなカラーの花を胸に抱く　定廣

淡い恋心でしょうか。

原 若い頃カラーもアップも堪えた顔　健二

添 若い日のカラー・アップに堪えた顔

たいへんな自信家ですが、過ぎた話ですので…今はいかがでしょうか。

原 三十年我が家のカラー染まぬ嫁　智加恵

お嫁さんの句ですよ。ここまで言い切ってよいのでしょうか。お嫁さんに句を読まれたら大変ですよ。

【丁寧に書いてほしかった句】

原 発表会ひ孫おどるカラーシャツ　(山)久子

添 発表会ひ孫が踊るカラーシャツ

原 赤と白ワインカラー着てイケメンだ　ミヨノ

添 ワインカラー着ている方がイケメンだ

原 古稀迎え染めた模様は未完成　憲

添 古稀なのに染めた背中は未完成

原 アルバムのカラーは褪せても元気です　青生

添 アルバムのカラー褪せても元気です

中8でした。素直な良い句だっただけに残念です。

原 洗濯物カラフル干して老い二人　開子

添 洗濯物カラフルに干す老い二人

原 スタンドがカラーで染まるサポーター　眞砂子

添 スタンドをカラーで染めるサポーター

原句では、作者はスタンドのサポーターを「見て」います。それでは写生になりますので、あなたもサポーターの一人として添削しました。

原 紅白の色に染まらず他チャンネル　弘光

添 紅白に染まらぬ石を抱いている

原 カラー牡丹大根島が日本一　紀美恵

添 緋牡丹は大根島が日本一

添削の緋牡丹には特に根拠はありませんが、確かに四、五月の連休頃は見事な島になります。

原 あの人のカラーにそまらぬ強気かな　記久乃

添 あの人のカラー拒否する女です

原句は中8です。句仕立てはできるだけ明確なほうがいいと思います。

【入選句B＝発想が単調だと思える句】

ホワイトカラーの出番は遠くなり　(株)玲子

できれば定型に嵌めてみてください。

春雨にカラートタンが歌いだす　義　雄
責任を貫き通す父の色　久美子
できれば父母に逃げ込まないでください。
派手かしら羞じらうも妻春帽子　一　兆
同じよう育てて違う子のカラー　起世子
湿原で咲いたカラーは手折れない　心　咲
湿地に足を取られそうだから手折れないのか、保護種だから手折ってはいけないのか…そこがポイントです。
主義主張カラーを持てと親の鞭　一　泉
赤いシャツ着たら生き方を変えてみる　(楠)富　子
「赤シャツを着て生きる道変えてみる」。
何色で開くか二十才の蕾達　ふみか
「何色で咲くか二十歳の蕾たち」。「開く」では中8になります。
泣き悔むカラーの違いお国柄　勝　治
政治体制の違いを悔んでいる場面ですね。「くやむ」は「悔やむ」と表記しましょう。
家中に染みこんでいる亡妻の色　堅　坊
「亡妻」には「つま」とルビをふってはいかがでしょうか。私はそうします。
この人のカラーに合わせ五十年　ひろ子
その結果を描いてほしかったですね。
忍耐が育つ故郷の冬の色　孝　代
日本海側の鉛色の空には「辛抱」と描いてあります。
色彩も御節ぶるまい重を詰め　(山)妙　子
御節と判断しましたが、次回からは楷書で書いてくださるよう、お願いします。
日を浴びて果物日びに質上げる　孝　明
「陽を浴びて質あげていく果物よ」。「果物よ」の後に「そして人間よ」と入れてみてください。
見合写真カラー張り込みゴールイン　利　子
カラー写真が善男善女にしたのですね。
写真屋さんの腕に感謝しましょうか…。
春津軽百花繚乱フルカラー　(稲)則　彦

【入選句A】

本当に卒業ですか色恋は　宏　之
新世帯見るものすべてピンク色　温　子
ゆるキャラが子供色して闊歩する　寒　之
未来図はどんなカラーが似合うだろう　美知江
旧姓であんたのカラー甦る　道　子
道の駅ローカルカラー多彩です　紀　雄
ブルーカラー流した汗に嘘は無い　淑　子
嫁の持つカラーに染まり温い家　こずえ
酒の席昭和のカラースルメ味　安　子
もう八十路好きに生きます私色　エ　ミ
重ね刷り夢の如くに変化する　冷　子
何色か染まる楽しみ孫と会う　美紗子
「楽」のほうが新鮮味が出ます。
色分けて予定書き込むカレンダー　宏　造
新人のカラーでゲット得意先　裕　美
四季の色窓を開ければ詩が浮かぶ　きっこ
父母といるセピアの写真懐かしく　(高)弥　生
野田カラー初の予算で打ち出せず　英　男
こと始め家族で飛ばすシャボン玉　律　子

【佳句】

静脈に青い思想を抱いて冬　幹　子
ハロウィンの黒いマントがはしゃぐ庭　のり子
地方色生かし観光客を呼ぶ　治　子
ジーンズを脱いで就活シャツカラー　真　澄
三回忌先代色が抜け始め　篤
チームカラーを生かして決めたトップの座　武　臣
自分色ようやく出せるリタイア後　加修子
躍動感カラーで少し高ぶらせ　雄　太
いざ勝負ラッキーカラーひそませて　菜　摘
声がわり男になれよ青リンゴ　一　子

【今月の推せん句】

場に馴染む為に殺した我がカラー　丸山　孔一
これぞ円満な処世術でしょう。

世界はひとつ青い地球に抱かれて　酒井　真由
私有財産制をやめてみませんか。

入社して思わぬ色にそめられる　大島まさる
思わぬ色がすべてをもの語っています。

【私の句】

連峰の夕焼けじっと見ています
白地に赤く負けた日も日曜も

（登載漏れ分は役員が添削して返却します）

秀句鑑賞

同人吟　牧野芳光

―2月号から

川柳は短詩文芸であります。それ故、五七五の中に自分の言いたい事を自分なりの表現で凝縮するものではないかと思っております。

初めて秀句鑑賞の記事を書くにあたってはお名前は存じていますが知らない人が多く、共感を得た句を感じるままに取り上げさせていただき、二十五句に絞らせていただきました。

恋をしているから雨の運動場

楽原道夫

そういう時があった。雨のグランドで泥まみれになりながら必死でボールを追っている。好きな人が見ているかも知れない。いや、きっと見ていると信じて部活をした。若い日に見たテレビドラマを思い出す。

犬だって逢いたい犬がいる散歩

福田好文

「犬だって」のフレーズに思わず笑ってしまった。そうなのだ、犬も逢いたい犬がいるけれど、それよりもご主人にも逢いたい人がいるので散歩しているのである。犬の散歩をそういう目で見ると楽しくなってしまう。

てにをはを間違えている損してる

山本希久子

そうです、てにをはを間違えると主役になるはずが、脇役になることが多々ある。どこでどう間違えたのか、いつも損な役を引いてしまう。

枯れてきて恋の炎が付きやすい

加島由一

本当に枯れたのなら恋はしないはずなのに恋にすぐ落ちるとは大いに矛盾している。しかし、ナンセンスでもサラッと詠まれると真実味が湧いてくる。

忘年会捨てるつもりの靴で行く

島田誠一

酔っ払って靴を間違えられるのは、よくあることである。なるべく間違えられないように目立つ所に置くようにするが、ボロ靴で行くのは究極の防御策である。しかし、時には新しい靴に変わることもある。

試着室ボンドガールを真似てみる

吉井菜々子

「ボンドガール」も懐かしい言葉になってきた。菜々子さんもあの頃を思い出して鏡に映してみられたのに違いない。いつまでも、せめて気分だけでも若くして生きて行きたい。

ライトアップ独り善がりの街である

細田裕花

ライトアップをした建物は、見た目には綺麗であるが、これ見よがしに映している感じもする。闇の中に浮ぶ建物の外の闇はどうなっているのか勘ぐってしまう。まさに独り善がりの風景がそこにある。

柊よ哀しいことが続きます

安土理恵

柊のトゲトゲはいつも身構えている感じがして、閉鎖的な心を表している。「哀しみ」の表現を柊に例えられたところは、的を射た表現である。

黍畑祈る形で海を向く

伊達郁夫

森山良子の歌う「さとうきび畑」が浮んでくる。作者も同じような時代を過ごされたと思います。沖縄の砂糖きびは海を向いて戦争のない世の中を祈っていることと思います。

救急車パレードの列真っ二つ

安達忠央

一読して視野に飛び込んで来る句である。パレードと救急車の対比がくっきりとしていて良い。写真で言えば、シャッターチャンスを捕らえたというところでしょうか。

本棚に冬眠つづく哲学書

水野黒兎

読んだとたんに思い出してしまった。二十代の頃に先輩からもらった「三太郎の日記」が読みさしのまま本棚に飾ってある。この年になって、ふと「先輩は最後まで読んだのだろうか」と考えてしまう。その先輩は二十年前に亡くなってしまった。

止まるたびマーキングするバスの旅

北野哲男

コーヒーをがぶ飲みしてバスに乗るとトイレが近くなる。年のせいかそうでなくてもトイレが近くなる。中国の草原で青空の下、一列に並んで用を足した時は気持ち良かった。あれをマーキングというのか。しかし、旅の恥はあまり掻き捨てにしない方が良い。

撒き餌かも知れぬ敬語が多過ぎる

横山捷也

敬語で話されるとつい警戒をしてしまう。初対面の人はともかく、普段つきあっている人から、いきなり敬語で話されると何か魂胆がある証拠。そういう時は敬語で返答しましょう。

バラの棘折ってご先祖にもあげる

福西茶子

庭に咲いたバラがあまりにも美しいので仏壇に供えてあげる。ご先祖が棘で怪我をされないように、私にも棘がありませんよと、棘を取ってしまう。作者の優しさがよくわかる。

鍋の底磨く明日が晴れるまで

木本朱夏

近頃はマキで炊くこともなく、鍋の底が煤で黒くなることもなくなってしまった。多分朱夏さんは心の中で鍋の底を磨いておられるのだろう。磨けばすぐに晴れてくると思います。

生き恥をさらすと見える敵味方

吉村久仁雄

極まった時に味方かそうでないかが判る。仲間であれ身内であれ、それは同じこと。その時に味方になってくれた人は、死ぬまで大切にしたい。人生の宝である。

首になりゃ里には仕事山とある

荻野像山

職がなくなっても古里に帰れば何とか食っていかれそう。自然の中で人間らしく生活できるような気がする。でも、今の仕事をせいいっぱい続けていくことに全力を傾ける。開き直れば人間は強くなる。

失言はするが無役に救われる

森山盛桜

政治家になって役がつくと、その責任の重さを忘れて、それまでと同じスタンスで喋ってしまう。役がつくまではそれで済んでいたのに、時に命取りになってしまう。好きな事を喋ることができる庶民の方がいい。

他にも好きな句がありました。

今日に生き明日に繋ぐと蟻の列

寺川はじむ

関接を外し昔の歌うたう

谷口義

腹八分残りの二分で薬飲む

山本玲子

お宝は妻ですうちは他に無い

吉村一風

漂白をしすぎて愛が実らない

糀谷和郎

可愛さも憎さも似てる目鼻立ち

加藤茶人

潮の香を嗅ぐと無欲な顔になる

中居善信

秀句鑑賞

―水煙抄

―2月号から

籠島恵子

そのうちにきっと脱皮をするだろう

酒井真由

大らかな気持ちで見守っている様子がうかがえ、共感を覚えました。

あぶられて秘密吐きだすピスタチオ

森ふみか

そうですか。これからはピスタチオを食べるたびにこの句を想い出しそうです。ピスタチオを食べながらこんな句がつくれるなんて勉強させられました。

世界地図今日はここらが揉めている

國實力

私達の平和の裏で、戦火にさらされている国を思う時がある。我が家でも世界地図を備えているのだが、開かなくなって久しい。

考えは行きつ戻りつ寝てしまい

田中都

寝てしまいがいいですね。大した事ではなかったと言うことでしょうか。

飲む友と歌う友とを使い分け

羽田野洋介

友達も倍、人生を二倍楽しんでいる達人で楽しい句です。

ストレスをなんば花月へ置いて来る

石田ひろ子

大笑いして帰られるのでしょうね。うらやましい解消法です。

ひとすじに妻を愛して疎まれる

藤田千休

そうですよ。愛しているのは分かりますが足枷になってはいけません。おしあわせに。

外苑のいちょう並木へ妻を置く

桑名孝雄

ほうらここにも愛妻家が…。韓流ドラマのワンシーンを思い出してしまいました。

梵鐘の余韻が過去を振り向かす

稲葉洋

徳岡神泉の絵に、夕暮れの梵鐘に振り向く小鹿の絵がありますが、思わずそれを思い出しました。寺の鐘を毎日聞いてそだったので、余計懐かしく思います。

重心をやんわり落すお付き合い

石田久子

作品の受け取り方は自由とは言えちゃんと受けとめられているかと思う時があるが、背伸びしないと言うことでしょうか。

正解の許容範囲を広くする

小谷小雪

正解を、一つにすると生きにくいですよね。がんじがらめに一つの答えを探すよりこれもあり有れもありで、歳を重ねるにつれ生き上手になっている自分に気付く今日この頃です。

相槌の途中で変わる風の色

下田茂登子

思いっ切り、思った事を言ってやろうと話合うつもりだったのに、顔を合わせると何にも言えなくてなんて事でしょうか。よくある事で共感を覚えました。でも相手にも有る事でしょうね。

黒田節父の笑顔を思い出す

神野きっこ

久しく聞いていない黒田節ですが、家族に手拍子を取られて歌われた、お父様の姿が浮かびます。この時の笑顔はとびっきりだったのでしょうね。

ぐずぐずとした子に今はせかされる

木見谷孝代

一歩また一歩を綴る一行詩

白川淑子

片づけは妻と二人で協議中

六田半徳

後の三句にも共感を覚えました。

15 「想定外」をつくらない

昨年の十二月二十六日に、福島第一原発事故調査・検証委員会は「中間報告」を公表しました。そのときに、震災後にしばしば使用されてきた「想定外」という言葉について、委員長の畑村洋太郎氏は次のように述べています。

「人は、『想定できる範囲はここまで』という線を引いてしまうと、もうそれ以外のことは考えようとしないものだ」

テレビの会見ニュースを見ていただけですのでアバウトですが、このような要旨だったと思います。それを聞きながら「川柳も似たようなところがあるな…」と思いました。

川柳のフィールドはとてつもなく広いということは、皆さんも日頃から感じておられる通りです。日常茶飯事から人間の深層心理まで。はたまた、海底や地中の世界から宇宙の果てまで、作品の対象にならないものはありません。

また表現の仕方も、具体的に分かりやすく述べる方法から、抽象的な表現や詩的な表現など等、明確に分類できないほどいろいろな形の川柳が混在しています。

そのような中で、何の目的もなくただ漠然と進むのではなく、「自分が理想とする川柳」に向かって精進を重ねることが最も大切なのは言うまでもありません。

しかしながら、自分が進む方向とは違う作品を無視することは、先ほどの「想定できる範囲はここまで」と決めつけるのと同じです。そのように「想定外」を作ってしまいますと、理想とする川柳以外の作品には無関心になって、一瞥もせず遠ざけるようになってしまいます。そして、川柳に対する価値観も、自分が理解できるものしか認めないようになりがちです。極端になると、自分が目指している川柳以外の形のものはみんな邪道だと排斥するようになってしまいます。

理想とする川柳に向かって精進を続けながら、ときどきは、異質な作品にも目を通して、その良さを認める度量もまた重要です。そこから、自分では表現し難い作品の良さを理解出来るようにもなってきます。それはまた、マンネリに陥りがちな作句の刺激にもなるでしょう。

当然のことながら、自分の肌に合わない作品と向き合うのは簡単なことではありません。「わけが分からない」という作品もいっぱいあります。しかし、どのような作品でも、作者としては真剣に創作した結果ですから、どこかに汲むべきものが有るはずです。いや、「汲むべきものがあるだろう。それを見つけ出してやろう」いう姿勢が大事です。

このような努力は、他者の作品の良し悪しを判断する力、いわゆる選句力を養うことにも繋がってきます。句会や大会の選を任されたとき、「私の好きな作品を抜きました」では、多くの人の納得を得ることはできません。また、自分が目指している川柳であるか否かということを判断の基準にしてはいけません。選句には、「好き嫌いや、表現のスタイルには関係なく、良いものは良い」という姿勢で臨むべきです。それが「先入観を持たない公平無私な選」です。

創作や選にとって最大の障害は先入観です。限りなく広いフィールドを四畳半にしてしまう「想定外」という先入観を作らないよう、お互いに用心したいものです。

奇数月の連載になります。

サンマは苦いの巻 ⑧

若い頃、よく飲んだ。一緒に飲んでいた先輩が、僕の魚の食い方の下手さに呆れて、皿を取り上げてしまった。「佐藤春夫の歌にもあるべ。サンマ苦いか塩っぱいかってさ。お前みたいな奴にサンマを食う資格はない。こんな具合に、はらわたも身も混ぜて食うのさ。このほろ苦さがなんともたまらないのさ」と、僕のサンマをぐちょぐちょにして、アッという間に骨だけにしてしまった。

2つ下の弟が死んだのは、4年前の1月。

長く勤めていた会社が倒産。ここから彼の歯車が狂った。職を転々、酒に溺れ、ついには離婚。人一倍さみしがり屋な分、日増しに生活がすさんでいったのは知っていたが、僕の言うことを素直に聞く弟ではなかった。

連れ合いと、糞の降る寒い寒い東京へ行き、骨壷を抱いて帰って来た。後始末などは、彼の別れた妻がいろいろ面倒みてくれたので助かった。

弟は、子供の頃から器用で、喧嘩も強くて、不器用で弱虫の僕をよく助けてくれた。兄貴風を吹かせるどころか、僕にとってはもっとも頼りになるパートナーであった。

団塊の世代イコール受験地獄。浪人は当たり前の時代。「とにかくどこでもいいから入って。後がつかえているから」という母の願い（？）に答えて、辛うじて東京の私立大学に潜り込んだ僕。

2年後、弟も出て来て、2段ベッドを買って一緒に住んだ。最初は僕が教えたギターも、すぐに僕より上手くなり、僕が生徒になった。

料理、洗濯、掃除から家計のこと一切、弟がやった。僕の役目は後片付けだった気がするが、あまり記憶がない。僕の始末が悪くて見ていられず、結局は弟がみんなやっていたのだろう。

僕が就職してからの2人の関係――稼ぎの悪い飲ん兵衛亭主と、しっかり者のカミさん――はすっかり定着した。

電話の1本も入れずに、ほとんど毎晩千鳥足の僕。その晩も酔っ払って遅くにご帰館。ご飯と味噌汁と、サンマ1匹がお盆に乗ってスーッと出てきた。

箸でつまもうとしたアサリが、汁に映った自分の目玉だったという落語のようなカラッ汁に、少し驚いて呟いた。

「んー。味噌汁にせめてネギでもパラッと欲しいなあ」

その瞬間、弟がキレた。

「そりゃあ、オラだって具を入れたいよ。サンマには大根下ろし添えたいよ。でもさ、兄貴。今、ネギが、大根が、一体1本いくらするか知ってるか？だいたいアンタ、家計にいくら入れていると思ってるんだ！」

いまだに、サンマのはらわたは苦手だ。でも、はらわたぐちゅぐちゅしなくても、いつだってサンマはほろ苦い。あの日の弟の泣き顔が目に浮かぶからだ。

(二) 回向院をゆく

まず最初は、作品によく登場する回向院をめざす。JR両国駅から南へ二百メートルほど離れた京葉道路（国道十三号）沿いにあった。

藤沢周平は『用心棒日月抄』（新潮文庫）の中で「回向院は総敷地五千百一坪、七月七日の大施餓鬼、また境内を借りてする諸寺の開帳には、ごった返すほど人が集まるが、ふだんは広い寺域はひっそりしている。犬の散歩は丈六の唐金の坐像がある本堂前から本堂の後に回り、三仏堂に出て蓮池脇にある楠の木まで来る。そして池をひと回りして帰るのである」と回向院を描いている。

現在の回向院は両横の大きなビルに挟まれた所に門があり、境内に入ると丸々と太った三匹の猫にニャーンと迎えられた。正面にある本堂はコンクリート造りのどっしりとしたものであったが、土地を切り売りしたのか、池はなく広さは一千坪前後になっていた。

回向院は、明暦の大火による十万八千余人の焼死者と溺死者の菩提を弔うために建立されたもので、その供養塔は残されていたし、隣には著名な戯作者山東京伝の墓があった。石碑には、山東京伝は深川木場の質屋の子として生まれたと記していた。また奥の方には、なぜか鼠小僧次郎吉の墓もあった。江戸時代の境内では勧進相撲が年二回行われ、明治四十二年に国技館ができるまで続いていたという。

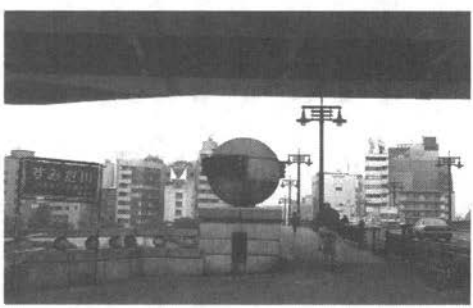
回向院の裏の長屋には、深川生まれ深川育ちの作家、宮部みゆきが描く『本所深川ふしぎ草紙』と『初ものがたり』（いずれも新潮文庫）は、本所深川を飛び回る主人公の岡っ引き茂七親分が住んでいたところでもある。

回向院斗ねはんに猫が見え　（柳多留より）

回向院から西へ二百メートルほどで大川（現在は隅田川）を渡る両国橋に着く。

「未の刻（午後三時）過ぎの両国橋は、人通りが多かった…空は晴れて、もの憂いような春の光が橋の上にも橋の下の川水にもふりそそいでいる」（『用心棒日月抄』）と両国橋の情景を藤沢周平が描いていたし、「両国橋の東詰めには、元禄のむかしからつづいている蕎麦屋（厚治）という老舗がある」と池波正太郎のシリーズもの『剣客商売』（新潮文庫）で紹介されていた。その『剣客商売』の中で、蕎麦屋で酒を飲むという描写は池波正太郎が編み出したものだと、誰かが解説していたことを思い出す。

両国橋は九十二間（約百七十三メートル）もあって、橋の上ではあらゆる生活品が露店で売られていたという。



武田帆雀さんを偲ぶ

ふうもん吟社　両川洋々

平成23年11月22日死去（79歳）
朝日新聞とっとり柳壇選者
川柳塔社同人
㈱川柳公家の会々長
鳥取秋芳会々長

帆雀さんと出逢って、四十年以上にもなろうか。当時私が主宰していた国鉄の職場川柳会である、「国鉄鳥取川柳会」へと毎日足を運んでいただき、会の終了後は弥生町へと繰り出して飲みあかしたのが、今はなつかしい。

帆雀川柳はスタート時点から、本格川柳を目指しており、川柳の持論には一切の妥協を許さない厳しさがあり、時にわずらわしくもありましたが、頼母しくもありました。

負け犬の首でよければ差し上げる
大粒の涙に演技賞出そう
実印の色鮮やかに人が死ぬ
殺し文句を二通り持っている
審判は神さま文句言うでない
かど番の酒にビビレちゃいませんぞ
帳尻を合わす数字は知っている
落書きの筆者よ俺もそう思う
野良猫と睨み合いしている無職
優雅さを堪能させて菊が散り

帆雀さんはズバリズバリと世相を切り捨てる反面、人情家としての佳句をたくさん発表して、柳友を楽しませてくれた功績は大きい。臨終の日まで会長を務めた鳥取秋芳会は、鳥取で唯一の菊作りの会であり、その会長を十六年間引き受けて多くの後輩を育て上げられました。

秋の菊花展に川柳会も賛同して、川柳の色紙短冊展を開催したのも、今では過去と言う言葉でしか表現できぬのが悲しい。

最後の菊花展では市長賞と総合優勝のダブル受賞で、会長の役目は果たしたぞと言う満足気な遺影が印象的でした。

――安らかな成仏でありますように。

〈弔吟〉

帆雀があの世へ拉致をされちまい

（洋々）

エッセー

川柳と共に

清川玲子

川柳との出会いから、もうどれぐらいの年月が経ったであろうか。少しオーバーではあるが、頭の内に川柳を忘れている日は、まず無い。いつ頃からか習慣になっている。子供が巣立った老後の余生に何か趣味として打ち込めるものをと思いたち、白鳥の川柳塔おっぱこ吟社に入会させていただき、川柳と共に歩むこととなった。目に触れるもの、心にひびくものすべてが新鮮で川柳に傾いていった。会のみなさんはやさしく、自転車で通う句会が少しも苦にならなかった。

K師に「これを読んでみなさい」と古びた本を渡され、川柳塔の大家の存在も知った。『川柳とは何か―川柳の作り方と味い方』麻生路郎著に川柳のイロハや具体的な川柳の作り方を教えられた。

『川柳でんでん太鼓』田辺聖子著からは川柳のたのしさ、名句の数々を味わった。

おれに似よおれに似るなと子を思い　路郎

二階を降りてどこへ行く身ぞ　路郎

人恋し人煩わし波の音　栞

一歩出ずれば吾れ旅人となる心　栞

恋人の膝は檸檬のまるさかな　薫風

島一つ買うて暮らせば涼しかろ　薫風

川柳塔大会へは、栞師七回忌に先輩の柳友の車に同乗させていただいたのが初参加だった。その後、先輩の退会により九百号大会、千号大会は一人だけで出席したが、天笑師の人間味あふれる笑顔がそこにあった。

昨年の塔まつりは蘭幸主幹の第一回大会、ぜひ参加と決めていたが体調の悪さでやむなく欠席せざるを得なかった。地元での毎年開催される約二百名参加者の大会には、背中を押されるようにして足の重さを感じながらの初参加だったが、幸運にも二、三句呼名をすることが出来、それ以来、十三年間出席させていただいている。会場での馴染みの顔顔顔。お互いに歳もよせているが、ほっとあついものが胸にせまる。

現在は、川柳塔への投句と地方新聞社の川柳教室に通っている。往復の車中にもたくさんの句材がある。宿題句の互選と講師に添削していただく教室だが、ワイワイとにぎやかな時間に気の合う柳友とのランチタイムにこの上ない交流の場がある。

趣味の領域内で手さぐりで来た道であるが近年勉強不足をひしひし思い知らされる。

けれど私の心をすっかり捉えてしまっている川柳。体力減の健康に気をつけて、背伸びせず、視野は広く、自分が息づいている句をめざして歩んで行きたいと思っている。

近詠二句

好物を前に戦う血糖値

落ちこんだ児の夕食にのるカレー

本社二月句会

二月七日（火）午後一時
アウィーナ大阪

前日の雨が少し残るうっとうしい日和だが、初出席5名を含む11名の参加と、投句者12名で二月句会は開催された。

今月のお話は新葉館出版の松岡恭子さん。タイトルは「川柳を語ろう」川柳マガジンは十七年目に入り、今年の目標は「一歩踏み込み川柳を語ろう」と熱い思い。

選者についても作品を具体的にこのように鑑賞しようというものが確定されていないし言葉一つも読み手の取り方で全く違う句になることや、大会のあり方、中八の句など例を挙げての熱弁。特に中八の統計では定型感は男性63%女性57%で、20代～40代に中八の句が多いとの事。

諸問題に結論は出ていないが、初心者に語る事はいい事で、その役割の一つが雑誌であると締めくくられた。（まつお記）

月間賞は、河内月子さん（堺市）

（司会ー美籠・善純）（脇取りー賢子・蕉子）

（受付ー武彦・美花）（清記ー勝弘）

席題「寒い」　岩崎公誠選

天気図に長々居すわる寒気団　扶美代
寒いから頭の中も目を覚ます　みつ子
氷瀑の出口あたりに春の神　よしみ
雪おろし高齢者には命がけ　ふりこ
ヒューヒュー又三郎が駆け抜ける　葉子
目覚しをたびたび止める寒い朝　宣子
この寒さ本気で冬眠考える　(久)千代
寒いとは言えぬ仮設を思いやる　由一
外は雪熱いコーヒー飲んでます　日の出
笑いの火絶えて大阪寒くなり　昭
ひび割れた頃を思うて堪えてます　天笑
増税の噂聞いてる寒い耳　希久子
言い勝って寒い視線を浴びている　楓楽
天と地の真ん中辺は寒気団　よしみ
北からの便りに結露ついている　朱夏
遊びなら寒いとこでも飛んでいく　(江)勝弘
懐もおつむも寒うなりました　敏治
デブですがやっぱり寒い冬は厭　日の出
ボランティアの心がぬくい雪下ろし　進
原発に基地に列島冬景色　冨美子
ああ寒むと冷え性の足入れてくる　耕治
風評に馴らされてゆくさむい耳　朱夏
懐は寒いが妻は元気です　まつお
フトコロの寒い所へ孫が来る　(奥)五月
次々と背筋の寒くなるニュース　玄也
うすら寒いトップだ日本危ないぞ　直樹
冬山にそれでも登る親不孝　保州
寒い朝気合い何度も入れている　ダン吉
寒くない備蓄の脂肪カバーする　忠昭
意地見せた乾布摩擦で風邪を引き　淳司
北風が僕を放り込むヤキトリ屋　茂
お腹からぬくめています寒い夜　月子
佳
着膨れのままで動かず風邪も引き　月子
凍み豆腐じわっと温い母の出し汁　寿之
寒がりと隣り合わせで寒くなり　天笑
寒風に負けぬ一輪咲きました　一歩
十を聞き一を覚える寒い脳　黒兎
人
熱燗でなければならぬ冬の酒　保州
地
ふところが寒いと知恵が出て来ない　ばっは
天
信じてた人から寒い嘘を聞く　(久)千代
軸
きらきらと寒気の朝に僧素足

兼題「厄」　山田葉子選

厄払いした日に起きた不整脈　則彦
厄落しするお賽銭はずんどく　靖鬼
厄介な話は後で仕分けする　いくひろ

厄除けに貴方の分も飲んでます　美花
すってんころりんおでこのこぶですんだ厄　哲子
厄介なことは聞こえぬ振りをする　義
厄落しにイチゴ大福五つ食べ　義子
厄病神の最たるものは風評だ　保州
厄介をいとわぬ温いボランティア　恭昌
おみくじに女難の相とある期待　郁夫
厄よけの神社もさらう大津波　(奥)五月
厄介になると離婚の娘が帰る　蕉子
厄などは気にしてませんフラダンス　耕治
厄介な話も金が丸くする　好
後厄を抜けたら再婚考える　克己
厄年をバネに翔び立つ子の気概　美智代
厄介なことに女と男でね　真理子
休肝日ほど厄介な夜はない　時雄
揉める客帰りは塩がお見送り　茂
貧乏で厄歳なんか忘れてた　ばっは
家族の厄一手に受ける役回り　希久子
後厄が済んで戻った不摂生　進
厄介なことには触れぬロゼワイン　美籠
手洗いをピカピカ磨き厄落し　すみ子
厄払いに行ってインフルもろてくる　見清
酒好きの厄介者を飼っている　いさお
厄がある内が華だと母卒寿　宏子
六十路過ぎもう厄年のない齢　かずお
厄除けのつもりあなたのラブレター　信子

厄介やなあデートについてくるなんて　わこ
厄年でなくても女難やってくる　修
厄になど縁なく汗をひたすらに　ダン吉
佳
まがり角厄を拾ってくれた亡母　よしみ
厄なんかどこ吹く風と酒を呑む　満子
独裁者の指ひらひらと厄を撒く　朱夏
厄災の種はわたしの口らしい　朱夏
厄落とし女はとことん鍋磨く　求芽
人
厄年は一息入れて羽繕い　集一
地
厄除けに貧乏神と同居する　千恵子
天
厄年に女盛りという踏絵　集一
軸
軽快なステップ厄を裏返す

兼題「つもり」　加島由一選

整理するつもりの本を読みふけり　よね子
骨埋めるつもりが肩を叩かれる　准一
先に逝くつもりで何もせぬ夫　則彦
死神が来ても返れと言うつもり　淳司
詫びるつもりないが頭は下げておく　玄也
子のつもり親のつもりにある格差　正雄
ノックしたつもりでいますチョコレート　冨美子

鬼になりしっかりコーチするつもり　わこ
百までは生きるつもりのコラーゲン　千里
言ったつもり聞いたつもりのすれ違い　能子
被災したつもりではずむ義援金　保州
自己暗示食べたつもりでダイエット　善純
割り切ったつもりのひとが夢に出る　かずお
介護など視野になかった玉の輿　進
なんとなく無事にあの世へ行くつもり　哲子
ゼロ一つ消した見つもりなら買える　りこ
ぐちでないつもりが矢張り愚痴らしい　蕉子
白寿まで生きるつもりの今日の飯　堅坊
あの世へは笑顔一つで逝くつもり　久美子
俎板の鯉のつもりで税務署へ　和夫
安否聞くつもりの電話長くなり　なぎさ
ジャンボ籤当れば離婚するつもり　いさお
いつか読むつもりの本と年重ね年重ね　宏
金塊を抱いたつもりで暮してる　日の出
消したつもりやっぱり戻る胸騒ぎ　満子
好きだよと言ったつもりはありません　武彦
産むつもりリスクは覚悟しています　理恵
親切のつもりが仇となる不覚　満作
成人式日本を背負う面構え　たもつ
ぽっくりと死ねるつもりで生きてます　義
呆け防止のつもり新聞全部読む　義子
愛されているつもりです米を研ぐ　岳人
佳
するつもりなれるつもりが笑い合う　(志)千代

本物のつもりではめているダイヤ　瑠美子
まだ若いつもりを認めない鏡　正雄
お互いにわたしが先に逝くつもり　耕治
嫁姑互いに耐えているつもり　楓楽
人
添いとげるつもりで同じ釜の飯　光久
地
遺言のつもりで書いている日記　まつお
天
子の世話にならぬつもりの母の意地　美智代
軸
そんなつもりじゃないと金は受け取る

兼題「都合」　太田昭選

都合好い男はとんと見かけない　則彦
日程は変えぬと決めて聞く都合　准一
都合よくゆけば心が丸くなる　美智子
ふところの都合で決まる飲む相手　真理子
都合よく居酒屋がある俄か雨　まつお
人間の都合にそっぽ向く自然　隆彦
好きなことならば都合のつく時間　黒兎
政治家の都合で変わるマニフェスト　久美子
よろしくと一言加え都合きく　よしみ
是是非非というが結局都合主義　敏治
神さまの都合は知らぬスケジュール　冴子
欲しい物あれば猫撫で声になる　賢子
アメリカの都合ばかりを聞き過ぎる　みつ子
妻が居て都合の悪い事もある　弘風
いつだって涙を出せる歳となり　(志)千代
都合よく飲み屋の前で雨になる　進
やんわりと都合つかぬと言っておく　能子
都合ならいつでも空いてますあなた　保州
ご都合は聞いてくれない地震予知　和夫
先様に都合を合わす借りがある　正雄
都合良く忘れ上手で丸く生き　集一
都合良い耳を持ってる嫁姑　遠野
わたくしの都合を誰も聞きに来ず　蘭幸
噛み合わぬ親の都合と子の都合　いさお
顔ぶれを読んで都合が悪くなり　正雄
葬儀屋も元旦だけは休みます　たもつ
懐の都合と言えず咳をする　満子
都合良く自分を褒める自画自賛　集一
前例がないとは役人の都合　かずお
人間の都合にすねている地球　冨美子
御都合を逐一聞いてまとまらず　誠一
困ります私にだってある都合　理恵
佳
束の間の愛に都合が邪魔をする　弥生
約束を断わる都合考える　太郎
都合よい話はきっと罠だろう　楓楽
猫にも都合しばらく家出いたします　ばっは
赤ちゃんの都合で泣いているのです　美代子
人
都合よく着信音に救われる　美籠
地
今出れぬすっぽんぽんでおりますの　寿之
天
人間の都合で種のないブドウ　保州
軸
遣り繰りをつけ天声人語読んでいる

兼題「物好き」　奥田みつ子選

物好きですませぬこれからのいのち　求芽
スイーツをあてに飲んでる赤ワイン　進
物好きと言われて町の世話係　哲男
何にでも首突っ込んで火傷する　克己
物好きと言われ選んで五十年　美花
喧嘩する度に仲良くなる夫婦　武彦
物好きと人は笑うが君が好き　弘風
捨て猫を拾って帰って内輪もめ　なぎさ
物好きが嵩じた著名鑑定家　則彦
物好きが過ぎると軽石が沈む　柳弘
ガラクタを集め現代アートとや　哲子
貧乏が物好きだとは言わせない　弘風
物好きな彼には変わりチョコをあげ　宣子
水玉の模様で目立つペンツ買う　公誠
物好きと言われながらも出る句会　かずお
一流を出てテント暮しが板につき　昭

物好きも過ぎれば変わり者にされ　好
声色で猫のけんかに参加する　敏治
物好きやなあー雨でもゴルフかい　(田)勝弘
どしゃ降りの中をパチンコ屋へ急ぐ　完次
物好きというな若さの裏返し　直樹
物好きと言われ嫁いで福の神　哲子
たで食った妻に感謝の半世紀　和夫
物好きが人好きとなり店を出す　幸泉
物好きでおっちょこちょいで老け込まず　楓楽
金婚式物好きなんだお互いに　千恵子
物好きを通すお方の目の光　楓楽
真冬日に釣りをする人見てる人　寿之
物好きが高じてガイドボランティア　修
鎧着た蟹を初めて食べた人　堅坊
物好きと思われようと好きな道　房子
物好きが寄っていい物売っている　蘭幸
佳
物好きを自認している姫鏡　瑠美子
ゲテ物を珍味珍味と食べている　恭昌
物好きの心をもやす好奇心　好
二人して物好きだからうまが合う　能子
物好きがやがて一芸華と咲く　黒兎
人
物好きの無限に秘める可能性　朝子
地
奇人変人寄って楽しい仲間の輪　朱夏

天
物好きの視野にノーベル賞がある　冨美子
軸
よりによって彼を好きとは物好きな

「錆びる」　小島　蘭幸選

錆びかけた脳童謡でゆり起こす　よね子
D51の錆は勲章だと思う　柳伸
錆びついた脳を五七五で磨く　いさお
焼酎で前頭葉の錆洗う　集一
錆びぬようたまに震えるほど怒る　真理子
錆びついた脳にゆっくりジャズ聴かす　月子
ところどころ錆びても脳はまだ動く　求芽
こころの錆すっきり落とすコンサート　能子
定年後錆びた男はつまらない　いくひろ
錆びぬよう天声人語書き写す　満子
老斑は人生の錆誇るべし　弘一
四十年錆に風格らしきもの　すみ子
五臓六腑の錆を掻き集めたカルテ　保州
頭から足から錆が攻めてくる　由一
ゆっくりと老いの錆解く原稿紙　よしみ
緑青が時代の重み美に変える　りこ
錆びてくる脳にびっくり水を差す　たもつ
銅鐸の錆の重さも文化財　恭昌
パソコンに夢中で錆びた花鋏　宏子
錆びた釘一本茄子の鮮やかさ　天笑

体中ギイギイと鳴り出した　(江)勝弘
錆びかけた夢を転がしていないか　信子
竹光もたまに抜かぬと錆が出る　敏治
錆び止めに十年日記買いました　冨美子
いい夫婦ほどよく錆びて来た同士　耕冶
自由時間ありすぎ夫錆びついた　ばっは
錆びついた脳を熱燗で磨く　柳弘
言訳をしない男と錆びていく　義
いい錆が出た何しても目立たない　耕冶
錆び止めの特効薬は恋だろう　朝子
体の芯が錆びないように酒を飲む　弘一
老いるのは嫌錆びるのはもっと嫌　久美子
佳
錆びたネジ落ちてる僕が落ちている　真理子
生きているんだ悲しいほどに錆が出る　扶美代
自転車が錆びる駅前冬景色　希久子
少年の日が錆びている肥後守　時雄
ええ具合に錆びてきはった高倉健　楓楽
人
錆色で輝く百歳の詩人　(志)千代
地
鉄錆の臭いをさせてちちが来る　朱夏
天

錆落とす旅をつづけているのです　河内月子

軸
いい錆が出てきた私枯れてきた

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

翠洋会（大阪）（前月分）**佐々木満作報**

ほほえみのこだまでみんな和やかに　富子
窓明かりもれる家族の笑いの和　捷也
不協和音立てつつ暮す三世代　楓楽
和の中で洗濯物が乾いてる　義
生き残りゲームに勝った背の寒さ　希久子
七並べ意地悪な子が一人いる　集一
百億をゲームですった三代目　桃花
毎日をお祈りしても呆けがくる　日の出
呱呱の声廊下で待っている祈り　正雄
荒れた世にせめて祈りの灯をもとす　みつ子
鎮魂の祈りとどくかルミナリエ　浩二
被災地の空の青さをただ祈る　弘子
祈る手に力のこもる拉致家族　昭
三欲も失せて祈りが深くなる　千歩
茶を断って夫の平癒尚祈る　照子
節電に早寝早起き皆出来る　善之
のんびりも出来ぬ三途の川の辺　滋彦
可愛い子見て後悔す古い過去　公平
うめもどき夫婦もどきもあちこちに　理恵
恙無い一日でした寒の月　志華子
被災して家族の絆よみがえる　紀子
冬眠をするかのような食べっぷり　すみ子
御猪口一杯たのしくなれる自分好き　舞夢
木枯らしと落ち葉取り合う竹箒　げんえい
ただの風邪つまらなそうに医者が言う　真澄
病院もIT化されやこしい　知之
災難に遭って絆が深くなる　満作
来年の虎に今から気が揉める　蕉子
回復期そろそろと試歩の杖　恭昌

川柳塔打吹（鳥取）**野口　節子報**

仲人に無理に合わされこの始末　道子
合わせ味噌自慢の鍋に落ちついた　貴恵
お多福と此処まで合わせ五十年　勝憲
晩酌は焼酎と水六四に　清
手を合わす呆けた女房がいとおしい　重忠
落日の速さに合わせ巣に帰る　完司
居心地のよい所へと足弾む　勝誉
求め合う生ある限りやさしさを　和子
赤ちゃんがオッパイだよと泣いて待つ　禎元
求めても愛は冷たい雪になる　螢
欲しいもの泣いて求めるコツおぼえ　美知江
孤独とはちがう独りを求めてる　くにこ
握りこぶしのプライドで反骨心　みち子
プライドを持って職人仕事する　悦子
ネコ車プライド邪魔しよう押さん　久芽代
石頭変なプライドあの世まで　たけ代
プライドに掛けて打ち込む宮大工　美代子
プライドが鼻髭生やし偉そうだ　富枝
問責も胸のバッジが邪魔をして　滋
プライドが溶けて流れる露天風呂　石花菜
プライドも恥も捨てさす黄金色　節子
プライドか意地か女の潔さ　三津子
プライドを持って聳える富士の山　龍枝
秋野菜家の畑はミニ市場　善江
シーズンのカニカニカニの魚市場　泰輔
暇つぶし市場ほっつき無駄遣い　芙美子
朝市のおばちゃん元気乗せて売る　公恵
円高が市場原理をひん曲げる　泰山
健康の市場に皆が踊らされ　陽之助
魚市場肉食系の声ばかり　芳光
野菜市場南瓜大根がやがやと　紀美恵
余所行きの顔で出掛ける花市場　玲子

竹原川柳会（広島）**古田　太虚報**

年の暮れキャッシュカードは超多忙　半徳
予約時間歯科のカードを確かめる　慶子
雲行きで決め手のカード出すチャンス　汎美
トランプの賭事カードが札となり　六口
ドナーカード逝く時役に立つつもり　輝恵
レッドカードをいくつも持っている妻だ　蘭幸
巻き鮨の芯を彩る母の愛　淑子
揺るがない女の芯は母ゆずり　敬子
母の芯いつもたし算ばかりして　笑子
ほめことばシャキッとなった胸の芯　栄恵

中心のヘソ少しずつ右へ寄る　笹舟
花の芯ブレることなく生きてきた　千代美
今日もまた忘れ上手の字が悲し　規代
心技体一字忘れた相撲界　節生
一年の辛苦忘れる旨い米　弘子
いつだって亡夫のことは忘れない　房子
過去みんな忘れブランコに吹く風よ　比呂子
忘れたい過去は袋に入れてポイ　力
皆忘れただただ笑う亡母でした　幸子
自由満喫雲のんびりと空の旅　一路
退院の夢は妻とのハイタッチ　静風
北風の二番ホームに立つ私　栄香
龍の眼が光る神々しい夜明け　厚子
兄弟の絆笑顔が連鎖する　史子
ひっそりと季節はずれの花が咲く　千枝

松露川柳会（鳥取）　**小西　雄々報**

角界へ光を誘う二大関　豊枝
どじょう総理TPPに期待する　公美枝
通り魔の悲しい記事へ世の乱れ　久子
小鯛でも値段は鰯より高い　鈴枝
復興へ深い絆が糧となる　和代
活き造り鯛がうごいて箸だせぬ　智恵子
鯛料理こころも腹も満足だ　弘子
なでしこの団結力へ乾杯だ　広子
災害の怖さいまでも震えだす　静江
雑魚の言う小言へ鯛はふりむかぬ　正光
天皇の入院の記事寒く読む　雄々

和歌山三幸川柳会　**武本　碧報**

まさかなど望んでいない非常食　八重子
そんなはずないと何度も言い聞かす　豊碧
人生のまさかに弱い丸木橋　夏
まさかから始まるモノクロのドラマ　朱
まさかの時の勝負下着は持っている　章子
想定外の知らせに弾むお赤飯　みね
教育の現場まさかの水が漏れ　絹子
出来過ぎた話でまさかだと思う　准一
検査結果首をかしげているカルテ　当代
地動説まさか我が家の真下かも　孝子
まさかではなかった嫁の角隠し　順一
納得がいかぬまさかに自己嫌悪　柳昌
まさかとは思う設定しておこう　美羽
家出してまさかその日に帰るとは　起世子
あの時になんで気付いてやれなんだ　俶子
オーイお茶ちょっぴりすまん思てます　昇
非を認め夫婦の絆強くなる　富子
自己批判したら自分に戻れます　武
穏やかな心になって自我削る　イセ
反省のたびに大きくなる器　町子
反省の積木積んだり崩したり　ひろ子
反省の色が見えない今日の風　夢子
反省の階段ひとつずつ昇る　次根
一度味知ったら飲まぬ苦い汁　元三
反省の声も届かぬ雲の上　かずみ
反省を重ねて灰汁が抜けていく　純子
息子よりやさしい詐欺師さんだった　保州

佳句地十選（2月号から）

北野　哲男　選

人生の余白徒然草を読む　一歩
被害者にすれば裁きが甘すぎる　萌子
貧しさを笑い飛ばしている横座　きよし
摺り足の重さに響く能舞台　久子
その時は私にもある夜叉の面　奏子
言霊は羽二重となり棘となり　淳司
風呂敷をひらくと母の顔になる　千賀子
喧嘩して納豆くどいほどに混ぜ　華蓮
大あくびして人間の顔になる　桂子
くやしいが瀬戸内側は今日も晴れ　正

両面を焼いて人柄あぶり出す　幹子
人柄を見抜けなかった罪と罰　義雄
人柄がちょこっと見える指の先　喜久子
人徳の人でみんなに慕われる　桂香
どん底の味を知ってる二枚腰　智三
好奇心三日坊主の腰くだけ　菜摘
労わりが沁みるあなたの軽い腰　登美代
腰骨にら抜き言葉がひっかかる　和子

八尾市民川柳会（大阪）　**土谷　耀一報**

夢抱いた命きらきらよう弾む　朝子
千の風叱りに来たか虎落笛　寿之
てにをはの真ん中辺にある穽ち　柳弘

香典から差し引いておく貸した金　いさお
松葉杖外しこわごわ出す一歩　高鷲
響き合う夫婦無数の星光る　一風
私を忘れてしまった黄水仙　扶美代
繋がれた命を磨く冬銀河　華
無数の中でふるいにかけた夫です　賢子
鋭い目で判断下す試験官　雄太
修羅の目もやがて澄む日を信じつつ　紀乃
百歳の夢遠からず古希の坂　紀雄
瓦礫にも夢と希望の花が咲く　壽峰
言うまいか言おうかビール付け忘れ　草風
上達の度合を試す鉋屑　欣之
陸奥の海ほんとの笑顔まだ遠い　耀一

高知川柳社　小川てるみ報

脂っこい料理を好むのも若さ　てるみ
饒舌の柱へためる皮下脂肪　哲史
脂身のない夕餉へ箸が踊らない　三郎
母子家庭親の姿で知る世間　正躬
物言わぬ後ろ姿が標す道　多加至
美しい姿を見たい声の主　進

川柳ふうもん吟社（鳥取）**夏目　一粋報**

人生の迷路にリハーサルは無い　洋々
償いに鶴は必ずやって来る　一瑶
熊と合いリハーサルなどぶっ飛んだ　みゆき
目の前でヘビがカエルを飲み込んだ　楓花
認知症熱は三十六度五分　妻子
パンドラの箱あいて仰天する地球　(山)節子
へその緒が切れて正体現れる　振作
逆算をすると私が先に死ぬ　とも湖
尻込みする愛に玉突きしてあげる　りんこ
あれ以来波はラッパに従わぬ　無限
DNA鑑定された真人間　金祥
仰天に揺さぶられつつ年暮れる　志延
二度三度会って誤解がとけてゆく　(平)節子
リハーサルなしでもやっている浮気　清信
極悪の罪を償うのは死刑　圭一郎
神童も小町もいまは認知症　美恵子
リストラの亭主は妻の尻を追い　孝二
仰天と言うが本音はごく普通　回春子
三度目は貴男の胸に飛びこんだ　雅女
姥捨ての論議気になる年となり　春名
わたしには愛の心房五個もある　由美子
父さんの立派な嘘に仰天す　一京
ドラマ見てあの鬼嫁が泣いている　三津子
仰天だ船も車もビルの上　秀四
安産の神にお尻をさわられる　蟹郎
宝くじが当たったら償いをする　清帆
若者も酔ってしまえば認知症　隆浩
ありがとう君に償う物がない　はつ江
償いの言葉いらない金をくれ　凱柳
正体をぼかして生きた友の知恵　孝男
正体がわからぬままに票入れる　毅
冬なのにうちには蟹が来んさらん　善夫
いざとなりゃ啖呵も切れる尻がある　茂登子
ねんねんこで正体もなく寝た子達　菊香
宇宙からオタマジャクシが降ってきた　一粋

川柳塔まつえ吟社（島根）**相見　柳歩報**

新しい元素記号としての俺　芳山
新しいものにとびつきよく転ぶ　涼子
新時代来たと騒いで大阪市　孝流
吹っ切れて踏み出す新しい一歩　千里
気も若く新しがりや跳んでいる　知恵子
新婚さんお陽さまそっと目を閉じる　幸子
新鮮な鯖にしめてと頼まれる　弘充
黒子にも新年の夢日が昇る　久子
ふる里の水に生かされ過去未来　淞丘
あなたとの距離が越せない水溜り　久絵
人柄か真水の言葉染み透る　とも子
雪解けの水に浮世の塵が浮く　草庵
額縁を抜けて私のパートⅡ　美智子
去年の灰汁抜いた笑顔をさし上げる　玲子
いばら道とげを抜き抜き突き進む　左余
控え目に気を抜いている定年後　ゆき
抜群の実力持って争わぬ　長吉
肝心な話何かが抜けている　町紅
ひやひやばかりもう言わせてもらいます　畔
かずら橋ひやひやを売る観光地　注湖
ひやひやが一緒に住むと言って来た　昌枝
妻の留守ひやひや探すうまい酒　ちえこ
パンドラの箱を開け別人になる　寿代
期待した程にはとばぬ竹トンボ　桂子
空見上げ自分自身に期待する　柳歩
期待した財布の蓋は堅かった　民子
連れて来た期待どおりの嫁だった　幸代

やさしさを七草粥に期待する　博子
親と子が期待するなと酌み交す　芳恵
期待され絞り忘れのカメラマン　青帆

川柳ささやま（兵庫）　遠山　可住報

廃校の廊下に掛けたカレンダー　久子
寒波だめ命ほしくて家籠り　美緒子
節電へ寒波がぞっと身にしみる　純子
朝市の農家の顔がよく売れる　美紗子
顔のシミ鏡の傷か拭いてみる　哲男
免許証三年間はこの顔で　稠民
猪鍋と地酒寒波もまた楽し　真由
貧乏に暇なしと言うカレンダー　勇
歩くだけ歩かせてくれる大型店　啓子
ガラス窓息吹いて書く孫の顔　多美子
美人顔時代おくれと整形し　開子
カレンダー子供部屋から春が来る　可住
顔洗う心もきれいになる様に　かほる
暖冬ぼけ寒波受け入れ老に鞭　幸子
ささやまの栗餅を待つ街の秋　静子
カレンダー私の日々を知っている　照代
背をのばしあしたへ今日の顔つなぐ　美智子

川柳塔おっぱご吟社（香川）　川﨑ひかり報

偶然に孫と同じの夢をみる　はつ恵
寝過して朝食抜きの出勤だ　あきら
真夜中に寝込みをおそう救急車　よしみ
気持よいうたたね電話の憎い奴　放任
ふる里で母の寝顔を思い出す　いさむ
無愛想ではない耳が遠いだけ　弘
結局は妻の言い分みな通る　ひかり

川柳らくだの会（鳥取）　岸本　宏章報

魔のカーブお地蔵様が守ってる　紀子
しっかりとしてほしいからきつく言う　都
我の強い個性いささかもてあます　冨貴子
単線の区間「はくと」もよく揺れる　宏章
誤解からカーブになっていく話　玲子
しっかりもほどほど惚けたふりもする　孝子
野良仕事体の線も曲りぎみ　仁子
赤い糸色はあせたが解れない　清
唯我独尊個性派などは超えている　大鯰
性格にカーブがほしいなとおもう　せつ子

わかあゆ川柳会（島根）　松本はるみ報

今夜こそスリル求めて籠の鳥　恵美子
効能も風邪をひいたか置薬　澄子
人生にスリルあるから生きられる　英子
くじ買った二字違いのはずれです　ちよえ
化けたつもり尻尾が見えている誤算　かつ子
かえり咲く桜に罪は更になし　はるみ
鶴と亀どちらに丸をつけようか　好栄
のんびりもそうありたいが九十歳　博利
終章を飾るステップの旅つづく　清泉

川柳塔唐津（佐賀）　仁部　四郎報

孫子さえ電話くれぬと愚痴る老い　勝視
名誉の家いくさに生命うばわれて　實
病院で会ってご近所狭くなる　四郎
粗大ゴミうちでは絶対禁句です　輝夫
封印の過去をおとこが知りたがる　高明
おだてられその気になってまた抜かる　蜂朗

ほたる川柳同好会（大阪）　水野　黒兎報

酒席とて上役の目は錆びてない　久子
イクメンの役をとりあうおままごと　春代
仲裁役いつの間にやら輪の中心　契子
愛想よしうちの番犬役立たず　正子
さすがプロ代役なのにとちらない　信男
晩酌は祝盃今日も無事だった　勝
子沢山祝う我が子に明日の杖　長一
お祝いをしなくちゃ今日も生きている　郁子
それなりにうまく歳とり料理好き　康子
そろそろと動きましょうか立春へ　桂子
そのレシピうまくて安い料理本　公子
そんなことうちのせいやと理不尽な　幹治
ソプラノをうっとりと聴く輪唱歌　美智代
尊厳を失わずして凛と生き　扶美代
空明けて海の男は漁に出る　黒兎
「生きていて呉れて」皇后の言葉　柳童

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

スパイスを利かし今年も乗り切ろう　ほのか
一年の計は今年もありません　大輪
今年から心機一転まめになる　小雪
昇り龍今年こそはと腹くくり　佐一
身の丈で今年も春の絵を描く　冨美子

天を指す龍へ今年の運祈る　紀久子
今年こそ地球平和の風が吹け　美子
初春へ小さな愚痴を切り捨てる　登美代
神棚にほこり被っている初心　徑子
信じ切っていましたとても初でした　夕胡
初恋はこころの奥にしまっとく　よしこ
先輩の智恵が活きてる閏年　准一
閏年に貸したお金が返らない　英子
うるう年ごとに帰ってくる息子　保州
一日長く人を愛せる閏年　道夫
尽すつもり償うつもりきつい坂　輝子
恙無く運ぶつもりの落とし穴　紀子
まだのびるつもり良く食べ良く眠る　和香
生きているつもりで予約みな受ける　泰女
愛し抜くつもり砕けたガラス玉　寿子
徳積んで大往生をするつもり　めぐみ
心得たつもりの酒に呑まれてる　克子

西宮北口川柳会（兵庫）小林わこ報

雪の飛騨いろりの端で聞く民話　毅
冷たくて真っ白僕の心です　勝弘
うっとりと小袖の雪の京舞妓　哲夫
被災地は心にも雪降りつもる　哲男
雪こんこ母の背中のまるすぎて　宏造
ちらつけば明日にのばす休肝日　耕治
ひと言が過ぎて身の内猛吹雪　わこ
旅立ちの時を選んでなごり雪　遼子
希望の子ら集いてわが家賑やかに　玲子
希望だけ誰にも負けず湧いて修羅　早加永
被災地の笑顔の子等に希望湧く　弘子
購買力そそる上手な飾りつけ　基輔
着飾ってマック頬張る娘達　浩司
振り向けば希望の星も只の人　朋月
エプロンのつづれを飾るアップリケ　奮水
飾棚家族写真が笑ってる　順子
泥んこで邪馬台国を追うロマン　茂
とまり木の端でロマンが酔いつぶれ　忠
水平線の向うが見たい舟を漕ぐ　ひさゆき
ボロボロになったロマンを捨てきれず　直
蹶いた過去がロマンで飾られる　光久
ロマン追うおんなが爪を研いでいる　武彦
海の男のロマンは果てしなく青い　無限
あなたといるとこんなに熱い胸　ひとみ
五百羅漢ロマンを語る目が柔和　千代
ロマンチストあんたもうちも淋しがり　淑子
南極の氷でロック飲むロマン　章子
思わせぶりに一輪咲いた冬のバラ　美籠
父親の小さなロマン娘とデート　りこ
昇り竜の勢い僕はマイペース　武臣
生返事交わす二人の日向ぼこ　敏夫
年賀状励まし合える友がいる　盛夫
船出する二十の孫に火打石　キヨミ
伸びきっているが大事な赤い糸　美津子
嬉しい日靴がドレミを奏でてる　千賀子

川柳茶ばしら（愛知）関本かつ子報

ライバルはカーブばかりで勝負する　まみ子
地震にはもう慣れました震度3　遡行
縁の下の力で光る地味な人　幸子
いろいろなサプリを飲んでまだ不安　美千代
長生きの相と言われて迷い出す　かつ子

川柳塔なら　坊農　柳弘報

八十路坂時間が急に早くなる　博一
とりたてて何もないのに忙しい　さざ恵
いつまでも達者薄紅色の爪　次郎
恩師から学んだ事は手を抜くな　紀雄
ストレッチ加齢に備え励みます　ふりこ
備えはあるかお金はあるか親心　萌子
忙しいはずはないだろ猫がいる　芳子
ガキ大将今や恩師の子を教え　満作
正月へポチ袋だけ買ってある　弘風
想定外で備えを笑う大津波　一風
地下街をより忙しなくする師走　恭昌
理智的な花で控え目薄い紅　比呂志
その後はあなた次第と言った紅　のりこ
鬼と呼ぶ師の眼差しが温かい　道子
百歳の恩師に学ぶ心意気　恵美子
楢山へ備えて今日もスクワット　富子
紅が濃い何か言いたいらしい人　修
口紅のあまり濃いのは嫌でんな　太郎
成功の後で恩師を祭り上げ　将文
究極の恩師と仰ぐ広辞苑　いさお
出たとこの勝負はしないA型で　信子
飲め飲めと忙しく割り勘の酒を　寿之
うらやましい恩師がいない私です　勝弘
下駄箱に入る暇ない僕の靴　堅坊

紅一点枯れ野に湧いてくる泉　隆盛
繁昌亭うちの師匠は国宝や　柳弘
お陰さままだ治癒力は備えてる　朝子
あの紅が消えないうちに逢いにきて　あかり
いつ死ぬか分からないから顔洗う　真理子
うめもどき紅は最後のあがきかも　理恵
師の愛に生きた二十四の瞳　良一
道を開く忙しそうな人を選り　克己
内緒だが核シェルターが庭にある　順啓
棘のある口紅ひとり歩きする　弥生
クラス会師の一喝は衰えず　隆子

川柳塔きゃらぼく（鳥取）大塚 恵子報

豪雪がこの間のようもう師走　晴子
まだ残る旅で冬には冬帽子　千代
訃報が続く師走駆け抜けてゆく　恵子
まだ雪も来ぬのに春よ春を待つ　ゆき
リハビリが終る日待って指をおる　繭
お肌綺麗女心のぜいたくよ　未延子
酔うほどにぐちとのろけはうら返し　鶴子
名曲がしみじみ耳に沁み渡る　喜周
みちづれに先立たれしを忍ぶ日々　初枝
たましいの浮かんで映えるヤツデの葉　瑞枝
悪いくせ間際でないと動かない　亜弥
直球を受け返球出来ぬままの鬱　麗
誕生日亡母の年令の倍になり　寿々子

南大阪川柳会　津守 柳伸報

芋蔓式にいつも出てくる原発禍　祥昭
とろろに玉子特別意味はありません　一歩
一本の焼芋分けた絆です　弘子
言うなればとろろの粘り欲しい人　楓楽
内緒ごと芋蔓式に晒される　修
宇宙など底なし沼と同じです　勝弘
認知症バラが咲いてる小宇宙　郁夫
政界のゴミになったな宇宙人　和雄
酒飲めば宇宙へ飛んでいける僕　弘風
冬ざれの此処ふる里は小宇宙　志華子
人間の住める銀河はすばらしい　たもつ
父や母宇宙でひかるあの星か　ルイ子
ハネムーンまだ見ぬ孫の行く宇宙　恭昌
走っても走らなくても来る師走　シマ子
鍵っ子へ大事な母の走り書き　庸佑
走る程距離がないのについ走る　ひさ乃
食卓の上に走り書きしたメモ一枚　忠昭
書道家の筆が走っている空気　太郎
走る場所除染三陸子も耐える　なぎさ
ママチャリがチラシを持ってはしごする　栄子
不器用に走り続けて現在地　集一
隠れ持つ力未だ未だかくれんぼ　嘉住子
言い勝って心の傷がまだうずく　更紗
船頭が多くて会議五里霧中　正春
不明者がいまだ音絶つ十二月　哲矢
まだほんのひよっこですと悪びれず　柳弘
メールする若者ポスト忘れてる　柳右子
赤ポスト街の目印温い町　弘泰
ポストまでついでついでを持ち歩く　柳伸
被災地のポスト淋しくないように　直子
酒呑みの鼻とポストと消防車　克己

川柳塔すみよし（大阪）岩崎 公誠報

百歳の詩に和まされ湧く気力　裕之
触れ合って凄い気力に舌を巻く　のん子
凄技を決めた笑顔へ湧く拍手　かりん
復興を促す里に雪便り　萌
三人が寄っても知恵は湧いてこず　まつお
カラフルな毬だよきっとあたたかい　芳香
飛角より歩兵が一つ欲しい時　一歩
拘束力もたぬ仕訳に疑念湧く　桃花
もの凄い美人はあまり喋らない　克博
家出した猫一年目ニャンと鳴く　光夫
親のエゴ子のシグナルに気づかない　美籠
知恵が湧くおまじないです酒タバコ　昌紀
なでしこもボール放せばやさしい娘　たかこ
敵味方がっぷり組んで冴える技　りつえ
ここだけの話はすべて知っていた　勝弘
ライバルの怯んだ隙に湧くファイト　柳弘
いまの世に人並ですと凄いこと　半銭
凄いなと思うこどもの可能性　朝子
物忘れしやすくなって日記書く　舞夢
決意して顔つき凄く穏やかに　篤子
週末は湖畔の宿で過そうか　和代
宇宙飛行士地球へすばらしい帰還　太郎
アピールのネオンが走る夜の街　ばっは
百歳の詩集に元気もらいます　直子
十円でも湧いて出る金なら欲しい　シマ子
チャイム鳴る湧き出るごとく子等あふれ　定子

年とれば楽する事の智恵が湧き　吉太郎
もうすぐにお風呂が湧くと電子音　妙子
凄いねの母の言葉に力湧き　チエコ
わるさなら知恵もないのにすぐに湧く　(奥)五月
まだ白寿めがねせんかて辞書引ける　晴雄
ユートピアから退屈が湧いて来る　哲矢
拍手など促す芸は笑えない　公誠
毬一つ転がる程の事でもめ　蕉子
ブータンの凄さ教えた幸福度　遠野

はびきの市民川柳会（大阪）徳山みつこ報

見舞客の嘘も方便知るベッド　庸佑
嘘ついたばかりに原発怒りだす　敏
二枚目の舌が勝手に嘘をつく　光男
本当を隠す優しき嘘を知る　雄太
自分史に消せない嘘がひとつある　ちづる
片づけてなお片づかぬ師走なり　美喜
年の瀬の財布万札すぐに消え　悦子
年内は働き者に褒美なし　淳介
どことなく本心でない褒め言葉　りつえ
父さんを褒めて褒めての大掃除　喜久子
手をやいた娘介護に来てくれた　獏沓
頑張った自分をほめてケーキ食べ　千鶴子
褒められて嬉し恥かし身をよじる　フジ
褒められて深読みしてる悪い癖　佳代子
思惑があるのでここで褒めておく　泰子
褒められて底見せ出した味噌の壷　みつこ
絶景をほめるとお料理が拗ねる　扶美代
わら帽子人待ち顔の寒ぼたん　恵子
ハネムーン甘いムードも今のうち　久仁子
開宴の挨拶長く座が白け　章司
ドクターのムードはいいが治らない　ダン吉
心ない野次が雰囲気ぶち壊す　いさお
クリスマス賛歌へ白いものが舞う　美代子

川柳塔みちのく（青森）小寺花峯報

にんげんを秤に掛ける蜜の味　霜石
除夜の鐘昔は側に君が居た　小とみ
声だけははいと言って居住まいを　信子
子の好きなレモン蜜漬荷の底に　一湖
講演会暖房止めると眠気覚め　つとむ
寒い夜は母が添い寝の暖かさ　きよし
歳末に消してもらった嘘の数　呑舟
お歳暮の鱈は他人と思えない　和香子
湯タンポと犬一匹で暖まる　ひとし
人間の位置を原子に壊される　芳生
君と僕違う単位の時計持つ　則彦
復興へあたふたと皆海を向く　一呑
蜂蜜の一滴に溶け丸くなる　花匠
あたふたとキリスト去って初詣　愁女
暖房費浮かす夫婦で図書館へ　井蛙
大晦日ぐらいは撫でる足の裏　黙人
宇宙にはちょっと早めの年賀状　花峯
密柑むくはは剥いたように剥く　慕情
美女の持つ奉加帳にはさからえぬ　一花
おばあさんと話が弾む蜜りんご　劦
一匹の蜂が知ってる花暦　五楽庵

ローズ川柳会（兵庫）木村貴代子報

しかしながらこれでよいのか年暮れる　義子
きょうと同じあしたがあればありがたい　年代
お年玉出してる内が華と知る　いわゑ
置き忘れ探す間惜しい年の暮れ　貴代子
お年玉にも相場があると言う小五　てる
お年玉もらった頃をなつかしむ　みつ子
東北の地理も覚えて年暮れる　哲子

川柳大阪　山崎　珠生報

辰年に無心になろう初詣　笑風
老い二人昔話で朝迎え　喜楽
龍の凧維新の風に空高く　隆司
凡人で美人にいつも心揺れ　川童
腹割って話せる友と酌む地酒　柳弘
寝る前に今日一日のケジメつけ　彦太
原発のケジメきわめていい加減　ダン吉
踏まれてる邪鬼重たかろう辛かろう　比呂志
印鑑を押したらあんたとは他人　柳昌
無印のお陰で思いきり泳ぐ　堅坊
そないまでしてもらわんでもええのに　勝弘
澄み渡る空に邪心を吸い取られ　朝子
天下り印鑑だけで社長並み　五月
嬉しい日心の窓を明け放す　万紗子
無責任印は小沢とJR　紀雄
澄んだ目で見つめられたら恥ずかしい　美世子
幕開けの主役やっぱり澤ほまれ　鉄心
墨摺ると心だんだん澄んでくる　一歩

まだ其の気揺れる心に言い聞かす　いつふみ
阿呆になり軽く笑って我慢する　一風
癒される夜明けのスキャット澄んだ声　和
脇役が主役を食った名演技　すがお
印籠をかざして決める名台詞　珠生
白壁を見ると落書きしたくなる　まつお
年賀状今年の絵馬で龍になり　功
今年こそと毎年同じ決意する　善純
優先にされると私こそばゆい　芳香
言い訳はしないケジメの丸坊主　義明
やれるだけやって天命待つばかり　照月
豹柄に主役はりますおばちゃんは　夢子
安売りでひと皿多い夜の膳　司
ラストスパートじんわり染める誕生日　美花
摩周湖の水面に心見透かされ　かよこ

城北川柳会（大阪）　伊達　郁夫報

悲鳴挙げギャルの一団スター追う　隆男
食べたいが粘る雑魚にひと苦労　縣祚
縁が無い財テクせよと来るチラシ　榮子
求愛を派手なダンスで粘る鳥　千恵子
繊細な指怒涛のごとくキー叩く　美智子
繊細に花一輪のにじり口　麗
バーゲンのチラシにペダル精を出し　とし子
飲むうちに酒に溶け込むわだかまり　堅坊
大掃除へそくり見つけ温い鍋　弘泰
ママと行く青い童話の風の中　妻子
しゃがみこみ祖母と楽しく靴洗う　佐津乃
スペアキー渡され怖い事になる　ひさ乃

懸命になるから腹が立つのです　ルイ子
いつの日か葬り去れるチルドレン　勝弘
ヤンバルの森壊すなとジュゴン泣く　正
独り身になったとさびしいハガキ来る　弘風
選挙戦チラシの顔が気にくわぬ　宏
マツタケ味知らぬ間に秋は過ぎ　かずお
雑談の中の自慢が耳障り　求芽
血管を繋ぎ合わせた神の指　いさお
就活をチラシに探す赤いペン　一歩
年末をチラシに賭ける小商い　和夫
好き嫌いだけでは恋は語れない　集一
再建へ少しのもろみから粘る　賢子
被災地の天気予報が気にかかる　朝子
市長選終えてしずかに銀杏散る　たもつ
千人力チラシに勝るヒトのクチ　直樹
傾かぬ訳はしっかりした添え木　典子
ぞろぞろと電力会社の嘘露見　倫子
熱燗に傷は浅いと癒される　昭
強情の錆洗っても削っても　志華子
一〇〇の壁見据えて粘るだけ粘る　修
魔の卯年転じて昇竜に期する　満作
繊細なバットを効かす遼の技　素雲
繊細な鬼はトイレで涙する　仁

川柳クラブわたの花（大阪）西川　義明報

平和だな美容院から子犬出る　ますみ
遣り繰りは上手なママのエコバッグ　宏至
知れてないスポット探し紅葉狩り　知佐子
晩年になってふくらむ好奇心　美代子

気忙しさ話を合わす年の暮　いつふみ
はっきりと打とう余生の句読点　民
夫婦してあれこれそれと物忘れ　宏
いい時代生きて子孫に付け残す　晴美
喜寿迎え昨日と同じ時の音　俊子
目が会ってこの子と決めた子犬くん　義明
のめり込むそれはまぐれで始まった　はじむ
家がいい女房もいいが庭がいい　浩三
感謝して好きな事して余生いく　愛子
維新の会市長も知事も誇らしげ　博子
提灯の色が手まねき寄ってって　和子
幸せかいハイと答えて妻元気　耀一
誇りある人生ならば満点だ　正春
幸せはいつもと同じ朝が来る　孝子
紅葉狩り古歌をも想う秋日和　奈良司
あの日からまだ気にかかる嘘ひとつ　一風

長　柳　会（大阪）　坂上　淳司報

振り返れば鬼も仏も居た節目　淳司
欧州の党首悩ませ総崩れ　加修子
今年こそ再生誓い一人立ち　輝子
庇い過ぎ親は子供を駄目にする　武男
大寒へロングスカート脚庇う　エミ
庇われて軍政継いだ三代目　幸子
自慢です言葉の端にちらほらと　登美子
十五歳節目の試練眉きりり　ふみ
節目ごと老い行く脳に喝を入れ　明子
若竹の節目に芽吹く恋の花　芳野
あの人を庇うつもりが逆になり　もこ

大銀杏とっ突き交わす備え技　久美子
差がどんどんついた箱根の昇り坂　弘光
華やかに節目の中に立つ成人　一慧
人生の節目節目に母の影　正子
子育ての失敗ボチに試してる　ヒロ
子を庇う父の酒量が増えてゆく　冨美子
円高を庇ってくれぬドルユーロ　よしお
病越えおまけ人生かっ歩する　友子
愛敬とつくり笑顔は別でっせ　篤
節目には妻に感謝の贈り物　けい子
子育てが一段落で趣味多彩　和代
メス入れた胃袋庇う腹八分　隆彦
二男坊庇うてくれと駄駄こねる　敬二
苦楽とも庇い庇われ鶴と亀　靖博
脳の指示待たずに喋る軽い口　光弘
新年の固い誓いはすぐ破る　和子
夢いくつ抱いて節目の年を越え　英美
B29濃いエンピツと間違える　正博
節目乗り越えて戦友めく夫婦　正美
庇い過ぎ役に立たない躾糸　三和子
庇わないで弱気になってしまうから　孝代
老いてなお夢追い坂の昇り龍　直樹

あかつき川柳会（大阪）山本　柳昌報

眼をつぶったままの政党助成金　のぶ久
若い頃夜になると眼が冴えました　太郎
眼には眼を立ち向かいゆくライバルに　弘子
眼をつぶる母さんいつも笑ってる　一行
垂れ目でもなかなかきついお人とす　たかこ
眼力を効かし贋作見きわめる　素雲鸚
澄んだ眼に政界欺瞞に満ちている　宏
眼光が鋭くなってきた相撲　祥昭
どじょう総理うろたえぶりが眼に余る　正
卒業証書丸めて覗く未来地図　たもつ
笑い袋百歳生きる為に買う　シマ子
日日大事未来に続く道だから　美智子
未来の絵描けぬ派遣という身分　蕉子
あの世でも未来を見たくアイバンク　敏子
絆が編むネットは未来への梯子　見清
断捨離であなたの未来捨てますか　(太)昭
玉音がもっと早ければと思う　いさお
呼び出し音急き受けたらコマーシャル　和雄
生涯に何度日暮れの音を聴く　茶助
窓あけて春の音する絵をさがす　(藤)昭
久しぶり元気もらった春よ来い　勝弘
風評に染まらぬ意思を確と持つ　穏夫
大阪に染まって飴を持ち歩く　克己
何色にも染まる女の生き上手　秀夫
梅食べて元気印に染まる朝　紀乃
ほほ染めて酔ってた頃はよかったな　直子
美しい嫁が家風を染め直す　哲男
こころざしやがて組織の色に染む　桃花
好きな色に染めてと確か言ったよね　まつお
未だ元気明日も歩くと靴を買う　忠昭
節電の知恵女子会が盛り上がる　明子
災難を試練と思う強い人　(ふ)ひろし
被災地の慟哭なのかもがり笛　鈍甲
ふる里の地図塗り替える八ッ場ダム　柳弘
都構想まず文化から削られる　楓楽

富柳会（大阪）古田　千華報

欠点も含めて君が大好きだ　和子
のびのびと生きる話は聞き逃す　未知
煩悩を背負ったままの大晦日　高鷲
伏してから猫なで声をまた使う　彦次
引っ込みがつかずに含み笑いする　佳子
羨望も敵意も含み褒め言葉　深雪
一匙で旨みを添えた隠し味　壽峰
墨汁をたっぷり吸わせ愛と書く　寿之
ちょっぴりの内緒温める玉手箱　伸雄
ばらばらの塩が生み出す味の味　欣之
散る前の枯葉わずかに物を言う　晴美
こだわった僅かな欲に冬時雨　アキ
熱燗を含んだままで眼が喋る　千華
意味ありげな含み笑いをする女　恵
成程と相づち打つも味のうち　千恵
飴なめて無口になったのはわたし　華
好奇心僅かな闇を切り拓く　よしみ
僅かだが心をこめたのし袋　信子
起承転そしてわたしの秋の色　深雪
辻褄に僅かに潜む落し穴　澄子
人間が好きですぐに振るタクト　紅紫朗
何もかも洗い流した憎い波　七朗
約束のひとつが重い紅を引く　鬼焼
天よ地よ千の風まであと僅か　森子

倉吉川柳会（鳥取）　竹信　照彦報

惨状を松尾芭蕉は何と詠む　次　男
ジオパークエチゼンクラゲが占拠する　萩　江
おらが海世界遺産でお披露目だ　悠　江
松島の客を奪った大津波　重　忠
押し花の風情楽しむ栞あり　智恵子
人生も時々栞差し休む　和　子
人生の今日のページに栞する　泰　輔
家計簿の栞になった請求書　茶　子
年重ね記憶の栞消えてゆく　貞　子
それぞれの栞が語る過去の道　美代子
エネルギー燃やし米寿だ百迄も　日出子
励ましの言葉が私のエネルギー　風　露
子育てをしたエネルギー今介護　由紀子
詰ってる空いっぱいにエネルギー　けいこ
笑顔には優しいエネルギーがある　螢
飢える子に分けてやりたいエネルギー　康　子
エネルギー溜めて春待つ姥桜　喜美子
省エネで練炭火鉢に羽が生え　玲　坊
譲り葉は繁っておれど子がいない　鬼　一
譲り葉も松葉も裏白も被曝　石花菜
思いきり道を譲って転んでる　賀寿恵
譲る物あるが昼間はちと困る　盛　桜
女の城嫁に譲ってぼけている　酔芙蓉
譲りたい子や孫達は皆都会　英　子
おばあさん来るよと道を譲られる　瑞　子
六姉妹譲り着た服懐かしい　恭　子
読書癖途中はページ折りまくる　照　彦

岬川柳会（大阪）　八十田洞庵報

乳呑み児の吸う口元の愛らしさ　桜　琴
禁煙し右手口まで寂しがり　たかし
ひと休み肩身がせまいタバコ吸い　貞　夫
隔てなく垣根の支え咲いた花　令　子
谷川のさらさら奪う土石流　和　香
もみじの手乳房を押して飲むしぐさ　圭　子
TPP亀がどじょうにかみついた　清　一
煙草吸う指の細さが気にかかる　洋　子
ふる里のセシウムなしの空気吸う　冨　美
見えないが命の水を吸う根っこ　茂　平
思い出は生命の灯火油さす　峻　史
支え無く踏ん張る私強くなる　富美子
ひとり旅見知らぬ駅の花の色　和　美
吸って吐くストレスを消す呼吸法　年　子
よく喋る人が黙れば何かある　寛
いとしくていとしくてつい吸ってやる　洞　庵

川柳花の輪（大阪）　妻谷　重風報

喋るだけ喋って笑う相棒だ　ミヨノ
もうひとつさっぱりわからんTPP　昭　好
年金以外期待してないという妻　薫
絶句するニュースが多く胸痛む　勇太朗
今年も一句でぬまま過去となり　重　風
三・一一神も仏も留守だった　敬　子
花のある男言訳などしない　克　衛
残骸の街と言う名で年を越す　みちる
今年こそ絆の文字が身に沁みた　泰　子
読めないね明日の我身も天災も　やすの
やっと出た浪速に活気つける奴　楽　鬼
闇夜にもナデシコ咲けば薄明り　三　楽
上方は維新の弁士狼煙あげ　一　幸

京都塔の会　都倉　求芽報

不都合なことは記憶にないと避け　庸　佑
障子貼りそのうち死語になるだろう　綾　子
所在なさに案山子ひとりが汚染の田　ますお
スーパーの棚に迎春ある安堵　公　子
せめぎ合う喜怒哀楽のTPP　文　代
雪積もる屋根もないみちのくの冬　満　子
平成の御代いつまでと祈る春　泰　夫
冬空へサンヨーの幕降ろされる　昌　乃
八ッ場ダム九回裏が待っていた　啓　子
マンネリの旅もういいでしょうご老公　英　旺
錠剤の数が支えている寿命　欣　之
カウントダウン平穏な日々願いつつ　益　子
幸せの数だけ皺が増えました　葉　子
人生の苦労の数は数えない　義　昭
あくせくせず余命を好きな色に塗る　比ろ志
年の暮開き直って茶を点てる　肇
おかげさんであくせくしてます口も手も　万紗子
あくせくと働いたのに二番風呂　則　彦
年金の隅でせかせか老いてゆく　美　義
蘇る浜辺へ絆あくせくと　求　芽
綻びを返し針して守る愛　ふりこ
一本の針から母は着物生む　福　子
針の穴ほどのしあわせクリスマス　宏　子

ほつれないように絆に返し針　かずお
犯行時間は時計の針が知っている　昭
針の穴通ればそこは青い海　弘之

川柳あまがさき（兵庫）加川　靖鬼報

その笑顔僕の心を春にする　茂幸
残したい女らしさと可愛さを　初音
寒空に薄く輝く干支の辰　柳明
美人だと言われその気で眉をかく　佐紀子
生き甲斐を見つけ今年も頑張ろう　江美
一字付けパパになったと誇らしげ　泰子
誉められてその気になって頑張った　あかり
寒い手が背中にきてる田舎風呂　よしひさ
女らしいひとには愛が寄って来る　和子
背のファスナー上げてとその気そそのかす　美代子
氏神にあずけて帰る貧乏神　五月
あの二人その内離婚するらしい　幸香
火傷せぬ程よい恋の車間距離　里江
懐に包む傑作抱いて寝る　龍
風すでに大寒らしい顔で吹く　イサミ
おだてられその気になって掬われる　靖鬼
被災地は寒さこらえて春を待つ　野薫
たぶんそれでも明日は笑ってみせる　ひとみ
反省は本物らしい丸坊主　勝巳
無事らしい灯りがついた独居宅　純
デジタルがらしい世界を消していく　見清
元旦に禁煙誓いもう挫折　祐康
寒は清に霧立ち昇る初日の出　比ろ志
反省はするが言い訳ついてくる　りこ
将軍様メタボでないと駄目らしい　正種
筆勢の封書わが家の早春譜　奮水
君は酒僕はあなたに酔っている　かずお
ふんどしを締めてその気で四股を踏む　朋月
薬より笑う暮しが良いらしい　哲男
はんなりと生きたいものよ龍のヒゲ　美籠
美しく素直に歩く寒の月　ヨシエ

川柳藤井寺（大阪）鴨谷瑠美子報

朝刊を配る少年職決まり　シマ子
おはようしか言えないけど今日会える　勝彦
すっぴんに磨きをかける朝化粧　武志
病んで知る朝来ることのありがたさ　夏子
元日のきのうと違う今朝の風　登志子
闇夜にも朝日待ちわび生き抜こう　清之
軒雀チュンチュンと朝つれて　ヨシ枝
黄金の朝日背にうけ龍昇る　シルク
まだ暗い内に始まる母の朝　いさお
ふるさとへ光を照らす冬の朝　雄太
新鮮な朝の空気で脳洗う　一歩
松が明け注連縄降す好い朝だ　紀雄
旅立ちの朝に祈りの母がいる　悦子
目覚しが遠くで聞える寒い朝　千里
雪の宿朝一番の露天風呂　榮
カーネーションに起こしてもらう朝寝坊　ちづる
朝夕の散歩は犬に引っぱられ　アヤ子
老の朝幸感ず下呂の朝　武義
おはようの一言昨日の溝がとれ　恵美子
御来光めざす晦日の初登山　絹枝
あの人に今日も会いたい朝の駅　忠
餅焼いて絆深まる今朝の冷え　雅枝
寒い朝期待通りの雪が舞う　瑠美子
験かつぎ逃がしてあげた朝のクモ　扶美代
限りある命に朝の手を合わす　龍一
なつかしや昭和の初期のお正月　美代子
戦ゼロ朝日を浴びる彬の碑　ダン吉

豊中もくせい川柳会（大阪）藤井　則彦報

疲れたと実は言いたい膝枕　美義
温い心繋ぐ絆の一文字よ　郁子
嫌な予感小さな石に蹴躓く　庸佑
局面を一気に変える歩の一手　肇
反発も成長の予感反抗期　幸子
無頓着に見せて計算するお洒落　美津子
少子化になったか雀も来なくなった庭　千恵子
合法と言う献金の闇のなぞ　健二
建前は何を説いても伝わらぬ　行兵衛
ラッシュ時の電車は両手上げて乗る　歌留多
DNAが父母と同じでないのです　きらり
じつは俺カツラで入歯紙パンツ　幹治
疑っているなと思う目の動き　雀舎
婿殿が地雷を踏んだ真紀子さん　佐和子
合併で昔の名前懐かしい　夢
目が合うたばかりにつくり笑いする　則彦
創造へ新たな出合い期待する　巴子
騙さない土と仲好く菊弄り　靖鬼
新成人自立の意気が結ぶ帯　千代
足腰をのばして明日へとどかせる　求芽

過ぎたこと愚痴る皺より笑い皺　千枝子
酒五合いよいよジキルからハイド　(岩)玲子
何時だってコートのなかは萌黄色　菜々子
未来での想定外が嘲笑う　見清
観念したらしい神妙にじつは　美籠
五合目で初心にかえり第一歩　葉子
期限切れのじつはにこころまだ騒ぐ　美智代
写経する実は揺れてる昨日今日　弥生
手書きの賀状ぼくの心音届けます　幸雀
疑うこと覚えわたしの眼が濁る　(永)玲子
いい予感すっと朝日が覗き込む　堅坊

川柳さんだ（兵庫）　堀　正和報

初恋の人に会うのはやせてから　章子
そわそわと何処へ行くのか薄化粧　ちあき
クラス会私の過去に会いに行く　喜代子
約束のある日スキップして行こう　ひとみ
子宝も磨き損じてニート族　晃
七十億会いたい人がひとり居る　美和子
花びらで会う会わない決めている　裕美
男装に恋してしまう宝塚　祐康
会っているときが私の全てです　真由
そわそわと初めての橋渡ってる　(山)輝美
今ならば会ってさよなら言えそうだ　順子
福耳の妻に頼った宝くじ　宣子
セシウムの雨降る街へ電話する　一泉
挨拶を覚え切れない父の席　キヨミ
強がりを見せて小心手術の日　一子
会いたくて赤信号に気づかない　光久
莫大な負債かかえて円上がる　健二
大切にロマンチックを詰める箱　菜々子
再会の花はゆっくり紅を増す　茂山
しあわせな人に会いたくない病後　忠
へそくりが一枚減っている戸棚　朋月
昇り龍タコ上げ元気夢を秘め　雅司
子宝に恵まれ過ぎた娘があえぐ　好文
年毎にダイエットする住所録　正和
命綱老いの宝は諭吉さん　淑子

米子住吉川柳会（鳥取）　渡辺多美子報

財務大臣どちらか見抜くセールスマン　公一
山茶花が思わせ振りに花散らす　多美子
年の瀬は御身第一春を待つ　登美枝
わが読書すいみん薬のかわりです　宏之
厚着して汗で風邪ひきとんだエコ　礼子
賀状では元気と言った友が逝く　紀の治
引っ込みがつかぬたわごと的にされ　未延子
焼きイカの匂いが登る席の松　すみえ
錆びた釘打てば腰が曲がり出す　正二

大山滝句座（鳥取）　新家　完司報

死ぬ時は決心しなくても死ねる　照彦
なでしこが忘れられない花になる　ひかり
雪国の雪はいじめのように降る　芳山
決心はプリンに負けぬほど硬い　幸子
半分も開かず反論してしまう　玲子
ひらめきを綴るボールペンが走る　大鯰
蜘蛛は巣を念入りに組み蹲踞する　つ
ついで話にほんとのことが盛ってあるや　え
決心がなかなか付かぬ朝の床　紀の治
安心と聞けば聞くほど恐ろしい　石花菜
はずれくじせめて栞にして使う　玲坊
年毎に年賀ハガキが喪に変わる　悦子
被災地にせめて現われ昇り竜　けいこ
虎は背に竜は左腕に昇らせる　美ッ千
しなやかな花が小言を聞いている　麦青
脳の皺だんだん顔に落ちてくる　由紀子
みごとなる決断散ってゆくさくら　博子
年齢差夫が先に逝くと決め　典子
聞き上手の君に丸裸にされた　厚子
聞きたいし眠いしラジオ深夜便　知恵子
龍年の元気わたしをリードする　禮子
聞き流すだけで英語が話せるか　鬼一
決心はすぐに出来ますジャンプ傘　久絵
消費税上げて年金下げるとか　泰輔
禿げ頭オレのトレードマークです　重忠
龍の背に乗せてもらって極楽へ　恒子
鬼籍まで五年B組持って行く　正
ダイエット十数回も決心し　鈴野
呆けない話うづきながら聞いている　仁美
一夜明け去年のままのカレンダー　久子
いい人と言われる人は聞き上手　すみゑ
北風の話も聞いてあげましょう　完司

翠洋会（大阪）　佐々木満作報

余生はつらつ遠い景色を追うてみる　希久子
はつらつとラケットを手に喜寿の笑み　みつ子

はつらつと咲く花明日は考えぬ　楓楽
はつらつとしてる積りの丸い背な　日の出
はつらつと生きて締めたいエピローグ　浩二
はつらつと箱根の山を駆けのぼる　紀子
はつらつと弾む園児の笑い声　知之
はつらつと都構想練る新市長　弘子
老人力出しはつらつと二度の職　恭昌
恋射止めはつらつと来る御両人　舞夢
はつらつとした新成人に賭けてみる　昭
昇り甲斐あるぞ父の背はでかい　蕉子
昇るほど人との距離が遠くなり　すみ子
陽が昇る年相応を感謝する　千歩
昇龍の勢い願う鈴を振る　理恵
どやどやの裸へ湯気が立ち昇る　桃花
日は昇る心に夢を持つ限り　集一
被災地の友の賀状の昇り龍　捷也
人の運昇るばかりじゃつまらない　善之
屠蘇だけで天にも昇る夢心地　げんえい
床の間の昇龍今に跳び出るか　照子
朝にケキョタにホケキョと啼く努力　滋彦
おばちゃんがチラシ片手に闊歩する　真澄
新しい鼓動芽生える大阪市　満作
ボランティア度々行く娘菩薩さま　公平
吉報へぽっと灯がつく春の部屋　富子
ライバルを素直にほめているゆとり　正雄
ポストから絆をつなぐ春の使者　志華子

六甲川柳会（兵庫）　**伊勢田　毅報**

笹舟の思い出遠く兄偲ぶ　みつ子

稲刈りを終えてハイネの詩を拾う　無限
一日の始まりに聞く何曜日　博史
瞑想のポーズのままでひと日過ぐ　武彦
誕生日一日違い運を分け　基輔
一合のお酒に感謝又明日　忠貞
古稀過ぎて今日一日の重み増す　浩司
一日で明暗分ける受験生　繁義
よちよち歩きゴールはママのお膝です　利子
ハイハイを覚えた足がパパをける　遼子
よちよちと孫の歩みに明日が見え　武臣
もう一歩進めば先が見えてくる　保雄
散歩道にっこり会釈かわす朝　勤
背をまるめあぜ道歩く老夫婦　和子
散歩道バラに恋して小休止　(山)弘子
るんるんでいる時福も寄って来た　順子
るんるんで調子に乗った福財布　美恵子
言葉ほど体動かぬ歳となる　勝
乾杯のるんるん気分に居る刺客　淳
妻の酌るんるんタイムタイム掘炬燵　寿朗
ルンルンで出かけた亭主怪しいぞ　盛夫
るんるんで出かけてみたが当て外れ　康子
アラフォーの娘にやっと恋人が　(甕)弘子
凧の糸練れて根気試される　政一
ひとときを無限と思う日向ぼこ　和郎
愚痴の数聞き飽きました冬銀河　敏夫
七草粥ままごと程の菜を刻む　妙子
支え合うつもりがいつか凭れあう　登美子
初生けで白梅入れて春を待つ　千代子

同窓会白髪メタボ競い合い　恵子
最下位でも全力出した汗の価値　茂
初夢は龍に乗っての宇宙旅　千賀子
雪おんな抱いた与作が風邪をひく　毅
寒ボタンミューズのロマン秘めている　いわゑ
寂しい日せめて足音高く立て　楓楽

サークル檸檬（大阪）　**松尾美智代報**

ゴミ小屋に住んで私もゴミになる　房子
東風吹いてふる里恋しよもぎ餅　たもつ
まいど一号餅は餅屋の技光る　久仁雄
恨みますあんまり餅がうますぎて　昌紀
絵に描いた餅で終らぬネジを巻く　光久
ふる里を恋しく思う杵の音　加お里
母さんのあん餅あんが溢れそう　美智代
粳米の餅から子育てのエレジー　扶美代
寒の入り幸せ薄い鏡餅　蕉子
外は雪小豆と餅があればよい　希久子
丸も角も餅のこころは温かい　義子
餅花に幼い頃がふとよぎる　みつ子
花あられ母の笑顔や父のこと　いわゑ
かたくなな心をほぐすさくら餅　楓楽

川柳同友会みらい（鳥取）　**吉田　陽子報**

ひとつずつ亡母の語録が身に染みる　葵
木枯らしに老いた父母思われる　ひとみ
韓流にはまって妻の重い尻　美津子
お人好し芯が無いのかすぐなびく　千恵子

帯譲る孫の背中で蝶が舞う　安子
ライバルが天然だから手におえぬ　陽子
孤立する私手酌で飲んでます　寒之
こつこつと働くあかし指のたこ　温子
スリッパが先を急いでよく脱げる　(山)ふみ子
こつこつと歩くいきなり飛べぬから　久司
異常気象けじめが付かぬ衣替え　章子
甘えたくて病癒えない振りをする　美恵子
たばこ酒止めても貯金出来ません　みち子
マツタケもシメジも喉を通るまで　嘉子
子に苦労かけないように嫁立てる　敦子
立冬を皇帝ダリアひとりじめ　澄子
こっそりと出して楽しむ福袋　(引)ふみ子
問うたとて真の理由は出て来ない　正雄
黄色広げ泡立草が天下取る　華蓮
暗い過去神にこっそり打ち明ける　菜美
防護服まとい銀杏拾いする　和代
平坦な道を避けてる天邪鬼　一眸
不意の風腰を屈めるほかはない　遊子
美人だからあなたに強い風当り　はるお

岸和田川柳会（大阪）米富　淳風報

改まっては言えぬ告白好っきゃねん　昭
流されて耐えてまあるい石の運　蛙城
文句なし大正ロマンなら夢二　いさお
妻よりも猫との絆震災後　香代
正座してハンコ欲しいと躙り寄る　貫一
辛くとも未来信じて生きていく　玄也

熊野路に牛馬童子を見るロマン　幸子
触れず離れず常連客にある絆　三四郎
明るさに暗さが逃げる寒の明け　三楽
運不運どっちでも来い独り酌　笑司
明るいねとても嬉しいほめ言葉　淳風
逆上り出来て明るい空を抱く　仁緑
高原のSL若き日のロマン　隆昭
運命線こすりすぎると血が滲む　たかこ
まだご用残っているのかこの運命　龍子
理由あって夫婦の絆ちぐはぐに　珠子
鶴彬のロマン不屈の二字だろう　ダン吉
震災の絆は強くいつまでも　忠太
親と子の絆よわまる世を憂う　英夫
笑い声ぐいぐい運を引き寄せる　(石)ひろ子
昇龍の明るい年を祈るのみ　(伸)弘子
じいちゃんがガイド昭和のロマン旅　洋
運命線赤エンピツで書いてみる　房枝
お父さんと急に正座の娘の彼氏　みつ江
老年を豊かに生きる詩とロマン　義泰
天命の道に背かぬ様歩く　良一

川柳塔さかい（大阪）村上　玄也報

進む道分からなくなり天仰ぐ　冬虹
歳時記の暮しを消してゆく文化　好
アパートに文化が付いて貧しそう　朋月
携帯のながら文化が気にかかる　政男
ブータンに文化の誇り教えられ　和夫
アニメ漫画日本文化になっている　千代

歩いては一休みする歳がきた　日の出
ずれかかるズボン粋がるのも文化　像山
闇の背に弓引いていたのは味方　誠一
祖母達者薄っすら今日もルージュひく　澄空
即戦力うわさ通りのルーキーだ　健吾
口軽い男を味方にはしない　月子
うまい酒肝臓味方してくれぬ　山彦
たこ焼きを文化遺産にするナニワ　竜之介
頼まれて味方になって損ばかり　公誠
節料理日本文化が詰めてある　舞夢
食文化集まる街の食い倒れ　敏治
伝統の文化が匂う薪能　のん子
そわそわと浮気に揺れるループタイ　清
早食いは農家のうちの食文化　進
優秀賞の澤に着物が華を添え　世紀子
辛口の批評もありがたい味方　清晋
止まっては風を味方に歩き出す　篤子
味方から洩れ出していた内緒ごと　俶子
病状が進んで人を恋しがる　愿
文明的猫は毎日顔洗う　としお
下町の大衆文化すたらない　唯教
後ろから味方に打たれても戦死　雅明
振袖に天気も味方してくれる　八千代
カップ麺殺風景な食文化　扶美代
侘び寂の文化知ったか振りをする　時雄
あったかい手から味方という合図　かりん
キスシーン文化の違い見せつける　天笑
B級のグルメが築く食文化　玄也

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 みちのく	17日(土)17時締切 労る・いそいそ・今更	弘前市桶屋町4－7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53－1 小寺花峯
川柳 ねやがわ	18日(日)14時締切 出遅れ・タイトル・特技 自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9 高田博泉
川柳 藤井寺	18日(日)14時締切 宿・大丈夫・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 髙田美代子
岬川柳会	18日(日)14時締切 爪・吸・支え	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	19日(月)13時40分締切 配る・私・あえて・自由吟	豊中市中央公民館4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2－8－4 江見見清
川柳 さんだ	20日(火)13時から 芸・ウインク・泣く・珍しい 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5－2－4 堀 正和
川柳クラブ わたの花	23日(金)9時から 桜・鳩・鏡・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1－4－8 西川義明
和歌山 三幸 川柳会	24日(土)12時30分開場 うっかり・便り・命	和歌山商工会議所4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸会川柳会」
川柳塔 すみよし	25日(日)13時開場 地域・闘う・さっさと	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2－4－9 古今堂蕉子
川柳 ふうもん 吟社	25日(日)13時開場 手口・ツイッター 死んだ振り	開発ビル2F ホール 〒680-0872 鳥取市宮長205－45 萩原深雪
はびきの 市民 川柳会	25日(日)14時締切 鏡・自信・マンション・献立	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8－31－11 塩満 敏
京都 塔の会	26日(月)14時締切 境・かなり・甘い	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤号出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328－202 都倉求芽
南大阪 川柳会	26日(月)18時から あせる・身内・きちんと 雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松露 川柳会	26日(月)19時30分締切 桜・節約・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757－3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

３月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	1日(木)13時開場 装う・愛・人形	奈良市立中部公民館４F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩５分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901　安土理恵
城北 川柳会	3日(土)13時開場 まだまだ・吠える・言い訳 自由吟	旭区老人福祉センター３F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4−10−18 神夏磯典子
富柳会	3日(土)14時締切 続・直向き・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町４−１−10 TEL 0721-25-0603　池　森子
倉吉 川柳会	3日(土)14時締切 はらはら・里・伝える	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072−17 谷口次男
あかつき 川柳会	9日(金)14時締切 消える・涙・偶然・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第１ビル２階） 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586−14−102　森村美花
川柳塔 打　吹	10日(土)13時締切 頭・信頼・教える	倉吉市上灘町９　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637−３　牧野芳光
川柳塔 さかい	10日(土)13時から 転がる・主食・(折句)ミラノ	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2−16−3　河内天笑
川柳塔 まつえ	10日(土)13時45分締切 雑音・切れる・ためらう あやふや	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366　錦織禮子
川柳大阪	10日(土)14時締切 捻る・音・達者	地下鉄・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
八尾市民 川柳会	11日(日)13時30分締切 期待・笑・勝つ・雑詠	八尾神社内　西郷会館３F 近鉄八尾駅西口徒歩５分 〒581-0831 八尾市山本町北５−９−３　土谷耀一
川柳塔 わかやま 吟社	11日(日)14時10分締切 奥・包む・出番 課題吟(漢字)	和歌山ビッグ愛　〒640-8319 和歌山市手平2−1−2 兼　題　和歌山市木ノ本890−12　宮口克子 課題吟　堺市浜寺諏訪森町東2−208−5　楽原道夫
西宮北口 川柳会	12日(月)13時45分締切 味方・洩す・めらめら・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分　プレラにしのみや4F 〒662-0062 西宮市木津山町３−15　亀岡哲子
ほたる 川柳 同好会	13日(火)13時30分締切 偶然・着る・ずばり	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル５F 〒561-0813 豊中市小曽根２−４−１　水野黒兎
川柳 あまがさ	13日(火)14時締切 過去・春・とことん・自由吟	尼崎女性センター　トレピエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町２−45−８　山田耕治
岸和田 川柳会	17日(土)13時30分締切 嘘・滾る・未だ・リズム	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町２丁目13−19 中岡香代

柳界展望

★第31回川柳塔みか月川柳大会は平成23年12月11日、鳥取市鹿野町総合福祉センターで開催。参加者138名。

鳥取市長賞

羽繕いする青空が見えるまで　牧野　芳光

山陰合同銀行鹿野支店長賞

財産の一つに入れる幸福度　福永ひかり

ふるさと鹿野賞

情報の森で迷子になっている　西出　楓楽

じげ起こし賞　中原みさ子

★第3回新春たましま川柳大会は1月7日、浅口市民会館金光で開催。参加者192名。同人天位次の通り。

鳴き砂はずうっと鳴いていて欲しい　小島　蘭幸

透明になると都は生き易し　小島　蘭幸

★平成23年度川柳塔なら年間秀句賞は次の通り決定。

握ったら握り返してくる笑顔　坊農　柳弘

★平成23年度大山滝句座年度賞は次の通り決定。

寒がりを探して寒い風が吹く　牧野　芳光

★西宮北口川柳会、平成23年度年間賞は次の通り。（カップ永久保持者）両川無限（優秀賞）①河原野折杭②寺井秋果③亀岡哲子④小林わこ⑤藤井宏造・奥田みつ子

★第30回没句川柳供養大会天位追加

パンドラの箱あいて仰天する地球　山下　節子

★石橋芳山さん（理事・松江市）は第9回現代川柳大賞佳作受賞。

べったりと頬に張り付く生の音　他9句。

☆土橋螢さん（参与・鳥取市）は3月3日～11日、「ギャラリーあんどう」で、また3月12日～18日まで「しかの心」で「晴耕雨読展」を開催予定。

▽**お詫びして訂正**△

▼12月号‖P126上段8行目鳥取県議会議長賞　徳田ひろし•↓徳田ひろこ•。

▼1月号‖P123中段12行目、土屋燿一•↓土谷耀一•。P127 3段目23行目、澤田敏治↓澤井•。

▼2月号‖P45中段11行目、友人の•いる正札のような人↓友人に•。P87中段27行目、発送表現•↓発想•表現。P58下段、黒岩靖博さんの作品は川柳塔欄へ移動。P59上段18行目、一本の私•が↓一本の松•が。P60上段16行目、安芸由泰子さんの作品は

新同人紹介

宇野の幹子
—蘭幸・公弘・保州・朱夏推薦

北山の絹子
—蘭幸・公弘・保州・朱夏推薦

土屋の起世子
—蘭幸・公弘・保州・朱夏推薦

福井の菜摘
—蘭幸・公弘・保州・朱夏推薦

小谷の小雪
—大輪・英子・寿子・道夫推薦

川柳塔欄へ移動。P118上段20行目、月の前でヘビがカエルを飲み込んだ→目の前で。P100中段2行目、行く先は地図に任せて善寿卒寿→喜寿。P101中段7行目、マツケン益荒男ぶりを観るうどん→マツケンの。

▽新誌友紹介△

和歌山市　中西　誠子
紹介者　木本　朱夏

大阪市　奥田　雅信
紹介者　木本　朱夏

米子市　小野　鶴子
紹介者　八木　千代

寝屋川市　山口　晴弘
紹介者　前　たもつ

大阪市　大西　晴雄
紹介者　川柳塔すみよし

大阪市　魚住　順子
紹介者　川柳塔すみよし

大阪市　内田志津子
紹介者　川柳塔すみよし

大阪市　川口とし子
紹介者　川柳塔すみよし

高知市　三谷松太郎
紹介者　三谷　直男

常任理事会＝2月7日㈫①第18回川柳塔まつり②各地句会代表者・役員拡大会議③川柳塔高野山合祀についての内規④定例確認事項⑤各部報告⑥その他

新同人紹介

藤原（ふじわら）　ほのか
―大輪・英子・寿子・道夫推薦

予告

第18回 川柳塔まつり

と　き　平成24年10月8日（月・祝）　午前11時開場・午後1時開会
ところ　ホテル・アウィーナ大阪　4階　金剛の間（中・西）
議　事　平成23年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成24年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《 各賞表彰式・記念句会 》

表彰式　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞
おはなし　「川柳に表れた死生観」　川柳塔社　新家完司　副主幹
兼　題　「絆」　愛媛　黒田茂代　選
「語る」　鳥取　牧野芳光　選
「予定」　北海道　小沢淳　選
「偉い」　兵庫　山口光久　選
「イメージ」　大阪　鶴田遠野　選
事前投句　「美」　**(9月1日必着)**　川柳塔社　主幹　小島蘭幸　選
会　費　2,000円（記念品呈）
懇親宴　7,000円
★詳細は4月号に掲載

編集後記

★水の精覚め森の精まだ眠し　薫風

★雑誌の表紙は、雑誌の顔といえる。今月の目次下は毎月、素晴らしい切り絵で本誌を飾ってくださっている前田尋画伯。画伯の切り絵は国内はもちろんフランスやアメリカ、カナダ、アルゼンチンでも好評を博しています。余呉湖に舞い降りる幻想的な雪、老いた桜や巨木との対話のひとときなど、前田画伯の切り絵の原風景が心に響く。

★今月から「新川柳鑑賞」が始まる。昭和28年10月号から34年5月号まで川柳雑誌に連載。昭和34年7月に一冊にまとめられた。その再録である。凡例によれば、「一般の読者を目標に執筆したもので、句の鑑賞を多少解説的に興味的にしたことをことわっておく」という。路郎の闊達な筆になる鑑賞を味わいたい。

★川柳宮城野社は『大震災を詠む川柳』（河北出版センター発行）を発刊。一〇一人それぞれの3・11を川柳と散文で綴っている。筆者の多くは仙台市の被災者だ。中に本誌の誌友、塩竈市の木田比呂朗さんの体験記も…。それにしても大震災や3・11が季語のように使われる現実に胸が痛む。

★「東日本大震災」報道で、二〇一一年度新聞協会賞を受賞した『河北新報のいちばん長い日』（文芸春秋発行）を読んだ。河北新報社は仙台に本社を置き、東北六県をカバーしている。大震災で本社組版サーバー倒壊、販売員十数人の犠牲者を出しながらも新聞を発行、避難所に情報を届け続け感謝された。新聞社の崇高な使命感もさることながら、活字は勇気を与えてくれると思い至った。

★あの日から一年が経つ。あらゆる災害を世界に撒き散らした、ギリシャ神話のパンドラの箱の底には、希望が残っていたという。虹のように儚い希望ではなく、手応えのある確かな希望を、そして、多くの貴い犠牲者のご冥福を、改めてお祈り申し上げます。

（朱）

ひとこと

発送部の作業

大体毎月二十七日が川柳塔誌の発送日となっている。現在のメンバーは柳弘、満作、靖鬼、善純、茂、わこ、寿子、瑠美子。午前九時半から作業に取りかかる。事務部の方の協力の下、宛名のついた封筒が準備されている。封筒に川柳塔誌を入れて地域別に纏め荷造りをする。十二時頃にひとまず作業は終わる。

先輩からの引き継ぎで一同力を合わせている。同人誌友の皆様に無事届くことを願いながら……。

川柳塔誌の届くのが四、五日遅れたことがあって郵便局へ配送部から出向き原因を確かめた。調査の結果、事故防止に努力しますとお詫びの返事が来た。もし届くのが遅れた時、川柳塔社に連絡ください。

（鴫谷瑠美子）

▼日々忙しく、読みかけの本が何冊か積んであります。それでも朝夕の新聞だけはどんなに忙しくても読んでいます。読まないと何か残したようで落ち着かないのです。止む得ず留守をした折も留め置きのドサッと届けられた新聞の、新鮮味の欠けたニュースや家庭欄を読んでいる有様です。

▼今の大学生は新聞を余り読まないと、ある大学教授が言っていました。今何が起っているか、携帯電話、インターネットを見ればすぐ判る。新聞を読む必要はない と言う。本もネットで読める時代なのです。

▼これらの若い人が社会人になっていくと、新聞の役割も変化していくのではと危惧してしまいます。新聞は一日すぎれば新聞紙ですが、私にとっては大切な頭の体操。新聞が読めるうちは惚けてない証拠と確信しています。

（能）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（**5月号**）地名

都県
道
府
市

姓
雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

同人・誌友　マルで囲んでください。

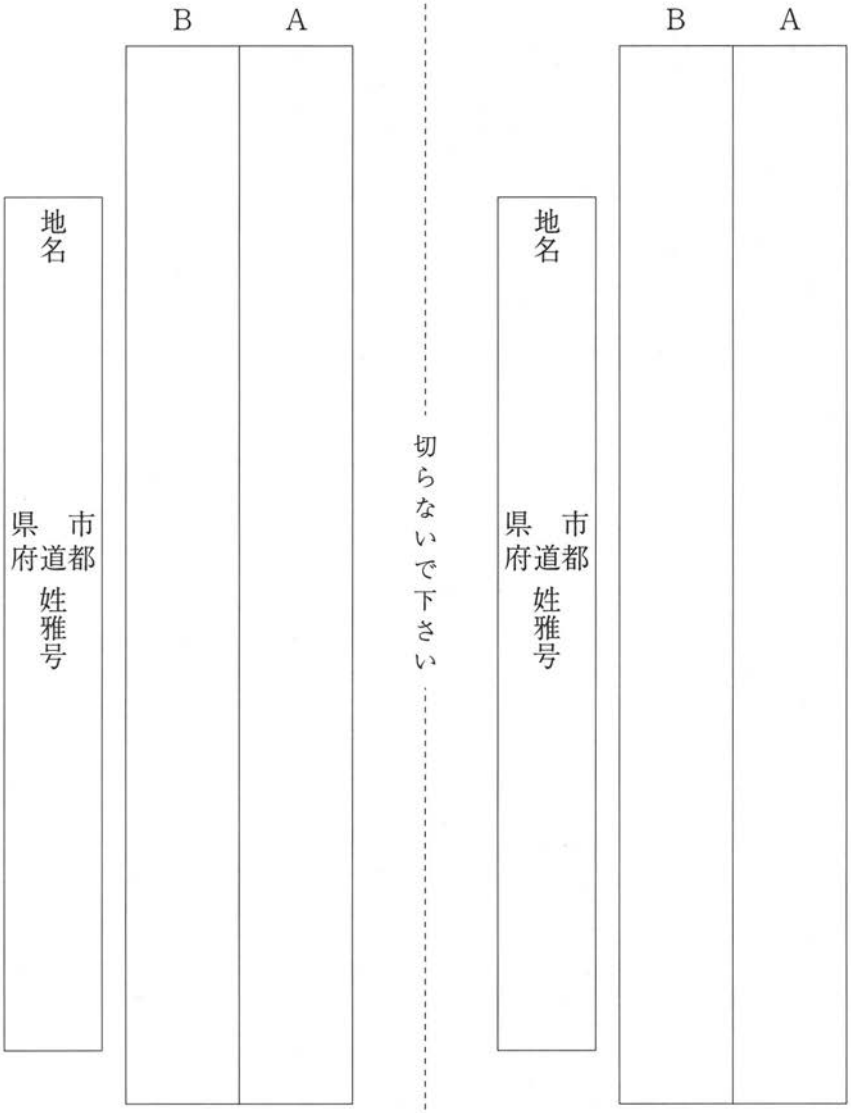
投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「ざわめく」（3月15日締切）

5月号発表

池　森子 選 ——共選—— 福士　慕情 選



左右に同じ句を書いて下さい

本社３月句会

とき　3月7日㈬　13時開場・14時締切
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。
ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
おはなし「関西力と二ユービジネス」藤井則彦
席題「　」久保田千代選
兼題「　枠　」北村賢子選
「タッチ」堀正和選
「半　分」長島敏子選
「寄せ書き」川上大輪選
「塞　ぐ」小島蘭幸選
（各題2句以内）
会費　1000円　投句料　500円（切手可）

本社４月句会
６日（金）午後１時から
兼題「　箱　」「ぶらぶら」「崩れる」
「割り勘」「向き合う」

作品募集

5月号発表（3月15日締切）
川柳塔（8句）小島蘭幸選
水煙抄（8句）川上大輪選
愛染帖（3句）新家完司選
檸檬抄「ざわめく」（2句）福士慕情選
池森子共選
一路集（3句）「築　く」小寺花峯選
「　燕　」島ひかる選
「いきなり」宮尾みのり選
初歩教室「　形　」（3句）鈴木公弘担当

6月号
檸檬抄「青　い」
一路集「敏　感」「ハーモニー」
「ひたむき」
初歩教室「のっそり」

第30年度　夜市川柳募集
第10回「田　圃」片岡湖風選
ハガキに3句　3月末日締切
投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について
(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価　八百円（送料76円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇一二年（平成二十四年）三月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス　http://www.senryutou.com/

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十四年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇一八号　川柳塔　三月号
定価　八百円（送料　七十六円）

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの
つきごま

長い間親しまれてきたオニザキの「すりごま」は、名称を変更し、パッケージを一新いたしました。
オニザキのすりごまは、元々すり鉢ですったゴマではなく、杵と臼を使った杵つき製法で出来た「すりごま」です。
今までと変わらぬ、風味豊かな味わいをご堪能ください。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイヤル）0120-30-5050

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

雑誌 05703－3